

東京大学構内遺跡調査研究年報 2

1997年度

東京大学埋蔵文化財調査室



病棟建設地点 SK03出土人形かしら



医学部教育研究棟地点 能舞台検出状況

序 文

本学構内の本格的な発掘調査は、1984年からの「理学部7号館」「法学部4号館・文学部3号館」「附属病院中央診療棟」「山上会館・御殿下記念館」の新設工事に伴ってほぼ同時に始まった。以後、年度ごとの件数の差はあるものの、これまでに50件以上の構内調査を実施している。その主たるものは加賀藩本郷邸の跡にあたる本郷キャンパスで、すでに発掘された面積は3万㎡以上におよんでいる。

本学としては、埋蔵文化財運営委員会のもとに埋蔵文化財調査室を置き、発掘調査と整理・研究を行っている。10年以上の発掘調査の蓄積によって、特に本郷構内における加賀藩邸とその支藩である富山藩・大聖寺藩邸等の推移、つまり建設と罹災、再建・拡張の繰り返しなどをかなり具体的に把握できるようになってきた。また、発掘調査で出土した遺物には貴重なものが多く、特に陶磁器は、これまでの陶磁器研究の常識を覆すものもあり、大きな収穫を得つつある。

発掘の成果は、本来速やかに報告書を刊行して学内や社会に還元すべきものであるが、90年代前半の本郷構内を中心とする建築ラッシュにともなう集中的な発掘調査のため、刊行が滞っているのが現状である。このような状況を少しでも改善し、同時に年度ごとの調査室の活動を記録することが本年報の刊行目的である。

本学は、本郷キャンパスのほぼ全域が加賀藩・水戸藩の藩邸であり、また駒場地区においても多くの遺跡が確認されている。さらに全国に散在する本学の敷地においても、遺跡が確認されているものがある。これらの遺跡の発掘調査は本学にとって一面では大きな負担ではあるが、貴重な埋蔵文化財を記録保存してその成果を刊行し、歴史史料として社会に資することもまた本学の重要な使命と考え、積極的に取り組んでいく所存である。

東京大学埋蔵文化財運営委員会委員長
副学長 青柳 正規

東京大学構内遺跡調査研究年報 2

1997年度

目 次

巻頭カラー

序文

目次

巻頭カラー解説 病棟建設地点SK03出土の人形かしら iii

第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

遺跡地図

東京大学構内遺跡調査一覧 7

1 医学部附属病院病棟建設地点発掘調査略報 11

2 医学部教育研究棟地点新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 37

3 工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他に伴う埋蔵文化財発掘
調査略報 41

4 東京大学地震研究所テレメタリング地震観測施設新営に伴う埋蔵文化財発掘
調査略報 44

5 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報 47

6 医学部附属病院看護婦宿舎地点（Ⅱ期）発掘調査略報 49

7 東京大学本郷構内（文京区湯島4丁目～弥生2丁目地先間）配水管布設替工事
に伴う遺跡立会調査報告 58

8 農学部（21世紀館）木質ホール建設予定地点試掘調査概要 74

写真図版 79

補足：東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点（中央診療棟・設備管理棟・
給水設備棟・共同溝建設地点）遺構出土陶磁器組成表の掲載にあたって 109

病院地点出土陶磁器組成表 111

第Ⅱ部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

東京大学駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点 発掘調査報告書	139
-----------------------------------	-----

第Ⅲ部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

97年度発掘調査および整理作業の概要・成果・教育普及活動	251
96年1月～97年度室員活動内容	255
受贈図書目録	258
東京大学埋蔵文化財運営委員会規則	264
埋蔵文化財調査室規則	265
埋蔵文化財調査室組織	266

第Ⅳ部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要2

東京大学本郷構内の遺跡出土製品1

工学部1号館地点出土の漆椀	原 祐一	269
---------------	------	-----

東京大学本郷構内遺跡（工学部1号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法

（財）元興寺文化財研究所 北野 信彦	289
--------------------	-----

別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）

例言

凡例

写真図版

1, 分類の目的	99
2, 分類の方法	99
補：生産地・器種に関する変更点	124
家畜病院地点からの変更点	125
参考文献	127

巻頭カラー 病棟建設地点SK03出土の人形かしら

写真の人形かしら（巻頭カラー、PL1～2）は、病棟地点SK03で出土した木製のかしらである。病棟地点SK03は江戸時代の大聖寺藩邸に位置し、天和三（1683）年以降の屋敷割り改変に伴う大規模造成に伴い掘削された採土坑で、採土坑掘削後持ち込まれた泥と共に、陶磁器類、木製品、御殿造営で使用され不要となった工具の他、鉋屑が大量に廃棄されていた。木製の人形は数点がまとまって出土しており、この他、人形かしら、指人形、腕部、脚部等が出土している。これらの人形をユニマ（国際人形劇連盟）会員 加納克己氏に実見していただき報告を頂いた。

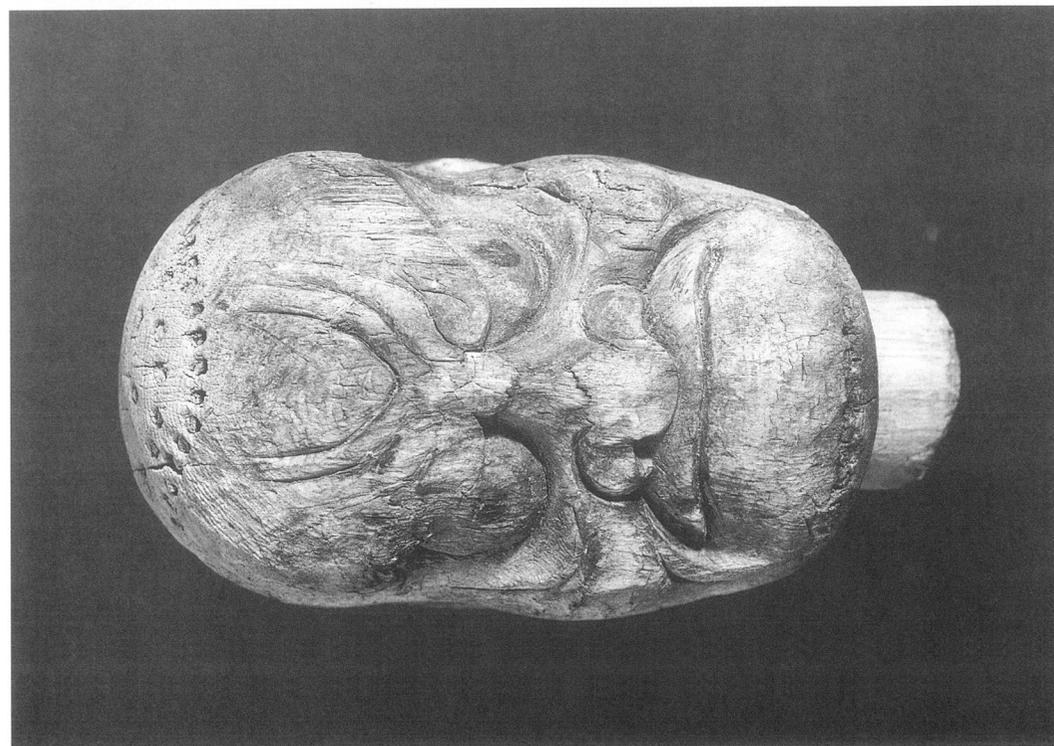
かしらは、ほぼ完形であるが鼻部と眉の一部が失われている。高さ12.9cm、面幅7.1cm、奥行き8.5cmを測る。カマ穴の径1.3cm、カマ穴の奥行き2.5cmを測りカマ穴の断面は円錐形を呈する。頭部と頸部の植毛の穴には毛を固定した木釘が残る。加納氏によれば、かしらの植毛の穴は本来丸穴が多いが、このかしらについては丸串と角串が使用されており、新たな植毛の固定には角串が使用され、かしらの補修が行われた可能性を指摘されている。

仕上げに塗られる胡粉は剥げて無くなっているが、口に赤色の顔料が残る。用材は針葉樹が使用されており、樹種同定は行っていないがヒノキに似た芳香がする。木取り方向は表柢で、仕上げに胡粉を塗布すると木目は見えなくなるが、木目の美しさを意識した木取りとなっている。製作時目安にした墨書が、眉間、目玉に残っている。また、耳下から後頭部にかけて、表面を上げるために鮫皮のヤスリをかけた跡が残っている。

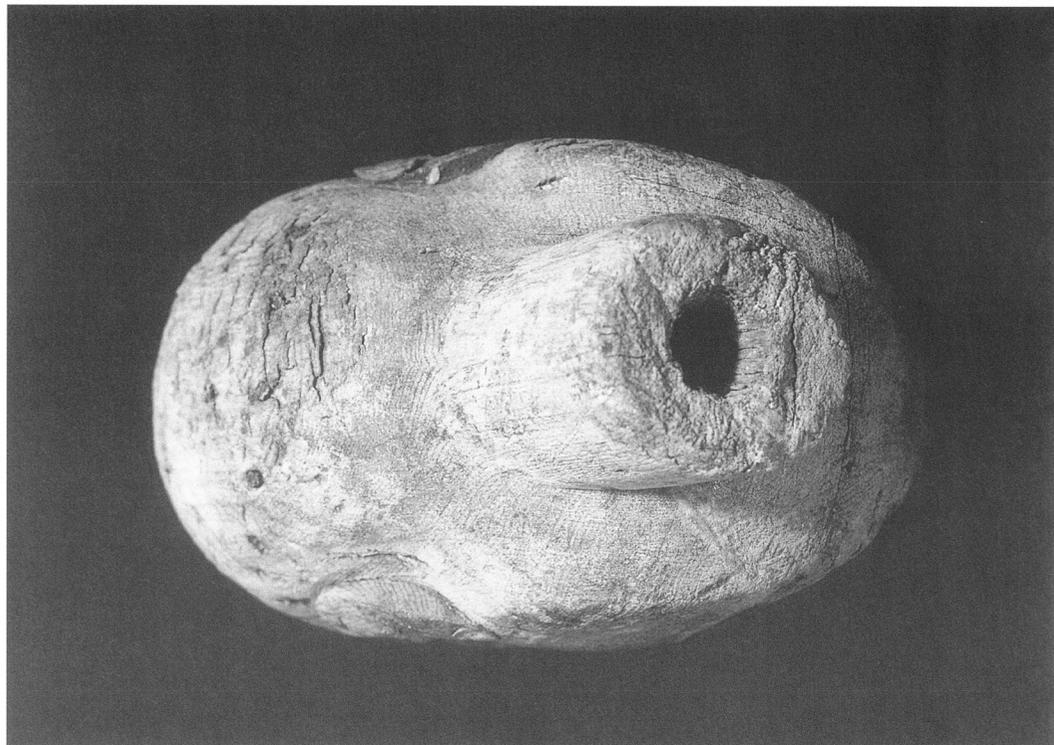
かしらの用途は、これまで実見された江戸時代の頭に見られるカマ穴の径、カマ木、胴串の太さから、本資料のカマ穴が、頸部にカマ木、胴串を固定し“操りかしら”として使用しても問題ない強度を確保できる大きさである点、眉間に見られる彫り方が、いわゆる浄瑠璃かしらに見られる彫り方（勢彫^{きおいぼり}）に多少の違いがあるが良く似ている点から“操りかしら”である可能性が高いことを指摘されている。

人形かしらの保存処理は（株）吉田生物研究所のご厚意により行った。かしらは洗浄後乾燥したために若干の割れが後頭部と側頭部に発生したため、木造彫刻や木製の工芸品、建築材などの木質の補強、木質表面の彩色の固定を目的とした含浸強化樹脂（アルタインG）を使用し保存処理を施した。

人形かしらの分析にあたってご指導いただいた、加納克己氏、（株）吉田生物研究所 宮崎英二氏 吉田浩一氏 に御礼申し上げます。 （原 祐一）



病棟建設地点 SK03出土人形かしら



病棟建設地点 SK03出土人形かしら

第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

-6400
-6200
-6000
-5800



遺跡地図1 (本郷構内)



遺跡地図 2 (駒場 I 構内)



遺跡地図3 (駒場Ⅱ構内)

東京大学構内遺跡調査一覧

表1 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
本郷	1	1984	山上会館 (U)	事前調査	1984.4.1 ～85.6.30	1500	西田泰民・ 谷豊信・小 川静夫	『東京大学本郷構内の遺跡 山上会 館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	法学部4号館・文学部3 号館 (法), (文)	事前調査	1984.4.1 ～85.3.31	2500	大塚達朗	『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	4	1984	医学部病院 (病中), (エ ネセン), (給水), (共同 溝)	事前調査	1984.10.1 ～87.3.31	7700	藤本強・ 小川望	『東京大学本郷構内の遺跡 医学部 附属病院地点』
本郷	5	1984	理学部7号館 (理D)	事前調査	1985.2.1 ～10.8	750	羽生淳子	『東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7号館地点』
本郷	3	1985	御殿下グラウンド (G)	事前調査	1985.7.29 ～87.6.30	6000	寺島・小川 静夫・倉林 真砂斗	『山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	9	1985	農学部家畜病院 (VMC)	試掘調査	1985.8.1 ～26	87	西田泰民	江戸時代遺構・遺物
本郷	6	1986	バス通り上水 (上水)	立会調査	1986.5.12 ～7.20		寺島	江戸時代武家屋敷遺構・遺物
本郷	8	1987	弥生門脇変電施設	立会調査	1987.12.15 ～16		武藤	江戸時代河川流路・遺物
本郷	7	1987	タンデム (タンデム)	試掘調査	1988.2.15 ～17	28	成瀬・武藤	江戸時代遺構・遺物, 古墳時代前期 住居址
本郷	15	1988	薬学部新館 (YS)	試掘調査	1988.8.3 ～5		寺島	江戸時代遺跡・遺物
本郷	9	1989	農学部家畜病院 (VMC)	事前調査	1990.1.31 ～3.14	1040	武藤	江戸時代武家屋敷 (水戸藩中屋敷) 遺構・遺物
本郷	10	1990	医学部附属病院外来診療 棟 (HG)	事前調査	1990.6.27 ～91.2.21	5500	成瀬・堀内 ・武藤	江戸時代武家屋敷 (加賀藩下屋敷, 上屋敷・大聖寺藩上屋敷) 遺構・ 遺物, 先土器時代
本郷	11	1991	農学部ガラス室	試掘調査	1991.6.29 ～9.19	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	13	1991	農学部7号館Ⅰ期	試掘調査	1992.1.6 ～7	8.25	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	13	1992	農学部校舎 (7号館) 新営Ⅰ期 (FA792)	事前調査	1992.10.6 ～11.16	1170	武藤	江戸時代武家屋敷 (水戸藩中屋敷) 遺構・遺物
本郷	12	1992	農学部図書館	試掘調査	1992.10.21	4	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	15	1992	薬学部新館 (YS)	事前調査	1992.10.21 ～12.18	1300	堀内・寺島	江戸時代武家屋敷 (加賀藩上屋敷) 遺構・遺物
本郷	14	1992	工学部校舎 (14号館) (工14)	事前調査	1992.11.26 ～93.2.23	1785	成瀬・堀内	江戸時代武家屋敷 (御先祖組屋 敷) 遺構・遺物
本郷	12	1992	農学部図書館 (FAL)	事前調査	1993.3.9 ～3.25	408	武藤	江戸時代武家屋敷 (水戸藩中屋敷) 遺構・遺物
本郷	16	1993	農学部7号館Ⅱ期	試掘調査	1993.4.27	15	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	18	1993	総合研究棟	試掘調査	1993.4.28	15	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	17	1993	工学部1号館	試掘調査	1993.5.25	16	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	19	1993	医学部附属病院看護婦宿 舎 (HN)	事前調査	1993.8.4 ～94.1.17	746	成瀬	江戸時代武家屋敷 (富山藩上屋敷), 古墳時代前・後期住居址
本郷	16	1993	農学部校舎 (7号館) Ⅱ期 (FA793)	事前調査	1993.11.3 ～26	1000	武藤	江戸時代武家屋敷 (水戸藩中屋敷) 遺構・遺物
本郷	18	1993	総合研究棟 (SK)	事前調査	1993.11.18 ～12.28	1007	堀内	江戸時代武家屋敷 (水戸藩中屋敷) 遺構・遺物
本郷	17	1993	工学部校舎 (1号館) (FE1)	事前調査	1993.12.6 ～94.2.10	616	武藤	江戸時代武家屋敷 (加賀藩上屋敷) 遺構・遺物
本郷	21	1993	医学部附属病院MRI-CT 棟 (MRI)	事前調査	1994.1.18 ～3.12	400	成瀬	江戸時代武家屋敷 (富山藩上屋敷), 古墳時代前期住居址, 縄文時代早 期炉穴・早・前期土器
本郷	20	1993	総合研究資料館 (TUM)	事前調査	1994.2.14 ～4.8	600	堀内	江戸時代武家屋敷 (加賀藩上屋敷) 遺構・遺物
本郷	22	1994	本郷福利施設	試掘調査	1994.4.15	3	武藤	江戸時代遺構・遺物
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟Ⅰ期 (HWI)	事前調査	1994.4.21 ～11.16	2716	成瀬・原	江戸時代武家屋敷 (大聖寺藩上屋 敷・加賀藩下屋敷), 古墳時代中期 住居址, 中世道, 先土器時代礫群
本郷	24	1994	医研1	試掘調査	1994.5.18 ～19	16.6	武藤・鮫島	江戸時代遺構・遺物

第 I 部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

表 2 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日 付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
本郷	22	1994	本郷福利施設 (HF)	事前調査	1994.8.17 ～10.17	593	武藤	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷)遺構・遺物
本郷	26	1994	法文十字路外灯	立会調査	1994.9.5他		成瀬・鮫島	法文 2 号館前江戸時代砂利敷面
本郷	27	1994	理学部 1 号館	立会調査	1994.10.3 ～18		寺島	
本郷	24	1994	医学部教育研究棟	事前調査	1994.11.17 ～4.28	1188	堀内・鮫島	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷御殿空間)遺構・遺物
本郷	25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置場 (HND)	事前調査	1995.1.30 ～3.3	45	原	江戸時代武家屋敷(富山藩上屋敷), 古墳時代, 縄文時代住居跡
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟Ⅱ期 (HWⅡ)	事前調査	1995.1.31 ～96.5.31	3380	成瀬・原 大成	江戸時代武家屋敷(大聖寺藩上屋敷・加賀藩下屋敷), 中世井戸, 古墳時代住居跡, 縄文時代晩期遺物包含層
本郷	32	1994	医学部附属病院看護婦宿舎電気ケーブル埋設	立会調査	1995.3.2		原	遺構・遺物なし
本郷	29	1995	大型計算機センター電気電機室設備 (ACC)	事前調査	1995.7.18 ～31	78	鮫島	戦時中防空壕, 江戸時代遺物
本郷	28	1995	薬学部資料館 (FPS)	事前調査	1995.7.24 ～9.2	540	武藤	江戸時代武家屋敷(加賀藩上屋敷)遺構・遺物, 縄文時代晩期の遺物包含層, 先土器時代礫群
本郷	30	1995	工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他 (AFC)	事前調査	1995.8.28 ～96.22	63	鮫島	江戸時代土坑, 弥生時代方形周溝墓, 縄文土器
本郷	33	1995	地震研究所テレメタリング観測施設	試掘調査	1995.10.18	6	武藤	遺構・遺物なし
本郷	31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会調査	1995.11.20 ～24		武藤・堀内 ・鮫島・原	農学部 3 号館前江戸時代遺物 他はなし
本郷	34		グラウンド	立会調査			寺島	
本郷	35	1993	経済学部前路面陥没	立会調査	1993.9.28		成瀬	元禄十六年の火災層 江戸時代土坑
本郷	36	1993	農学部ガス管理設	立会調査	1993.10.15		成瀬	江戸時代土坑 1 基
本郷	35	1994	経済学部前路面陥没	立会調査	1994.5.14		成瀬	
本郷	36	1994	龍岡門門衛所移築	立会調査	1994.8.24		成瀬	
本郷	37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門～附属病院	立会調査	1994.10.13		成瀬・原	江戸時代石垣
本郷	38	1994	医学部附属病院北病棟クリーンルーム改修工事	立会調査	1994.12.18	1581	成瀬	
本郷	39	1994	史料編纂所前埋設	立会調査	1995.3.10		成瀬	江戸時代遺物
本郷	40	1996	工学部全径間風洞実験室 (AFL)	事前調査	1996.1.22 ～3.7	252	鮫島	近代道路状遺構, 江戸時代井戸・土坑, 縄文時代埋没谷
本郷	33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設新営 (EQL)	事前調査	1996.4.15 ～5.2	360	武藤	江戸時代武家屋敷跡
本郷	41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラボトリー(ベンチャー)	事前調査	1996.4.15 ～6.20	626	堀内	先土器時代石器
本郷	42	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 樹木移植	立会調査	1996.4		成瀬	江戸時代遺構・遺物 江戸時代遺構・遺物
本郷	43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK 1)	事前調査	1996.5.12 ～5.18	20	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK 2)	事前調査	1996.5.20 ～6.28	102	成瀬	江戸時代遺構・遺物
本郷	45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK 3)	事前調査	1996.5.20 ～6.28	176	大成	江戸時代遺構・遺物
本郷	46	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK 4)	事前調査	1996.5.20 ～6.28	3	大成	江戸時代遺構・遺物
本郷	47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK 5)	事前調査	1996.5.20 ～6.28	3	原	講安寺墓域
本郷	48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎建設地点Ⅱ期 (HNⅡ)	事前調査	1996.11.5 ～97.1.31	525	原・大成	縄文時代遺構・遺物, 古墳時代遺構・遺物, 江戸時代遺構・遺物
本郷	24	1996	医学部教育研究棟 2 次 (医研Ⅱ)	事前調査	1997.3.10 ～4.25	416	堀内・大成	縄文時代遺構(陥穴)
本郷	49	1997	外灯整備工事 1	立会調査	1997.4.13 ～4.30		原	江戸時代遺構・遺物 江戸時代地下室・遺物
本郷	50	1997	外灯整備工事 2	立会調査	1997.4.13 ～4.30		原	焼土層 江戸時代遺物
本郷	51	1997	外灯整備工事 3	立会調査	1997.4.13 ～4.30		原	

東京大学構内遺跡調査一覧

表3 本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
本郷	52	1997	農学部(21世紀館)木質ホール建設予定地点	試掘調査	1997.7.14 ～7.18	50	大成	加賀藩邸 江戸時代遺構・遺物

表4 駒場地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
駒場Ⅰ	1	1992	教養学部保健センター	試掘調査	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	3	1993	数理学研究棟	試掘調査	1993.5.8 ～15	350	堀内	縄文時代炉穴確認
駒場Ⅰ	2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前調査	1993.8.10 ～10.20	940	武藤	縄文時代早期集石・土器・縄文時代草創期土器
駒場Ⅰ	4	1994	数理学研究棟擁壁工事	立会調査	1995.1.20 ～27		武藤	明治期の地下室および徳利検出
駒場Ⅰ	5	1994	数理学研究棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会調査	1995.1.24 ～4.12		武藤	平安時代土師器、縄文時代中期土器
駒場Ⅰ	8	1995	数理学研究棟ガス埋設工事	立会調査	1995.5.17 ～18		武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	8	1995	数理学研究所水道埋設工事	立会調査	1995.6.27 ～28		武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘調査	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘調査	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	9	1996	数理学研究科Ⅱ期棟(数理)	事前調査	1996.12.12 ～97.2.6	1160	堀内	先土器時代石器 縄文時代遺構・遺物(早期) 平安時代遺構・遺物(火葬墓)
駒場Ⅰ	10	1997	教養学部キャンパス・プラザ新営	試掘調査	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	1	1996	東大生研校舎新営	試掘調査	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	2	1996	先端研校舎新営	試掘調査	1996.5.15 ～5.17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	3	1996	先端研校舎新営	試掘調査	1996.10.24 ～10.25	20	武藤	遺構・遺物なし

表5 その他の地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
三浦市		1988	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城]	試掘調査	1988.7.4 ～8.2	80	寺島	中世城郭遺構・遺物
小石川	3	1991	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期[原町遺跡](BG)	試掘調査	1991.7.24 ～25	5	武藤	縄文時代遺物包含層(後期・晩期)
文京区	2	1991	追分学寮	試掘調査	1991.8.23 ～24		成瀬	江戸時代武家屋敷遺構・遺物
豊島区	1	1991	豊島学寮	試掘調査	1991.8.26 ～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市	7	1991	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]	試掘調査	1991.9.15 ～30	350	堀内	先土器時代石器
三鷹市	6	1991	井の頭学寮	試掘調査	1991.9.30 ～10.15	20	堀内	遺構・遺物なし
白金	4	1991	白金学寮	試掘調査	1991.11.25 ～26	10	武藤	江戸時代遺物
小石川	3	1992	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	事前調査	1992.5.25 ～6.6	200	成瀬	江戸時代武家屋敷(白山御殿, 小石川菜園)遺構・遺物, 縄文時代中・後・晩期土器
三鷹市	7	1992	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期(三广1)	事前調査	1992.6.29 ～9.19	2100	堀内・成瀬	江戸時代遺構・遺物, 縄文時代中期土器, 先土器時代石器集中
白金	5	1992	医科学研究所看護婦宿舎	試掘調査	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市		1992	理学部附属臨海実験所新研究棟(MMBS)	事前調査	1992.7.20 ～9.25	1700	武藤・寺島	中世城郭(新井城)遺構・遺物・人骨

表6 その他の地区調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	調査の概要
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会調査	1993.4.20 ～23		武藤	中世城郭遺構・遺物
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会調査	1993.5.7 ～8		武藤	中世城郭遺構・遺物
三鷹市	7	1993	三鷹国際交流会館【長嶋遺跡】Ⅱ期(三广2)	事前調査	1993.5.28 ～11.8	3280	堀内	縄文時代陥穴・集石・土器, 先土器時代礫群・石器集中部
三鷹市	7	1994	三鷹国際交流会館【長嶋遺跡】Ⅲ期(三广3)	事前調査	1994.5.13 ～8.17	1950	堀内	江戸時代農家墓, 縄文時代陥穴, 先土器時代礫群・石器集中部
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス【玄藩所遺跡】(GMB)	確認調査	1994.7.11 ～7.18	930	堀内・鮫島	平安時代住居, 縄文時代住居
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス【玄藩所遺跡】(GMB)	事前調査	1994.7.19 ～8.21	496	武藤	平安時代住居, 縄文時代住居・陥穴・先土器時代石器集中部(細石刃・石器群)検出
白金		1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘調査	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
白金		1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘調査	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏		1996	柏キャンパス校舎新営	試掘調査	1996.10.28 ～10.29	125	武藤	遺構・遺物なし

1 医学部附属病院病棟建設地点発掘調査略報

I. 調査の経過

医学部附属病院では、病院地区の基幹整備を1984年以来継続的に行っており、今回の調査はそのうち病棟の建設に伴うものである。医学部附属病院病棟建設地点（以下、病棟地点）は医学部附属病院中央病棟の南に位置する。調査は調査面積約6000㎡を二期に分け、Ⅰ期調査（HWⅠ PL.1上）を平成6年4月21日から同年11月16日、Ⅱ期調査（HWⅡ）を平成7年1月30日から平成8年5月31日、延べ2年間にわたって行った。また、病棟建設に伴う樹木の移植、共同溝縦坑に関連する調査（HWK）を平成8年5月20日から6月28日にかけて行った。

II. 立地・歴史的環境

医学部附属病院病院地点（中央診療棟地点・設備管理棟地点・給水設備棟地点・共同溝建設地点 以下病院地点）、医学部附属病院外来診療棟地点（以下外来地点）、看護婦宿舎地点、MRI-C棟地点、ゴミ置き場地点の調査によって、病院地区の自然環境・土地利用の概要が明らかになってきた。

病院地区は、本郷台地の東端、赤羽台から続くM₂面に対比される本郷台地下位面に位置し、現地表面の標高は16mを測る。病院地区では、本郷三丁目と春日町付近を源流とし、不忍池方向の沖積低地に開く、幅広く浅い谷地形が存在するが、病棟地点では、北側で北東方向に伸びる支谷を確認しており、このような谷がいくつか存在していたと考えられる。自然地形は谷の影響から北に傾斜している。谷の堆積状況から平安時代にはほとんどが埋まり、江戸時代の造成によって旧地形が平坦化されている。

病院地区では縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡の存在が確認されており、病棟地点でも縄文時代から古墳時代の遺構・遺物の検出が予想された。江戸時代の病院地区は、加賀藩邸・大聖寺藩邸・富山藩邸・越後高田藩邸・講安寺に該当する。病棟地点では加賀藩邸、大聖寺藩邸、大聖寺藩邸と隣接する講安寺に関連する遺構の検出が予想された。元和二・三(1616・15)年前田家三代藩主利常が大久保相模守忠隣邸跡地を拝領し、加賀藩下屋敷が成立する。講安寺は元和二年に加賀藩下屋敷の東に寺地を拝領する。利常の子利治は寛永四(1627)年下屋敷の一部に居を構え、寛永十六(1639)年六月、加賀藩から分かれて初代大聖寺藩主となり、加賀藩から屋敷地を借りる形で上屋敷が成立する。天和三年以前の調査地点は黒多門邸と呼ばれた加賀藩の証人屋敷に該当する(図1)。証人屋敷とは大名重臣の子弟を人質として差し出させ、大名藩邸内の証人屋敷で監督する証人制度(家中証人制)によるもので、証人制度は寛文五(1665)年廃止されるが、証人制度廃止後も黒多門邸は開番・足軽等の長屋として継続的に使用される。その後、天和二(1682)

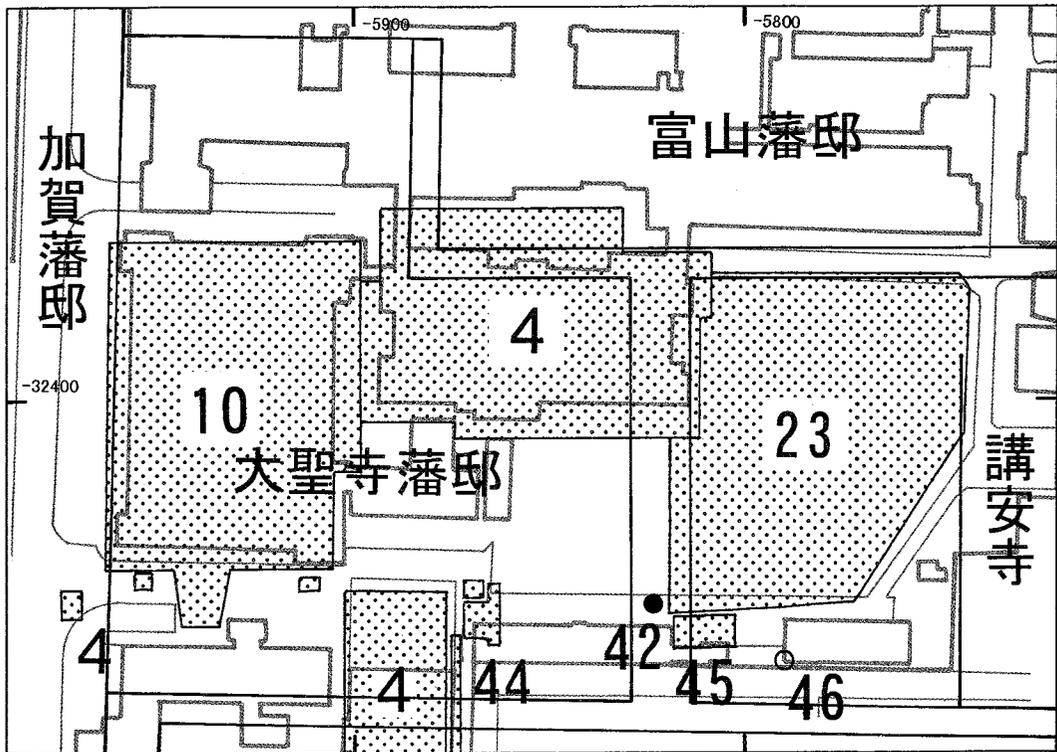


図1 天和三年(1683)以前の病棟地点(23)周辺(藤本 強『埋もれた江戸』より作成)

年十二月二十八日の“八百屋お七の火事”によって加賀藩邸、富山藩邸、大聖寺藩邸のほとんどの部分が全焼したのを契機に、屋敷割りが大きく改変される。天和三年以降、黒多門邸と大聖寺藩邸の地境に設定されていた富山藩邸への道が講安寺との地境まで移動し、黒多門邸のほとんどの部分が大聖寺藩邸となる(図2)。天和二年以降大聖寺藩邸は度々火災に遭っており、全焼したとされるものに、元禄十六(1703)年十一月の“水戸様火事”，享保十五(1730)年一月，元文三(1738)年一月，類焼したとされるものに文政八(1825)年十二月の火事があるが、屋敷割りは天和三年以降の屋敷割りが幕末まで踏襲される。

Ⅲ. 調査の結果

1. 基本層序(図3)

調査の結果、のべ11枚の生活面から約4,000の遺構を検出し、遺物コンテナ約2,700箱の遺物が出土した。F～H層は自然堆積層で、北側の谷に向かって緩やかに傾斜している。G層の上部には、富士山の新时期テフラと考えられる黒色スコリアを多量に含有する黒色土が堆積している。H層は、褐色部分と暗褐色部分が斑状に混在する褐色土層である。この褐色土は、本郷キャンパス内で谷筋を中心にほぼ普遍的に確認されており、御殿下記念館地点では、本土層の上面より堀之

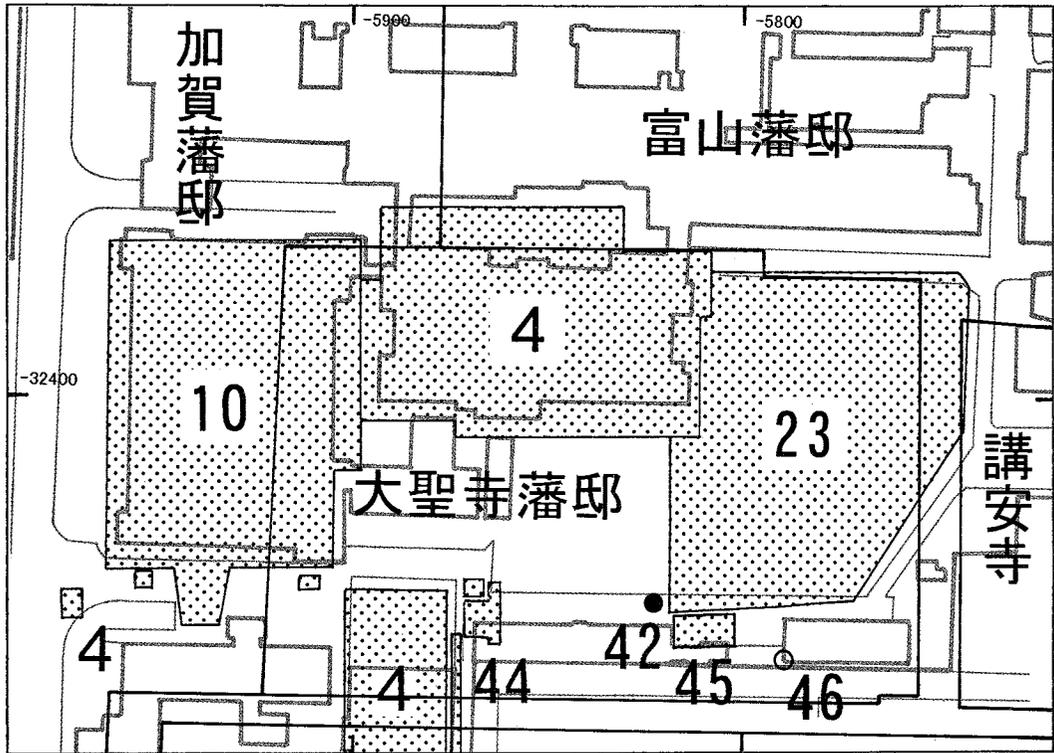


図2 天和三年(1683)以降の病棟地点(23)周辺

内式土器が出土している。本地点においても本土層上部より加曾利E4式土器が出土しており、縄文時代後期初頭頃に形成が終了したと考えられる。F～H層は沢の中心部で約1mと厚く、縁辺部に移行するにつれて漸移的に薄くなり、F、G層は確認されなくなる。

藩邸区域A～E層・講安寺区域A～C層は江戸時代の造成に伴う盛土層である。調査地点は江戸時代の早い段階で谷の北斜面が切り土され雑壇状になっている。E層、D1～3層は加賀藩邸下屋敷として利用されていた時期の盛土である。D1面は証人制度廃止後、聞番・足軽の長屋として使用されていた時期の生活面である。D面焼土は天和二年の火災層で、約10cmの厚さでD1面上面に堆積している。D面焼土上には上段と下段の比高差と、西側の大聖寺藩邸を平準化するためロームブロックを主体とするC層を盛土し、表土を固めC面としている。C面上には元禄十六年の火災の焼土が盛土(A層)と共に廃棄され、この造成後の生活面となるA面には、宝永四(1707)年に噴火した富士山の火山灰(宝永スコリア)を堆積した遺構を検出している。

以下、調査地点を江戸時代以前、藩邸区域、講安寺区域に分け、各区域各面について述べる。

2. 江戸時代以前

F・G・H面(図4)

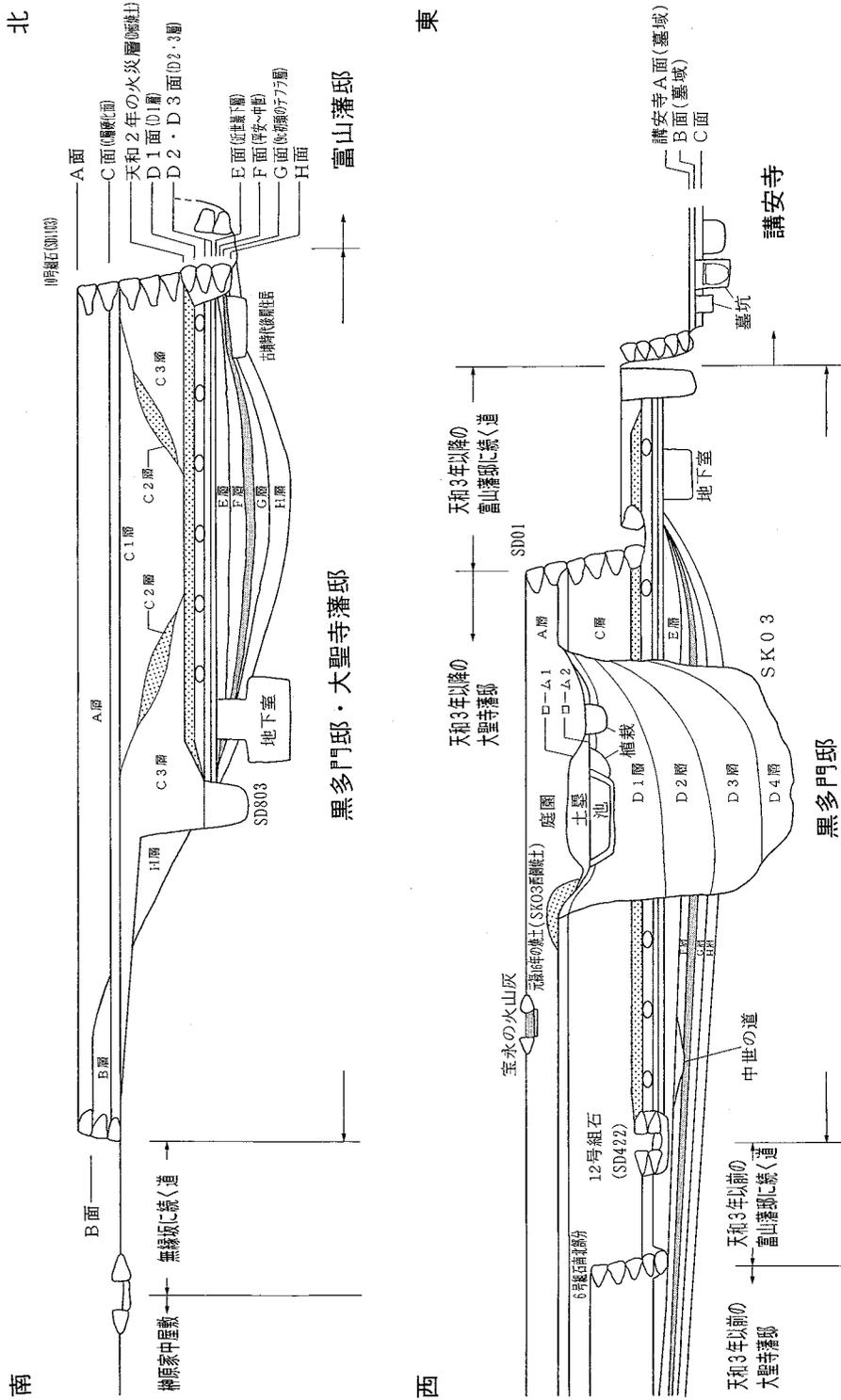


図3 病棟建設地点基本層序模式図

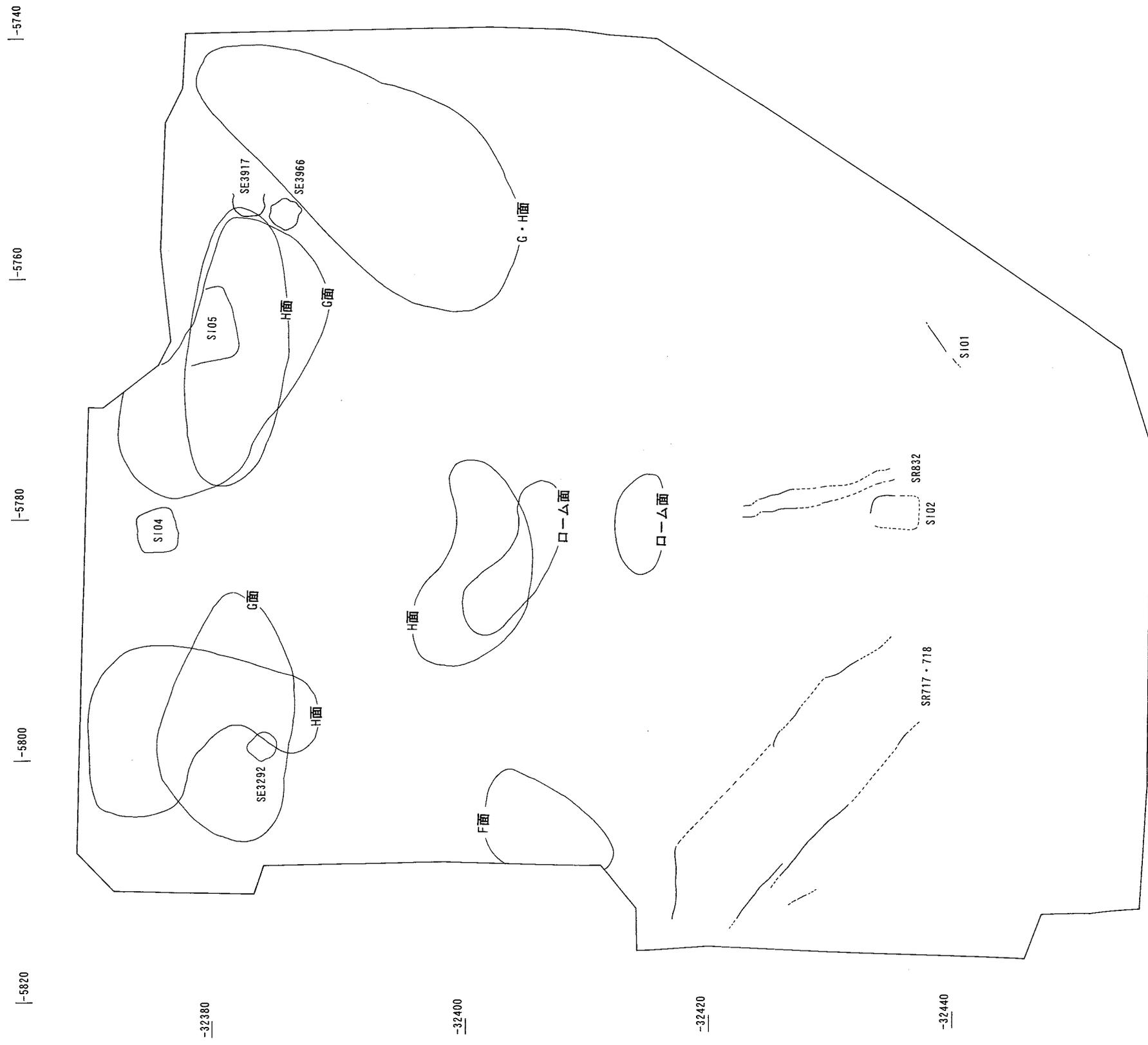


図4 江戸時代以前 F・G・H面

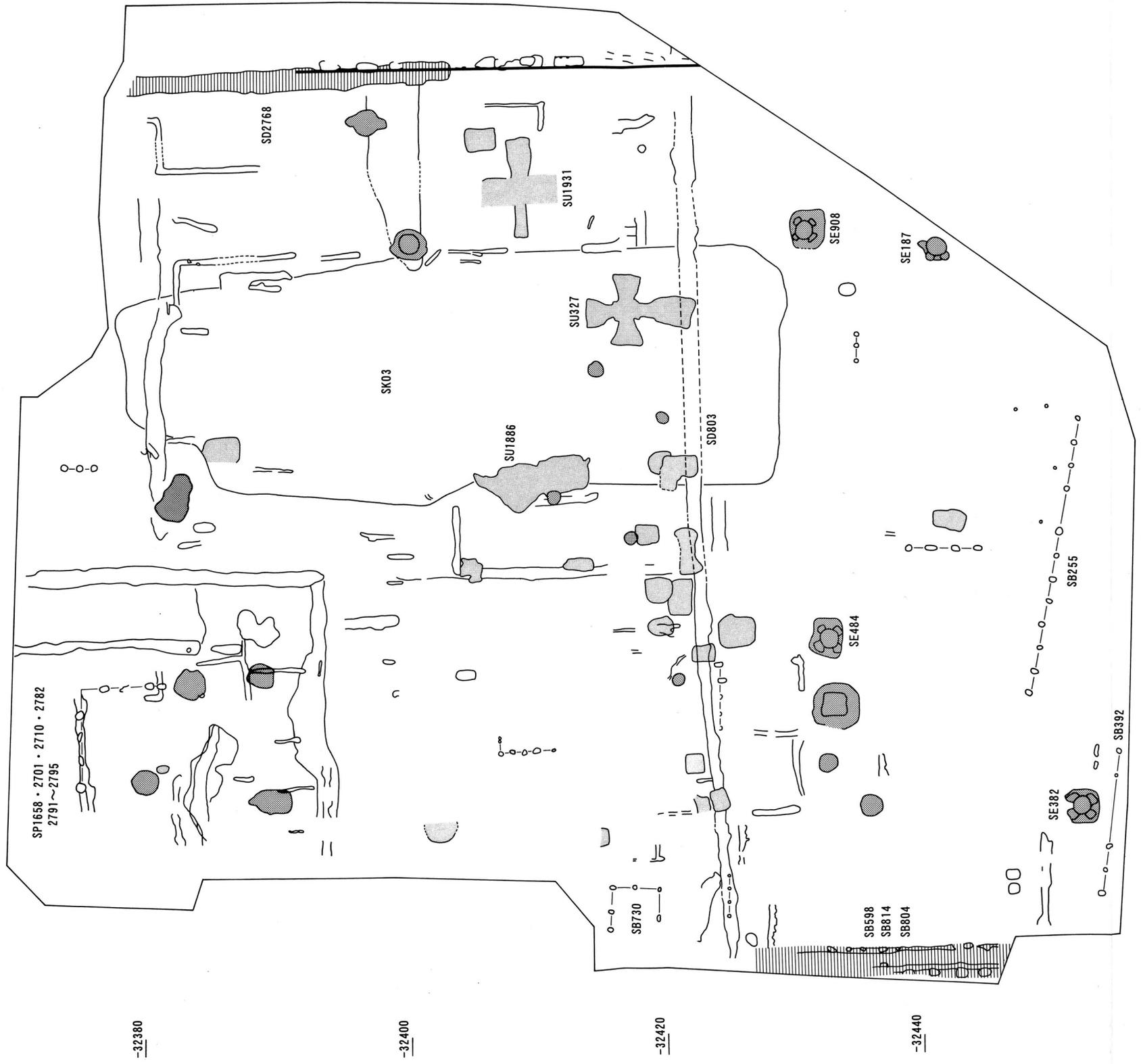
-5820

-5800

-5780

-5760

-5740



凡例

- 講安寺との屋敷境
- 井戸
- 屋敷境施設
- 地下室

図5 藩邸区域 D2・3・E面

G・H面では縄文時代のピット群，集石，古墳時代の住居址を検出している。ピット群は，H面からG面にかけて存在し，谷を挟み環状に分布している。住居址は，沢の両側に分布し，4基を検出した。谷の北斜面上に位置するSI04，SI05は，谷筋に近いこともあり，G面堆積範囲で確認された。そのうち，SI04は遺存状態が良好で，北壁に造りつけのカマドをもつ古墳時代後期の住居址である。

井戸（SE3292，SE3917，SE3966）は調査地点北側に分布する。SR717・718，SR832は道路状遺構で，搦鉢状の断面形態を呈する遺構で路面は硬質である。いずれも中世段階に帰属する遺構と考えられる。

3. 藩邸区域

D 2・3面・E面（図5）

黒多門邸が証人屋敷として使用されていた寛文五年頃を下限とする。屋敷境施設，溝状遺構，礎石列，井戸，地下室，井戸等を検出している。病院地点，外来地点で指摘されているように，遺構の主軸方向は，N-6°-Wに平行もしくは直行する遺構軸から，真北もしくは東西を示す遺構軸に移行する。

調査地点は北斜面が溝状遺構SD803を境に切り土され，切り土された北側にE層，D 2・3層が盛土される。SD803を境に北側と南側の比高差は最大約2mを測る。SD803の遺構軸はN-6°-Wを示す。講安寺との地境にはSD803と直行する軸を示すSD2768が構築される。

SB598，SB814，SB804は黒多門邸と富山藩邸への道との地境に構築された屋敷境施設である。黒多門邸と講安寺との屋敷境には塀の基礎が構築される。両屋敷境施設の遺構軸は真北を示す。建物跡もしくは塀の基礎と考えられる遺構には，SB255，SB392，SB730，SP1658・2701・2710・2782・2791～2795がある。SB255，SB392は他の遺構とは異なる遺構軸を示す。SU327，SU1886，SU1932は大型の地下室である。SU327，SU1931は入口となる縦坑に，平面形が羽子板形を呈する部屋が連結しているいわゆる麴室タイプの地下室である。井戸は小型の井戸と大型の井戸を検出している。SE187，SE382，SE484，SE908は方形の掘り込みの中に円形の掘方があり，掘方の周りには上屋施設の基礎と考えられる柱穴4基を検出している。

D 1面（図6・7）

証人制度が廃止され，黒多門邸が聞番・足軽等の長屋として使用されはじめる寛文五年頃を上限とし，邸内が全焼する天和二年を下限とする。聞番・足軽等が居住した長屋群を明確な遺構として検出した。SD803はこの時期までには廃絶されるが，南北の段差はD 1面でも踏襲され遺構軸が東西を示す土留めの石垣SB772が構築される。北側で数10cmの盛土造成が行われ，それに伴い富山藩邸の道との屋敷境に，病院地点で検出した10号組石の続きであるSD1103が構築される（PL.2）。SD1103は2～3段の石垣石をやや雑に積み重ねた石垣溝で，石垣石の間には破砕礫が

詰め込まれ補強されている。富山藩邸に続く道との屋敷境には病院地点で検出した12号組石の続きであるSD422が構築される。

長屋群 (PL.1 下)

長屋群は、北側全域に約10cmの厚さで堆積する天和二年の火災層（D面焼土）によって覆われていた。火災の翌年から開始される屋敷割りの改変に伴い、南側では焼土の片付けが行われ、北側の焼土は残され、調査地点全域にC層が盛土される。北側の焼土を残して盛土が行われたことで長屋群が良好な状態で検出した。D面焼土はワラ等の混入物から主に壁土が焼け落ちたものと考えられる。焼土から炭化した畳、長屋の建築に使用した釘を出土したが、瓦・建築材はほとんど出土していないため、建築材は焼土を均す際に取り除かれたと考えられる。この他、被熱した碗・皿・鉢・播鉢等の日常生活用具、銭、碁石を検出しており、聞番・足軽等の生活の一端を伺わせる資料である。

長屋群は大きく、長屋、路地、共有施設等からなる。長屋建物はSD1103脇の東西に伸びる北側の1棟と、その南側に南北に伸びる7棟を検出した。各棟は側溝を有する路地によって区画されている。南側の7棟の長屋群は中央の長屋を中心にほぼ線対称の配置となっている。路地は砂利・瓦を主体とした土を突き固めた硬質な路面である。側溝は掘方の側壁に板材を杭で固定している。長屋群を検出したD1面は北に向かって緩やかに傾斜しており、側溝に流れた生活排水や雨水は、石垣溝SD1601、SD1603を流れSD1103に排水される。

長屋の礎石には扁平な川原石が使用されている。掘方は認められず造成時礎石が配置され、埋設されたと考えられる。礎石表面に付着したスス跡等から、二寸角の柱材を使用していたと考えられる。焼土から瓦が出土していない事と、柱に掛かる建物の加重を考慮すると長屋建物は板葺きもしくは茅葺きの建物であったと考えられる。この他、礎石の上面には礎石の配置や柱の配置を示すと考えられる「三ノ五」「三ノ七」等の墨書や墨壺を用いた「トンボ」を切っている例が認められる。北側の長屋建物は礎石の墨書がSB1611からSB1612へ通し番号になっている。SB1611とSB1612の間には石垣溝SD1601、SD1603を持つ路地があり、道路を跨ぐ一棟の長屋で道路の部分に門が付設された長屋門と考えられる。

長屋の基本的な一部屋の間取りは、北側の長屋建物が間口二間、奥行き二間半、南側の長屋建物が間口二間、奥行き三間である。概ね間口から一間程が硬く突き固められた土間となっており、仕切の壁際には炉状遺構が配置されている。炉状遺構は床面に掘り込まれた方形、円形、不整形の掘り込み内に、粘土、瓦、板等を用いて枠が設けられている。この他、粘土枠が床面から突出したものや、炉床に火鉢や播鉢を入れたものがある。枠の中には灰が充填され、ほとんどの炉状遺構に被熱した痕跡が認められる。灰の中には被熱した動物骨が認められており、炉状遺構は調理を目的とした遺構と考えられる。

共有施設として井戸、厠、流し状遺構、ごみ穴と考えられる長方形土坑がある。井戸SE1706、

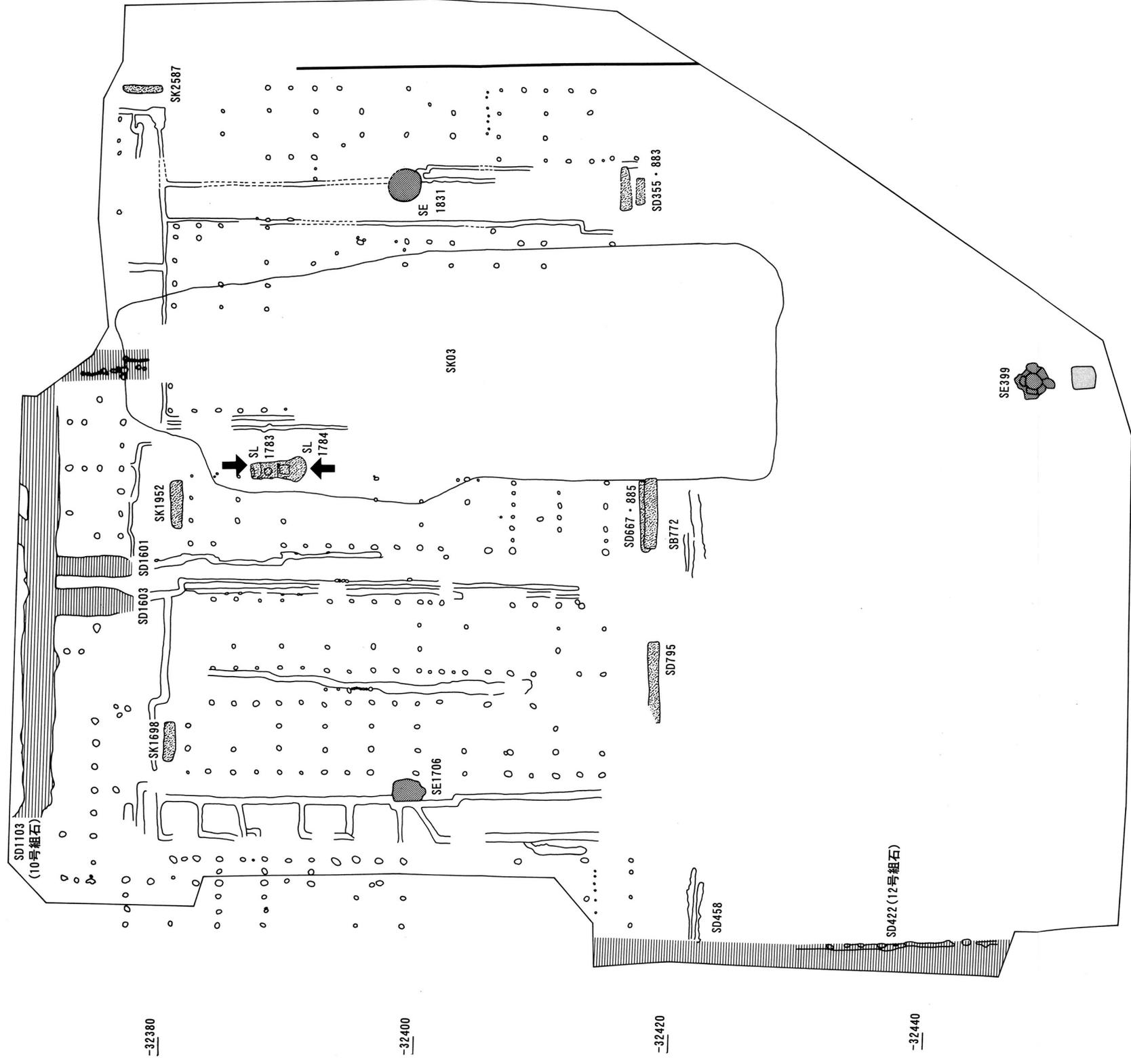
|-5820

|-5800

|-5780

|-5760

|-5740



-32380

-32400

-32420

-32440

凡例

- 講安寺との屋敷境
- ▨ 井戸
- ▨ 長方形土坑
- ▨ 屋敷境施設
- ▨ 地下室
- ▨ 便所

図6 藩邸区域 D1面

SE1831は東西に並ぶ。厠SL1783, SL1784は長屋区域のほぼ中央に配置されている。方形の便漕を持つ厠と円形の便漕を持つ厠があり、北側と南側には出入り口と考えられる硬化面を確認している。流し状遺構は角材による枠組みの中に、簀の子状に板材が敷き詰められ、遺構のコーナーには排水溝へ続く溝が敷設されており、共同利用の洗い場（流し）と考えられる。ごみ穴と考えられる長方形土坑は、路地の奥や長屋建物の脇に配置されている。掘方の側壁に木枠が組まれ杭で固定されている。遺構の底には砂が充填されている。

南側

地下室、井戸、石組溝を検出している。SE399は天和二年の火災に伴い廃絶されている。SD458は石組溝である。建物跡はD1面以降の攪乱により確認できなかったが、検出した遺構から長屋群のある北側とは異なった土地利用が行われていたと考えられる。

C面（図8）

天和三年以降の屋敷割り変更に伴う盛土造成開始を上限とし、元禄十六年の火災を下限とする。屋敷割改変に伴う大規模造成と造成後の大聖寺藩邸の遺構を確認した。

大聖寺藩邸と黒多門邸の間の富山藩邸への道が黒多門邸と講安寺の地境に移動し、黒多門邸のほとんどの部分が大聖寺藩邸となる。屋敷割の変更に伴い、西側の黒多門邸と黒多門邸を平準化するため調査地点全域に盛土（C1～3層）が行われる。C1・3層の間には焼土を主体とするC2層が挟まれている。C2層に含まれる陶磁器は約9割が肥前産の高級磁器で、製作年代から天和二年の火災によって被熱した陶磁器と考えられるが、D面焼土から出土した日常雑器を中心とする陶磁器類とは様相が異なる。加賀藩邸に該当する医学部研究棟建設地点でも天和二年の火災によって被熱した陶磁器が出土しており、C2層と同意匠の製品が大量に含まれることから、C層は加賀藩邸内から瓦礫と共に持ち込まれた盛土と考えられる。

SK03は盛土造成後掘削された採土坑で、東西約20m、南北約50m、深さ約5mを測る（PL.3下）。覆土は灰黒色の水成堆積土を主体とし、自然堆積に見られる均一な堆積でなく、ブロック状の泥炭が上層から下層まで確認できることから、人為的に廃棄された泥と考えられる。陶磁器の他に工具、日常生活用具を主体とする木製品が大量に出土している。下層には広範囲に堆積する鈎屑の層があり、厚いところで約50cmの厚みがある。加賀藩邸でも天和二年の火災を契機に大規模造成と御殿の造営が行われており、C層の遺物出土状況、SK03に廃棄されたごみから、邸内で切り土・盛土に伴う土の移動、御殿造営に伴うごみの廃棄が行われたと考えられる。

富山藩邸への道（SR1826）は道幅が約9mで、路面は瓦・砂利等で硬く突き固められている。道幅は天保11年（1842）御上屋鋪（加賀藩前田家）御地面之絵図（前田育徳会尊経閣文庫蔵）に記載された道幅五間と一致する。SR1826の西側にはSD01が構築される（PL.4下）。SD01は石垣石が抜き取られているため石垣の状況は不明であるが、安政5（1858）年シラベの富山藩邸の絵図

(以下、富山藩邸絵図 富山県立図書館蔵)によると、SD01はSD1103に直行する排水溝として描かれていることから、盛土の土留めと排水を兼ねた石垣溝であったと考えられる。講安寺との地境には塀の基礎が構築される。

盛土に伴いSD1103の増築が行われる。4～5段の石垣石が積み重ねられ、裏込めには石垣石加工時に生じた破砕礫を使用している。石垣石は下方2～3段に比ベ丁寧に加工され隙間無く積み重ねられており、石垣の傾斜角度も異なる。富山藩邸絵図と講安寺資料の明治十年付けの絵図には、富山藩邸と講安寺の屋敷境にSD1103に該当する溝が描かれている。また、講安寺と隣接する称仰院の地境にはSD1103に直交する下水が描かれており、SD1103は藩邸内の排水の他、隣接する寺地、町屋の排水を兼ねていたと考えられる。

SK03廃絶後、遺構内を窪地状に整地し、ローム土を主体とする約20cmの盛土をして庭園を造営している(PL.3上)。庭園内から池跡・建物跡・塀跡・植栽痕を検出した。池1095は給水溝一池一排水溝から成る。池は深さ約40cmで周りには庭石が配され、中央には中之島が設けられる。池と溝は防水を目的に内面に漆喰と砂利を混ぜたものを約10cmの厚さで塗り固めている。表面は丁寧仕上げられ、底部には玉砂利を敷き詰めた形跡がある。池1138は東側と南側が塀で囲まれている。深さ約1m、平面形は長方形を呈する。池1095同様、内面に漆喰を塗り固めている。池1095の排水溝と池1138の間で木樋を検出し、両遺構が繋がっていたと考えられる。

南側では柱穴列SB219、SB252の間で厩を検出している。厩の一部の間取りは間口一間、奥行き一間で、各部屋には桶の便漕が1基設置される。便漕は中央南寄りに配置されていることから、馬は北向きに繋がれていたと考えられる。

A・B面(図9)

調査地点全域にA・B層が盛土される。B層は南側の一部で確認された。C面の庭園の直上には、元禄十六年の焼土(SK03西側焼土)がA層と共に盛土されている。盛土造成後構築されるSD236内には宝永スコリア(宝永四(1707)年十一月噴火)が堆積しており、盛土は元禄十六年の火災を契機に行われ、宝永四年頃までには終了している。SD01・SD1103が盛土に伴い増築されている。

SD236、SD259・260・337・340は丘状の盛土の上に構築された庭の施設と考えられる石組みである。SD236には宝永スコリアが堆積していることから古い段階の遺構と考えられる。SU12、SU122・131・389、SU132、SU247、SU631は大型の地下室で、東西に並ぶ。

病院地点では、『大聖寺藩史』所収の文化年間(1804～1817)とされる絵図(以下『文化図』)に記載された井戸が、I20-1、H23-2に重なることから『文化図』は、幕末の大聖寺藩邸内の土地利用を示すことが指摘されている。A・B面でも『文化図』に重なる遺構を検出している。『文化図』に記載された間口間数、病院地点のI20-1・H23-2とSD01・SD1103の位置関係を考慮し、調査地点を『文化図』に重ねると、御殿空間の一部(表御殿・中奥・奥等)、詰人空

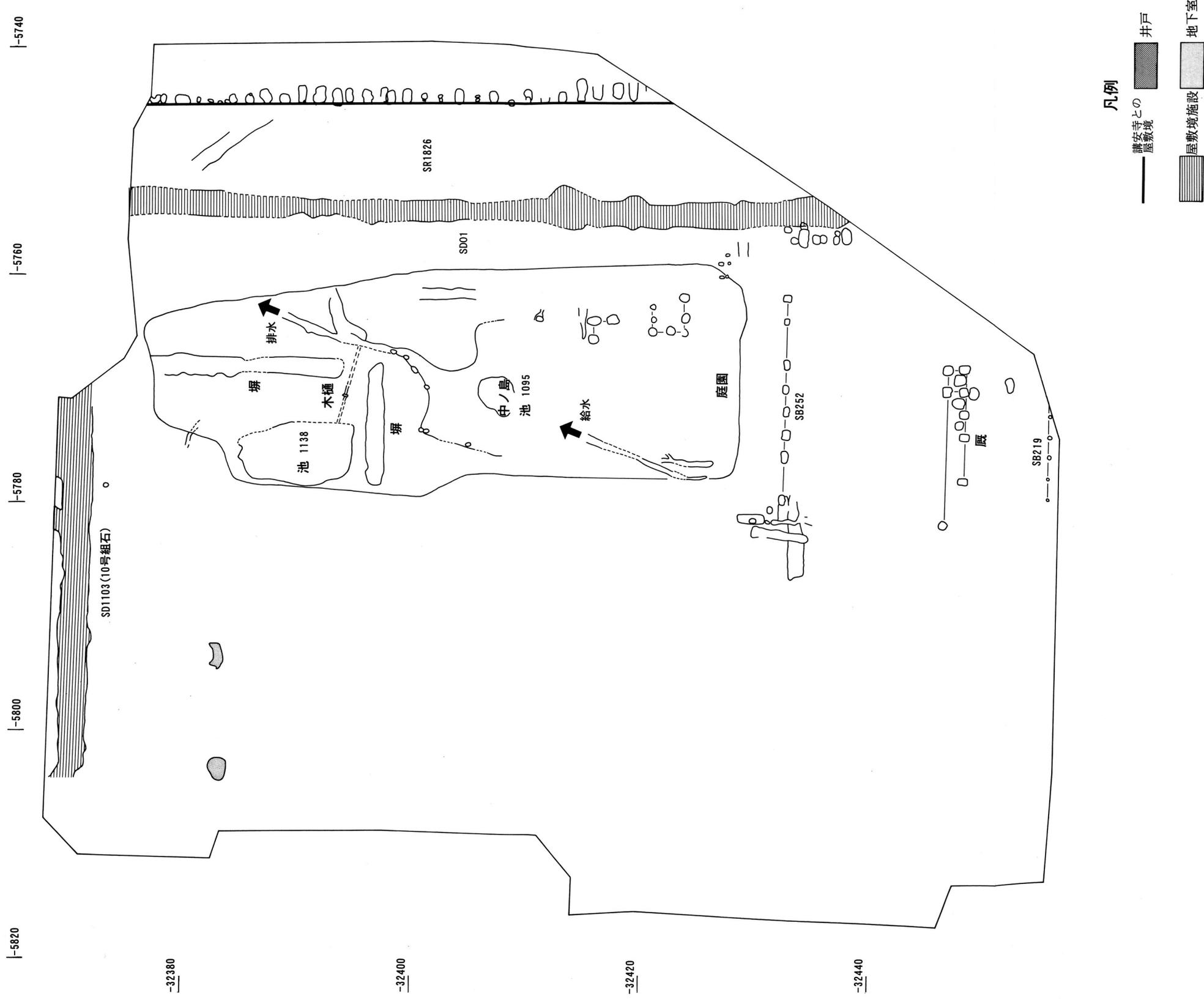


図8 藩邸区域 C面

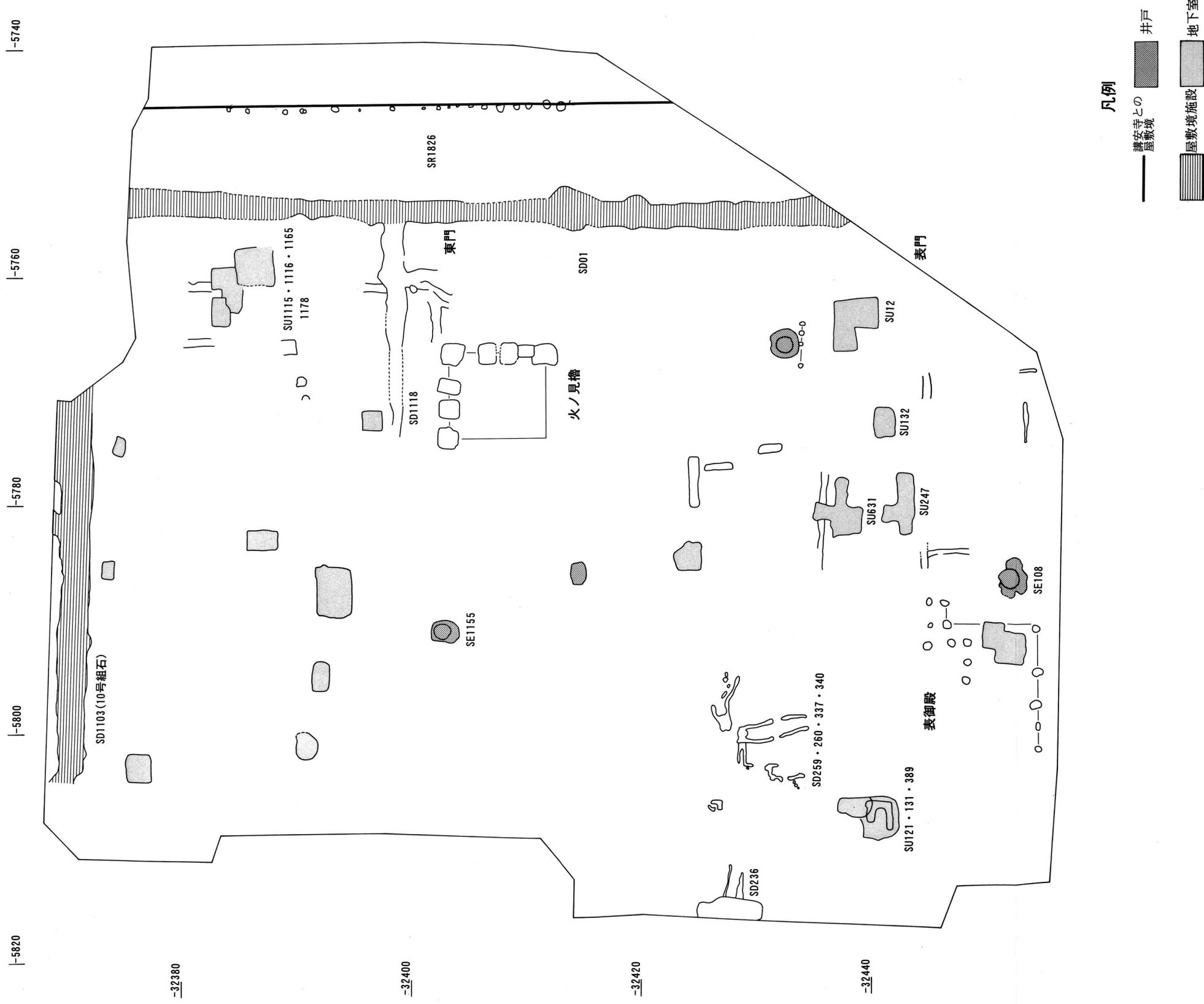


図9 藩邸区域 A・B面

間の一部（御割場奉行小屋・小物部屋・平土小屋など、役所の建物）、御殿空間と詰人空間に囲まれた空地が調査地点に該当する（絵図の分析は東京大学史料編纂所 宮崎勝美氏に御指導頂いた）。SD01南の調査地点外に表門、SD01とSD1118が直交する部分に東門が位置していたと考えられる。

表門から表御殿の遺構検出面は、ローム・砂利等を硬く突き固めた非常に硬質な面で、表御殿の礎石列を検出している。SE108は表御殿東の井戸にあたる。絵図では黒く塗りつぶされた方形の枠の中に、白抜きの井戸側が描かれている。東門の西、空地の遺構検出面は、砂・漆喰等を突き固めた硬質な面である。東門の北側にSD01に直行する石垣溝SD1118が構築される。L状に並ぶ8基の土坑は火ノ見櫓の基礎と考えられる。西側と南側は失われているが、絵図に記載された柱の配置と重なる。SE1155は中奥の東の井戸に該当する。方形の掘り込みの中に円形の井戸側があり、文化図の井戸も同様の表現がされている。地下室SU1115・SU1116・SU1165・SU1178は役所の建物の無い部分（オープンスペース）に構築されている。

4. 講安寺区域（図10）

浄土宗講安寺は加賀藩下屋敷成立年代と同じ元和二（1616）年八月二十二日、式千百坪の寺地を拝領する。寺地の一部が東京帝國大學の敷地となるのに伴い寺域を縮小しているが、現在もこの地に本堂を構えている。

調査の結果、鑑壇状の段差を確認した。藩邸区域との地境から東が切り土され、一段下がった部分が講安寺寺地となっている。約170㎡の調査域から、三枚の生活面（講安寺A～C面）に伴う遺構を検出した。発掘調査の他に講安寺文書のマイクロフィルム化、豊島区西巢鴨四丁目に明治42～45（1909～12）年に移転した墓の予備調査を行っている。

講安寺C面 ～18世紀前半

遺構は主に北側に分布する。建物跡（厩）、地下室、井戸、ごみ穴を検出している。遺構の主軸方向はN-4°-Eを示す。建物跡SB3544の一部屋の間取りは間口一間、奥行き一間半で各部屋の中央西寄りには桶が1基ずつ配置されている。本郷構内で検出している厩の下部構造に類似していることから厩と考えられる。便漕の位置から馬は東向きに繋がれていたと考えられる。ごみ穴SK3310は、遺構分布が密でない南側に位置し、主軸はほぼ真北を示す。

講安寺B面 18世紀後半～19世紀代

南側が墓域となる（PL.4上）。検出した遺構は甕棺墓・円形木棺墓等の埋葬施設である。遺構の主軸方向はほぼ真北を示す。段差にはC面の地下室を切って、段差の土留め杭と考えられるピット群が南北に並ぶ。甕棺はすべて1750～1850年代に製作された常滑系陶器である。甕棺墓は縦方向に重なり、平面的な切り合いは見られず、ほとんどが改葬されている。甕棺墓の分布状況、

被葬者の頭位方向，改葬時の掘削方向から，東西に伸びる墓道の存在が考えられ，北から墓道—埋葬施設・埋葬施設—墓道—埋葬施設・埋葬施設—墓道と東西に並ぶ墓割を復原できる。円形木棺墓，方形木棺墓の配置，頭位方向は墓道に関係なく，ほとんどが改葬されておらず，改葬した甕棺墓を平面的に切って分布する。蔵骨器は瀬戸・美濃系陶器の甕，江戸在地系土器の火消壺等が使用されている。

講安寺A面 明治初頭頃～明治45年

遺構はB・C面に比べ少ない。全域が盛土（講安寺A層）され硬く突き固められている。墓域の盛土には改葬によって不要になった甕棺・蔵骨器の破片が大量に含まれている。土留めのピット群上に石垣SG1586が構築される（PL.4下）。SG1586は6・7段の石垣石が雑に積み重ねられており，胴木・裏込めは認められない。SE1734は方形の掘り込みの中に円形の井戸側がある。井戸の周りには礎石が配され，上屋施設を伴う井戸と考えられる。講安寺資料の明治十年付けの絵図にこの井戸が記載されている。甕棺墓は明治以降のもので，改葬が行われている。

（原 祐一）

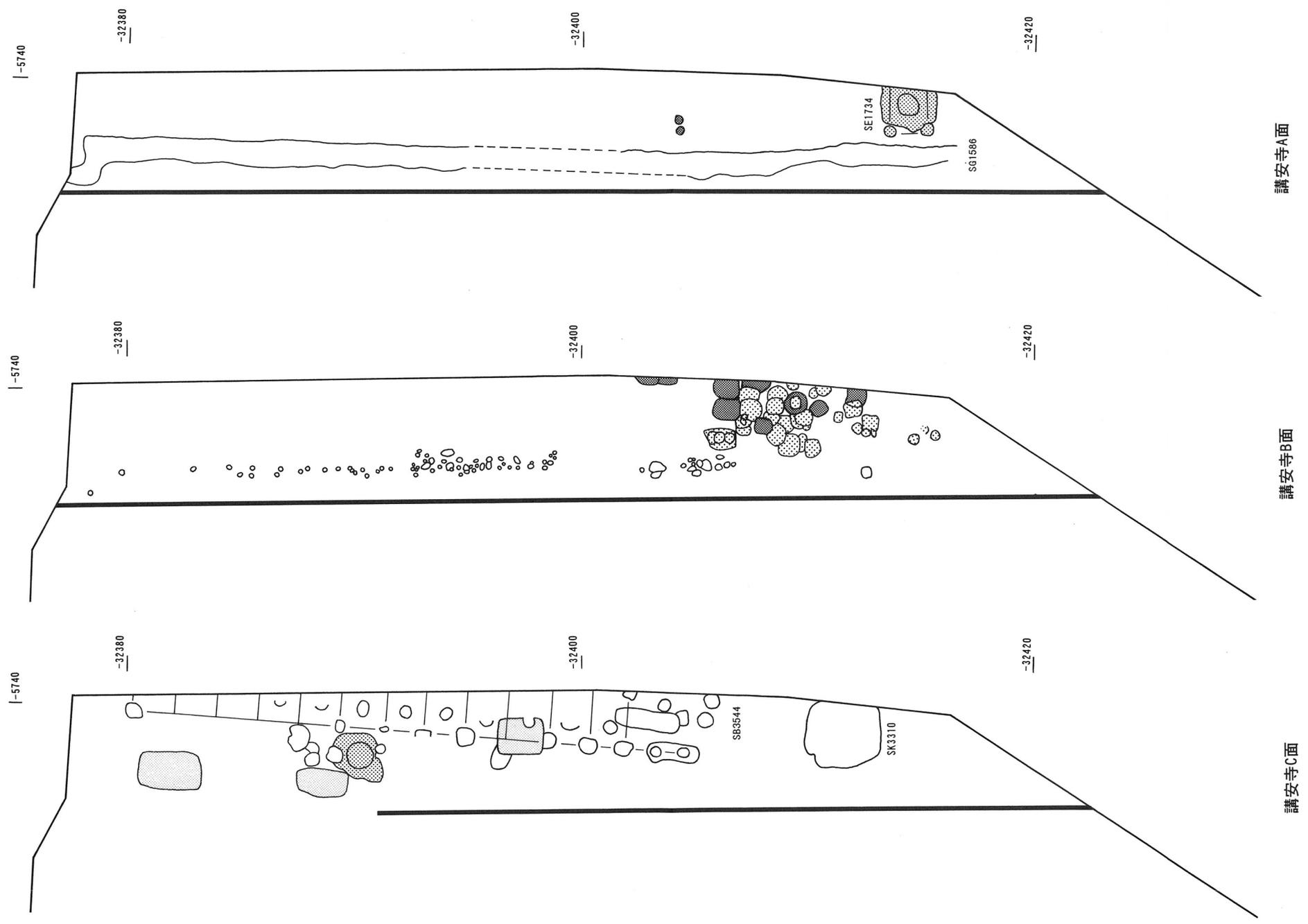
II. 成果と課題

病棟地点の調査は，台地の縁辺斜面地といった旧地形により，沖積層及び江戸時代以降の人為的な盛土層によって，ローム層上面から現表まで最大約8mの堆積土が確認され，そのため複数の遺構面を比較的良好な状態で認識することができた。これは，明治以降にも連続して約2mの盛土造成が行われたこととも無関係ではない。以下，現段階での本調査における成果と課題について概略したい。

江戸時代以前

縄文時代に帰属する遺構，遺物では，谷を挟み環状に分布するピット群の他，谷の北側斜面において，G層下部より後期の遺物包含層が，谷の南側斜面において，H層からその直下の漸移層にかけて集石が検出されている。本郷構内においては，文学部3号館地点，御殿下記念館地点で三四郎池に向かう斜面地より，後期の遺物包含層が検出されている。現段階では，遺構に関しては未確認であるが，概期の土地利用を占う資料として期待される。

古墳時代に帰属する遺構は，谷を挟み4基の住居址が検出された。このうち谷北側に拡がる舌状台地の縁辺部に位置するSI04は，北竈を有する鬼高期の住居址であるが，同台地縁辺部では，中央診療棟地点で2基，看護婦宿舎地点で1基の住居址が現在までに確認されている。病院地区では，この他にも看護婦宿舎地点などで，五領期の住居址が10基以上，本地点で，和泉期の住居址が1基検出されており，上野公園を含む不忍池を望む台地上で，古墳時代の集落が規模の大小こそあれ，連綿と営まれていたことが考えられる。



- 凡例
- 講安寺との屋敷境
 - 地下室
 - その他の墓
 - 井戸
 - 甕棺墓

図10 講安寺区域

中世に帰属すると考えられる遺構には、井戸と道路状遺構がある。道路状遺構は、谷の南側斜面に位置し、ほぼ谷筋に直交する方向でのびている。遺構の断面形は、播鉢状を呈しており、路面幅は約数10cmと狭い。また路面は非常に堅固で、表面には、幅数cmの轍の痕跡が顕著に観察される。路面幅や、轍の状態から一輪車による谷と台地の頻繁な往復が推測される。要因として、轍の窪みや、路面の硬度から重量物の輸送（例えば、土地造成に伴う土砂の移動）が考えられるが、明確な関連遺構もなく言及は避けたい。遺構年代に関しては、遺物の詳細な検討を行っていないので中世から近世初頭としておきたい。

江戸時代

江戸時代の調査成果は、藩邸区域における土地利用の変遷、天和二年の火災で焼失した下級武士の長屋群、講安寺跡などに関し多くの成果を得ることができ、その成果の一端は室員によって公にされている（大成1997、成瀬1997、原1997など）。よって詳しくはそれを参照していただくとして、本節では、土地造成に関する調査成果と若干の私見を述べることにしたい。

本郷構内は、本郷台地の縁辺部に位置し、三四郎池をほぼ境として、西側がM₁面に対比される上位面、東側がM₂面に対比される下位面に相当し、その比高差は数mを測る。三四郎池の北側にはその湧水の流路となる谷が南北に伸びている。下位面には、病院地区全体が含まれる広く浅い谷地形をはじめ、幾筋もの浸食谷を形成している。このような変化に富む台地縁辺部に加賀藩が屋敷地を拝領した。現在までの調査で藩邸初期段階にあたる17世紀前半頃までは、三四郎池南側の上位面を中心に利用され、東西南北の方位を基軸として屋敷が建設されていたことが判明した。それに対し、藩邸周辺部、特に東側の下位面では、屋敷内を区画する溝、採土坑などの遺構が主で、比較的低い土地利用状況を窺い知ることができた。特に溝の主軸は、複雑な谷地形に規制され、それに直行もしくは平行方向に構築されている例が多い。また病院地区内は、緩斜面状に位置しているため、本地点のSD803や、中央診療棟地点の6号石組南北部分に認められるような段切りによる雛壇状の土地利用が行われ、旧地形から最小限度の改変が施されている。しかし、天和二年の火災を契機とした屋敷割りの変更により、大々的な土地造成が行われ、雛壇状を呈した現況地形を盛土によって一気に平坦地に造成している。

このように、限定された空間のなかで、当初は、尾根上などの平坦部を利用し御守殿を構えていた藩邸が、機能の拡大、それに伴う人口増などによって邸内周縁部までの造成を余儀なくされ、盛土、切り土による造成を繰り返し、可能な限り平坦面を拡大させていった。そこには台地上に立地する大名屋敷の土地利用の特性が表出されており、こうした大名屋敷の土地活用は、江戸城を中心に開花した都市江戸が、その発展に伴い常に拡大を遂げたその縮図としてもみることができよう。

（成瀬 晃司）

参考文献

東京大学遺跡調査室1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点一医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点一』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3

藤本 強1990『埋もれた江戸 東大の地下の大名屋敷』平凡社

東京大学埋蔵文化財調査室1996『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

成瀬晃司1997「加賀藩江戸藩邸の調査一天和二年(一六八二)年焼失の長屋群一」『地方史・研究と方法の最前線』地方史研究協議会 雄山閣出版社 P167~185

大成可乃1997「天和2年の火災で焼失した長屋に伴う炉状遺構について一東京大学医学部附属病院病棟地点の出土事例を中心に一」東京考古15 東京考古談話会 P117~144

原祐一1997「研究ノート 湯島講安寺における墓域の空間利用一東京大学医学部附属病棟地点で検出した埋葬施設の検討一」東京考古15 東京考古談話会 P145~156

2 医学部教育研究棟地点新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

I. 調査の概要

本地点は、医学部教育研究棟新築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。発掘調査は1994年11月17日から翌4月28日まで行われ、面積は約1,200㎡である。発掘調査は3次に分けて計画があり、今回の報告はその第I期分である。

本地点は加賀藩上屋敷内の御殿空間南部、育徳園の南側の台地上部に位置し、18世紀以降には中之口御門から詰人空間を含むエリアに該当する。当該地は現存する絵図面で最も古い元禄期のものには既に御殿が建てられており、また、地形的にもその当初から御殿が建築されていたと想定できる地域である。

調査の結果、江戸時代前期から近代までの生活面がきわめて良好な状態で重層的に検出された。確認された遺構は約1,200基で、地下室、井戸、屋敷境、御門跡、礎石遺構、能舞台、便所遺構など御殿空間の土地利用を復元するのに重要な遺構も多く確認できた。

II. 確認された生活面

本地点で確認された生活面は、大きく7面（上層からA～G面と命名した）確認された。以下調査時の呼称に沿って説明する。現表直下に炭化物を多量に含む黒色砂を上層に薄く伴う灰層（A面）が調査区ほぼ全域に確認された。前田藩の上屋敷は近代以降、大正十二年の関東大震災まではその一部を前田侯爵邸として使用されており、当該地はその北東隅に位置している。震災以降は東京帝国大学に編入されており、医学部脇の植え込みとして調査前まで状況は変化していない。したがって炭・灰を多量に含むA面の下限は関東大震災であろうと推定される。A面は遺構が少なく、規模の小さい柱穴列などが確認されたにすぎない。

A面下約10cmで褐色土の硬化面（B面）が確認された。ここでの検出遺構は植木の移植穴が多いが、調査区南側、西壁にかかって土蔵跡と思われる石敷きの基礎が確認されている。礎石の主軸が江戸時代の藩邸のものと若干異なること、出土した遺物よりほぼ近代の初頭に位置づけられる面であろうと考えられる。

C面は御殿空間と詰人空間との境が想定されるライン以北、中央部付近まで確認された。礎石遺構がこれらの面の北側に集中していることとあわせて、建物は主に調査区中央以北に存在し、南側はオープンエリアだったことが窺える。C面には礎石が伴う地下室、便所遺構、礎石など多くの遺構が切り合った状態で検出されている。遺構の主軸は基本的に現在の本郷通り（旧中山道）に沿って構築されている。この下D面の上には焼土が堆積しており、中に含まれている遺物の年代観から焼土が天和二（1682）年の火災のものであると推定される。C面はそれ以降、17世紀末か

ら19世紀前半までの長い期間使用されていたと考えられる。

D面は砂利を多く含む硬化面である。前述のように面上には焼土が全体に広がり、使用の下限は天和二年である。この面にもなう配石の溝状遺構、礎石などの遺構群は軸がC面のものと異なっており、現在の春日通りの軸に沿っている。

E、F面は硬化された面ではなかったが、E面を構成するローム混じりの褐色盛土中からは17世紀後半代の、F面を構成する黒色盛土中からは17世紀中葉の遺物が確認されている。ここで検出された遺構は、坑底に石を伴うピット、植木の移植穴と推定される土坑などD面以上の様相とは全く異なっている。

G面は関東ローム層上面である。詰人空間の部分では、A、B層は確認されたが、以下には硬化面は認められず、検出された溝状遺構、井戸、地下室などの遺構もすべてローム上面で確認されている。

また、江戸時代に構築された硬化面は基本的に建物範囲には及んでいないことや、これ以外にも硬化された面が部分的に多く確認されており、面の同時期性の掌握をより困難にしている。

Ⅲ. 出土した遺構

屋敷境・御門跡

調査区中央に春日通りに並行する主軸を有する溝（SD246）が検出された。SD246には石の抜き取り痕があり、石組の溝であったと推定される。また、溝に北接して門と思われる遺構が確認された。門は礎石、硬化面、炭化した建築材が認められた。礎石は門の通路と思われる硬化面側に丁寧に切り出され、上面はフラットに整形されていた。礎石自体はひとかかえ以上もある大型のもので、その掘方は径2mを超え、拳大の玉石をぐり石として利用し、きわめて強固にたたき締められていた。門から南に約20m隔てて、溝が合計十数本確認された。最も広いSD319は幅2m、深さ50cm程度あり、溝底には石垣の間込めのような平たい割石が多く確認された。SD319の北側には幅10～30cmの浅い溝が十数本確認された。これらSD246とSD319間には硬化面が広がっていた。これらの溝と硬化面は、屋敷境と道であろうと考えている。また、溝、および硬化面には天和二(1682)年のものと考えられる焼土に被われていた。本郷邸を描いた最も古い絵図面は元禄期のものであり、それ以前の藩邸の様子は不明である。しかし、本郷邸は明暦の大火を契機にそれまで同心屋敷であった南側約二万坪を新たに屋敷地として拝領されており、これらの遺構群はそれ以前の屋敷の御門付近であったと推定している。

地下室

詰人空間には合計7基の地下室が確認された。形状はすべて袋状を呈し、階段等を有するものは確認されなかった。主軸は春日通りに沿った軸で構築されていた。

御殿空間には2基の地下室が確認された。1基は調査区中央やや南より西壁付近に位置しているものである（SU210）。SU210はすべての壁面を瓦で構築している地下室である。平面形は長

方形、断面形はやや下ですぼまるような逆台形状を呈している。確認面での規模は長辺3m、短辺2m、深さ2mを計測する。壁は、瓦を平積みにした状態で約40段積まれ、ほとんどが平瓦で構成されている。瓦は完形の平瓦の間に平瓦の尾根にて両断した半分のものを切断面を内側に隠すようにして2段積まれ、計3段を1組に構成されている。遺物は見込みに型押しした瀬戸・美濃の磁器皿や、紐状取手がついた山水土瓶など幕末のものが出土しており、また、前述の屋敷の変遷から1840～45年に作られたと推定される「江戸屋敷総図」には、長軸を同じくして該所に「穴蔵」の記載があり、これに当たると考えている。おそらく上屋があったであろうと思われるが、当時このような形態のものを穴蔵として認識されていたことを窺わせる（大成1997）。

もう1基は袋状のものであるが、開口部には井桁状に角材が組まれ、補強されていた。遺構はさきの天和二(1682)年の焼土層を切って構築されており、その上の焼土層におおわれていた。基本軸は本郷通りに沿って構築されていること、また、出土遺物は17世紀末～18世紀前半のものが出土していることから、遺構を被っている焼土は享保十五(1730)年の火災のものであると推定される。

能舞台 (PL.5下)

能舞台の下部施設と考えられる遺構は、調査区北端に位置する。漆喰で柵状に固められたものである。舞台下の柵状遺構は東側を攪乱によって破壊されてはいるが、南北7.2m、東西4.6m張り出しを持った方形を呈していたと考えられ、その東南の隅より斜方向に橋掛かりの下部施設と思われる溝状の遺構が約8mのびていた。この柵状、溝状遺構の下は近代以降の削平によって上部が破壊されているが、立ち上がりの深さはもっとも遺存状態が良好な北西隅で約55cm確認された。漆喰は径1～3cm程度の玉砂利を多く含み、厚さ約10cmに張られ、その表面は平滑に磨き上げられていた。柵状遺構の底面はフラットで、壁はやや開いて立ち上がっている。その外側には、舞台正面左奥のシテ柱と橋掛かりを挟んで対になる柱、舞台正面右奥の笛柱が、溝状遺構の外側には橋掛かり一ノ松と二ノ松間にある両柱、二ノ松と三ノ松間にある正面側の柱の礎石が確認された。もっとも遺存の良好なシテ柱は一辺1.2mの方形掘り込みの中に80×60cm、厚さ50cmのほぼ直方体の礎石が置かれていた。橋掛かりの柱は径80cm程度の掘込みに根石として平たい自然石を用い、その上に一辺40～50cm程度の方形の礎石が配されていた。遺物は19世紀前半代のものが少量出土しているのみで、音響効果のためしばしば用いられる甕等は確認されなかった。

このような遺構はこれまで滋賀県彦根城表御殿遺跡、東京都尾張藩上屋敷跡遺跡の2カ所確認されており、遺存状態の良い彦根城例とは柵状遺構の中にある階段状の施設の有無等若干の相違がみられるものの、基本的な構造は一致しており、舞台がほぼ同じ様式で構築されていることが推察できる。また、戦前に行われた現存最古とされる西本願寺能舞台の改修工事の際の舞台構造もほぼ同様である。

本郷邸では18世紀後半以降能舞台は二つ存在し、一つは現存している最古の元禄元年の絵図面にもすでに存在している大御門を入れて北側、「表」の部分にある能舞台である。これは御見物

所に大書院を控え、公式な接見、叙任、世子の誕生などの御祝御能、御慰御能、正月の謡初などを行う公式な用途に使用したと考えられる。今回検出された能舞台は、もう一つのもので「居宅」にあたる部分に存在する。この舞台は、文献、絵図面等の検討から天保期以降のものであろうと推定される。この舞台はその位置や変遷から藩主などの観劇や舞の練習等を行った場所であらうと推定される。また該期の藩主は14代前田斉泰(在1822~1865)で、能の愛好者であったらしく、加賀藩史料にも記録のある公式な能のみを取り上げてみても、たとえば天保元年(文政13年、1830)から二年にかけて、謡初め、御祝御能(世子誕生)、御慰御能などを含めて本郷江戸藩邸で4回、金沢で4回、計8回催されている。おそらくその他お抱えの能役者たちの舞台や自らの舞練習などのために能舞台が使用されていたに相違なく、この能舞台もこうした用途として作られたものであろう。

礎石遺構

御殿空間で確認された建物の基礎になると推定されるピット群の構造は、二大別することができる。17世紀後半以前のE~G面で検出されたピット群は、布掘り状の溝底に等間隔に石を配置するタイプのもの、方形のピットの底に石を設置したものなどが確認されている。また、17世紀後半以降のピットについては、すべて円形の掘方の底に根石を持ち、拳大の円礫を伴う砂利によって中が充填されるタイプでしめられる。規模、石の配置はいくつかのバリエーションがあるが、年代が下がると小型化する傾向がみられた。

IV. 調査の成果

これまで行われた本郷構内の調査のうち、17世紀段階から御殿が建てられていた地域の初めての調査事例といえるだろう。検討すべき課題は多いと考えているが、特に加賀藩邸内の土地利用の復元が最大の課題といえよう。今回の御殿空間の発掘調査では、前述のように面の構築のされ方、地下室の形態、建物の基礎構造などに詰人空間とに明瞭な違いが確認された。これは文献上で指摘されていた両者の空間的な断絶性が具体的な形で確認できたといえよう。

遺物は全体的に少量で、詰人空間の一特に屋敷のはずれ側に顕著である一調査ではよく見られる日常的な廃棄を継続的に行ったような痕跡は認められなかった。このことは御殿空間内から生じた塵芥がその周囲には廃棄されていないことの証左であろうし、他方で詰人空間内から出土する陶磁器類などが良質の製品を多く含んでいる場合も少なくない。これらは御殿空間から持ち込まれたものが多く存在すると考えている。また、調査区でもっとも古い17世紀前半段階の遺構面からもごみ穴が確認されていないことから、屋敷成立当初より御殿かそれにごく近いエリアであったことが指摘できよう。(堀内 秀樹)

参考文献

大成可乃1997「『瓦積みの穴蔵』について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

3 工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

I. 調査の経緯と経過

工学部では、浅野地区全径間風洞実験室新営に先だって、支障を来すケーブルの移設を計画した。浅野地区は弥生二丁目遺跡群の中に位置する埋蔵文化財の包蔵地にあたる。このため、調査室では工事に立ち会った結果、遺構の存在が予想されたⅠ～Ⅲ地点について発掘調査を行うこととした。調査は1995年8月22日～9月6日及び9月22日の工事期間中に行った。

これらの調査のうち、第Ⅱ及び第Ⅲ地点では弥生時代に属する可能性のある溝状遺構の一部が検出され、弥生町遺跡に関連する重要な遺構の発見である可能性が強まった。幸い、翌1996年の全径間風洞実験室新営に伴う発掘調査に並行して、2月19日～3月7日の間にこの溝状遺構の補足調査を行うことができた。その結果、この遺構が方形周溝墓であることを確認したほか、壺形土器等の遺物を得ることができた。この補足調査については、工学部関係者の方々に格別のご配慮をいただいたことを明記しておきたい。

II. 調査の成果

第Ⅰ地点 電気ケーブル用ピットの敷設地点で、浅野地区正門の北東約30mの地点である。約4m四方のピット敷設地点を4m程掘り下げたところ、黒色土の硬化面を検出した。この硬化面は、後の全径間風洞新営に伴う調査で検出された、明治時代の射撃場建設のための道路跡と考えられる。また、この硬化面下の暗褐色土中から数点の縄文土器片を検出した。

第Ⅱ地点 第Ⅰ地点から北西方向に約50m離れた位置にある、ほぼ東西に延びる電気ケーブル敷設溝及びピットの地点である。調査区西側のケーブル敷設溝部分では、北西から南東に延びる江戸時代の溝と弥生時代の溝の一部が並んで検出されたほか、江戸時代の土坑などを検出した。

第Ⅲ地点 第Ⅱ地点の敷設溝に直交する方向でピット部分から北方向に延びるケーブル敷設溝地点である。江戸時代の土坑1基のほか、第Ⅱ地点で検出された溝に直交する方向に延びる弥生時代の溝の一部が検出された。

補足調査地点 第Ⅱ地点及び第Ⅲ地点で検出された弥生時代の溝は、直交する断面箱形の溝であることから方形周溝墓の一部である可能性が考えられた。このことが確認されれば、弥生町遺跡の墓域が明らかになることになり、弥生町遺跡の全体像を考える上で重大な発見となると考えられた。このため二つの溝の間の地点の調査が望まれたが、工学部関係諸氏のご厚意により調査が実現する運びとなった。

発掘調査は、それぞれの溝が交差すると考えられる地点に調査区を設定して行ったが、上層の

近世の包含層を取り除くと、それぞれの溝の延長部分が検出された。溝の交差する部分は、残念ながら近世の土坑によって破壊されていたが、第II地点より続く溝内からは、壺形土器の破片が一定レベルに散乱するように検出され、ほぼ完形に復元された。

Ⅲ. 方形周溝墓と出土土器

第II・III・補足調査地点それぞれの地点から検出された弥生時代の溝は、その形状をつなぎ合わせると、方形周溝墓の一部と考えられる(図12)。検出された部分は、第II地点西側から補足調査地点に向かって南北方向に延びる西溝と第III地点北側から補足調査地点に向かって東西方向に延びる北溝に分けることができるが、その交差部分、つまり周溝墓の北西コーナー部分は、前述の江戸時代土坑によって破壊されている。部分的な検出であるため周溝墓全体の規模は不明であるが、北溝は第III地点部分で幅1.1m、確認面からの深さ0.5m、補足調査部分で幅1.8m、確認面からの深さ0.4m、西溝は第II地点部分で幅2.6m、確認面からの深さ0.7mであった。北溝は西に向かうにつれて幅広くなっていることが指摘される一方、西溝は著しく幅が広く、底面が階段状になっており、二本の溝が重複している可能性もある。同時期の他遺跡で検出された周溝墓の例に、複数の周溝墓が接続することが多いことからすれば、この周溝墓の西側には、さらに別の周溝墓が接して存在していた可能性も指摘しうる。

北溝の補足調査地点側では、図13の壺形土器が出土した。底部を欠く胴部～口縁部の約2分の1が遺存しており、無文の複合口縁壺である。内面は、底部付近を目の細かい刷毛調整したあと、胴部は木口状工具によるナデ、頸部内面には指押さえ痕を残し、口縁内面は底部同様の刷毛調整のあと、頸部付近まで横位のヘラミガキをおこなっている。外面は、内面と同工具の刷毛調整で仕上げたのち、胴部下半を左下がり斜位、胴部上半を右下がり斜位、頸部を縦位のヘラミガキ調整している。口縁部は幅1.5cmほどの薄い粘土紐を貼り付けて複合口縁とし、口唇部はややはっきりと面取りしている。器形は無花果形で胴下半に緩い稜を持っており、この部分で粘土の積み上げを一旦休止したものと考えられる。この部分の外面は横位のミガキ調整であって、上下の調整を分けている。欠損した底部との境あたりには、径4cmほどの内面からあけられたと考えられる穿孔の上半分が残っており、周溝墓に供献される土器に通有の儀礼の結果と考えられる。

出土遺物の壺は、無文ながらも頸部が緩やかに湾曲し、屈曲しない点。頸部内面の指押さえや胴下半の稜とその外面の横位ヘラミガキ、頸部の縦ヘラミガキなどの手法が残されている点から、弥生後期後半(東海系古式土師器の波及前)の中で捉えられるものと考えられる。つまり、この周溝墓は、おそらくこの地点の東側に展開する弥生町の環濠集落の墓域の中に位置するものと考えられ、環濠集落が成立してしばらくののちに造営されたものと考えられよう。(篠原 和大)

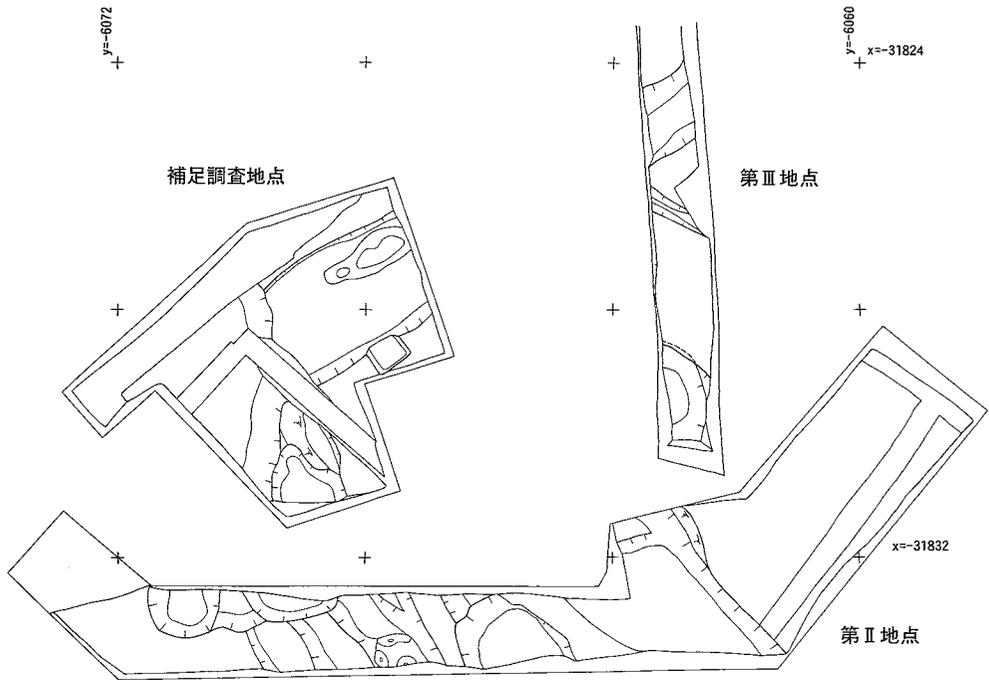


図11 全径間風洞支障ケーブル移設地点（第Ⅱ・Ⅲ・補足調査地点）全体図（S = 1 : 120）

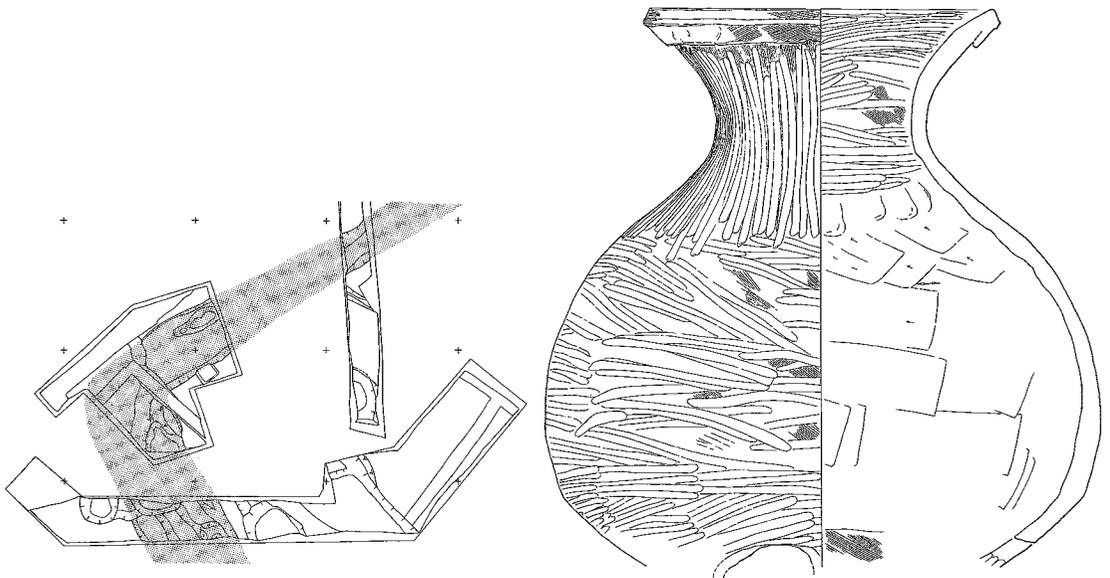


図12 方形周溝墓周溝推定範囲（アミ部分 1 : 240）

図13 出土土器実測図（1 : 3）

4 東京大学地震研究所テレメタリング地震観測施設新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

I. 調査の経過

東京大学地震研究所では観測態勢強化のため、かねてからテレメタリング地震観測施設の新営が計画されていた。建設予定地の位置する農学部から地震研究所にかけての地区には、江戸時代に播磨安志藩小笠原家の下屋敷であったため、武家屋敷の遺構が存在することが予想された。そこで、地震研究所から埋蔵文化財の確認の依頼を受けた埋蔵文化財調査室では平成7年10月18日に試掘調査を行った。しかし、この試掘調査は既存の建物が障害となって小範囲に限定されたため、江戸時代の遺構および遺物は検出されなかった。その後、地震研究所と埋蔵文化財調査室寺島孝一との協議によって、建設予定地が東京都の遺跡地図に記載された東京大学構内遺跡の範囲に含まれることから、急遽事前調査を実施することになった。発掘調査は、建設予定地320㎡を対象として平成8年4月16日から平成8年5月2日まで行われた。

II. 調査の成果

調査区内は全面にわたって、明治・大正時代の第一高等学校の煉瓦基礎による攪乱をうけていたが、その下層において、江戸時代の建物の基礎遺構と考えられる掘立柱柱穴列や、布掘柱穴列、植栽痕、地下室、土坑等の遺構が検出された。主な遺構としては次のものがあげられる。

地下室（SU03）：調査区中央北よりに位置する地下室。幅5.5m、奥行き3.7m、深さ1.3mの規模で方形の平面形を有し、北側に幅約1.4mの通路が付設した構造である。覆土はP.L.7に示したように、下層黒褐色土、上層褐色土と大きく2層に分かれ、南側から一気に埋没した様相を呈している。覆土上層より、江戸時代後期の陶磁器類や刀装具の小柄等が出土した。

植栽痕（SK05）：調査区中央に位置する植栽痕。東西4.2m、南北3.9m、深さ0.7mの規模で隅丸方形の平面形を有する。覆土の堆積状況は地下室（SU03）と全く同様である。

土坑（SK13）：調査区西端に位置する大型の土坑。長さ3.5m、幅1.8m（確認部分）、深さ1.3mの規模を有する。覆土内から江戸時代後期の陶磁器類が大量に出土した。

掘立柱穴列（SB07, SB09, SB14）：調査区東側で検出された柱穴列。いずれも長さ50～60cm、幅30～40cm、深さ80cm前後の規模の長方形の柱穴で底面に礎石が据えられた構造である。調査範囲が狭いことと、煉瓦基礎による攪乱が激しいため、一間間隔で配列された柱穴4基から5基が検出されたにとどまっており、柱穴列相互の関係性を把握することはできなかった。しかし、これらの柱穴列は構造からみて、いずれも建物の基礎遺構と考え

られる。

布掘柱穴列（SB23, SB24）：調査区西側で検出された布掘柱穴列。塀の基礎遺構と考えられる。

播磨安志藩小笠原家の下屋敷に関しては、これまで文献調査が全く行われていないため、絵図面等も確認されておらず、下屋敷内の建物配置については全く解明されていない。今後、文献調査を含めて、他方面から研究を進めることが必要である。 (武藤 康弘)

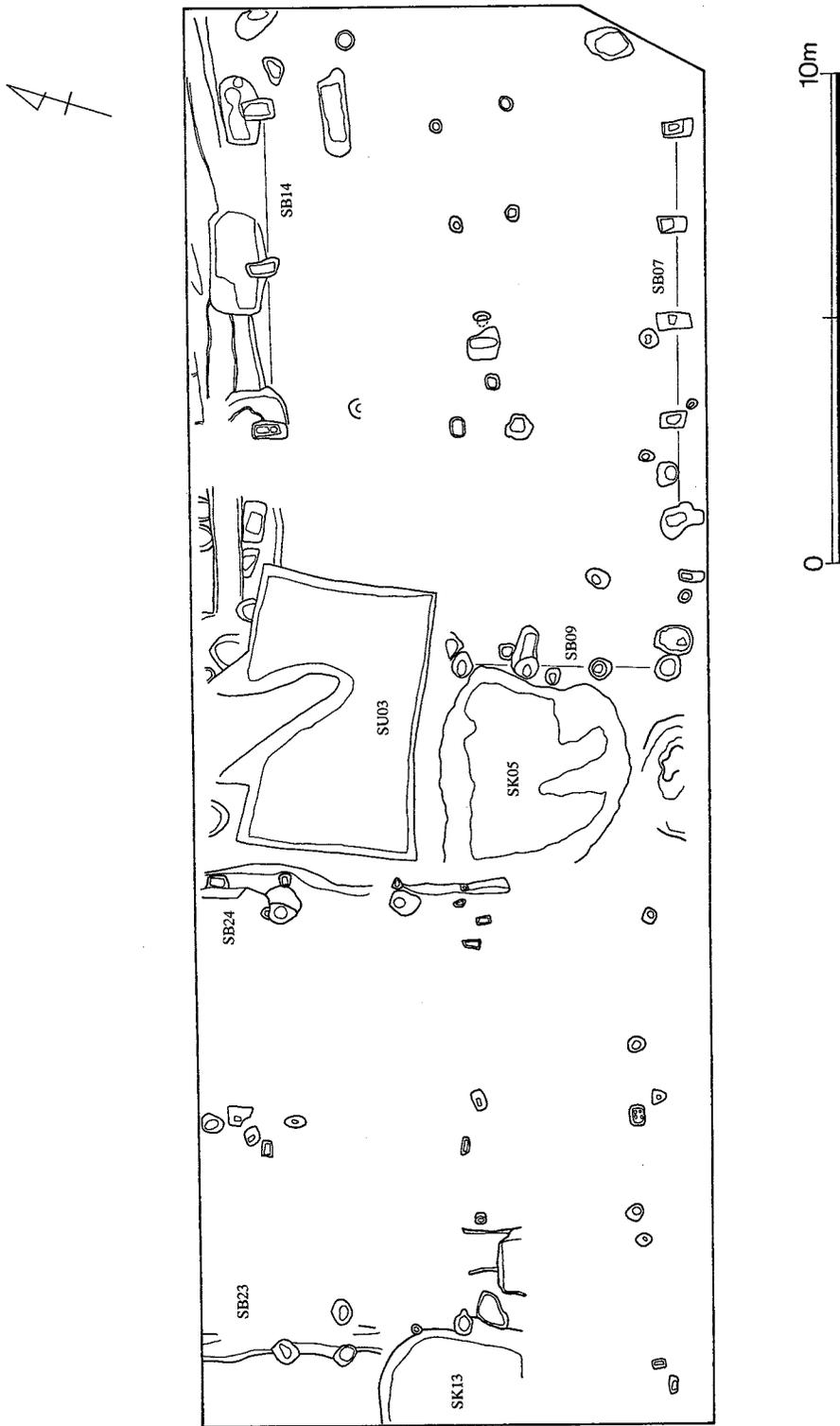


図14 地震研究所テレメタリング地震観測施設地点 遺構配置全体図

5 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報

本調査は農学部弥生キャンパスの南側，言問通りに面して建築計画のあるベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査区は1993年に行われた総合研究棟地点に東隣する場所にある。発掘調査期間は1996年5月10日～6月20日で，調査面積は626㎡である。当該地は江戸時代は水戸藩中屋敷内であることが絵図面等より確認されており，当初より水戸藩中屋敷に伴う遺構群が検出されると想定された。

調査区は，近代以降の攪乱や削平が多く，遺跡の遺存はよくない。遺跡の立地は本郷台地から東に落ちる緩斜面に位置し，近世～近代に平坦地を作るために自然堆積層が削平され，西側では表土盛土直下がハードルーム，東側ではソフトルームになっていた。したがって遺構の確認はルーム面にて行わざるを得なかった。

検出された遺構・遺物

出土した遺構・遺物は，先土器時代の礫および剥片の集中区が1，江戸時代の地下室5基，土坑9基，ピット4基，近代の土坑3基が確認された。

先土器時代の遺物は調査区南東端A3区，A4区の7×4mの範囲に広がり，焼礫135点，フレイク10点，ナイフ形石器1点が出土した。層序は武蔵野台地標準土層Ⅳ層下部～Ⅴ層を中心に確認された。

江戸時代の遺構は，5基確認された地下室のうち，SU01，02，09，15は南北軸からやや東に振れて，ほぼ等間隔に配置され，同時期に機能していたと推定される。また，その他の土坑も同軸で構築されており，関連する遺構である可能性も考えられる。これらの遺構の年代はいずれも18世紀に比定される。調査区は全域が江戸時代を通じて水戸徳川家の中屋敷のエリアであるが，これまで行った調査では遺構・遺物の密度は加賀藩と比較して総じて低い。当該地区についても18世紀には利用されているものの，それ以降利用された痕跡は確認されなかった。

近代の遺構は，ほぼ等間隔に「コ」の字状の遺構（SK03，05，12）が並んで確認された。近代の当該区は，東京府癡狂院が明治になってまもなく当該地に建築され，ついで第一高等学校が神田より本郷に移転したのは明治22年である。調査時点では検出されたこれらの遺構群がどちらに伴うか判断できなかったが，明治20年に刊行された参謀本部陸軍部測量局の1/5,000の地図では東京府癡狂院の範囲が調査区の東方に位置しているため，これらの遺構は第一高等学校である可能性が高いと推定される。また，隣接する総合研究棟地点からもピット群などが確認されている。これらを第一高等学校の現存している平面図と対比すると，総合研究棟地点のピット群は「摂生室」，本地点はおそらく運動場と思われる平場にあたり，「コ」の字状の遺構はあるいは鉄棒とそれを支えるワイヤーの埋込み痕である可能性も考えている。（堀内 秀樹）

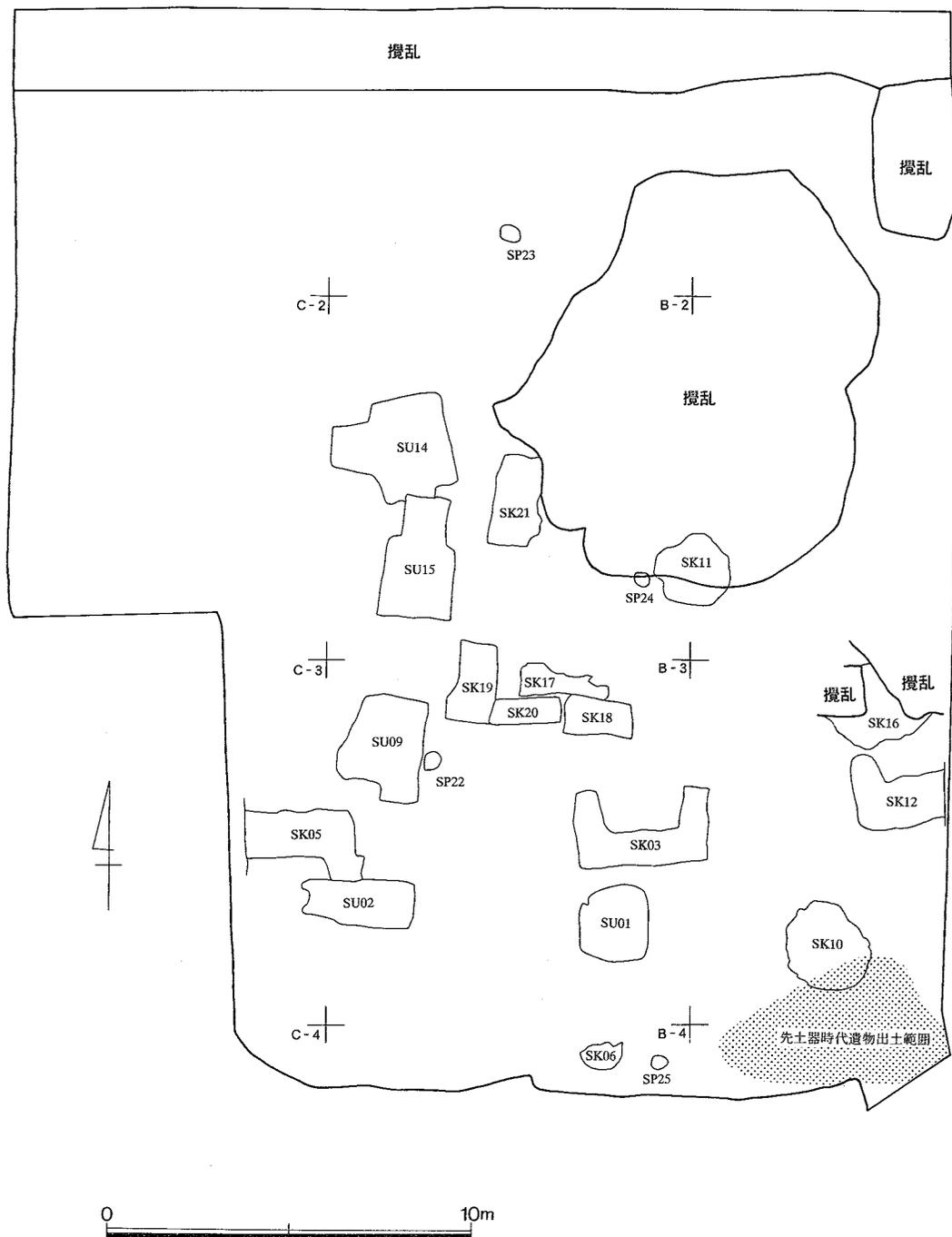


図15 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー地点全体図

6 医学部附属病院看護婦宿舍建設地点（Ⅱ期）発掘調査略報

I. 調査の経過

医学部附属病院では、病院地区の基幹整備を1984年以来継続的に行っており、今回の調査はそのうち看護婦宿舍建設に伴うものである。医学部附属病院病棟建設地点（HNⅡ以下、看宿Ⅱ地点）は医学部附属病院中央病棟の東に位置する。調査面積約400㎡を、平成8年11月7日から平成9年1月31日まで調査した。

II. 自然環境及び歴史的環境

看宿Ⅱ地点は本郷台地の東端、低地台地上に位置し現地表面の標高は約16mを測る。台地の西、赤門付近では標高約23mを測り、台地は東に向かって緩やかに連なる。東側は池之端門を見下ろす急崖であるが、これは江戸時代以降の大規模造成による切り土によるものと考えられる。病棟地点では北東方向に伸びる谷を確認しており、旧地形は南側の谷に向かって緩やかに傾斜している。

看宿Ⅱ地点周辺の看宿地点、MRⅠ-C T棟地点（以下、MRⅠ地点）、ごみ置き場地点、病棟地点でも縄文時代から古墳時代の住居跡を検出しており、看宿Ⅱ地点でも縄文時代から古墳時代の遺構・遺物をの検出が予想された。

江戸時代の病院地区は、加賀藩邸・大聖寺藩邸・富山藩邸・講安寺に該当し、看宿Ⅱ地点は富山藩邸に該当し富山藩邸に関連する遺構・遺物の検出が予想された。元和二・三年(1616・15)前田家三代藩主利常が大久保相模守忠隣邸跡地を拝領し、加賀藩下屋敷が成立する。利常の子利次は寛永四年(1627)下屋敷の一部に居を構え、寛永十六年(1639)六月、加賀藩から分かれて初代富山藩主となり、加賀藩から屋敷地を借りる形で富山藩邸が成立する。天和二年(1682)十二月二十八日の“八百屋お七の火事”によって加賀藩邸、富山藩邸、大聖寺藩邸のほとんどの部分が全焼したのを契機に、藩邸の屋敷割りが大きく改変される（病棟地点略報参照）。天和三年以降、加賀藩黒多門邸と大聖寺藩邸の地境に設定されていた富山藩邸への道が、講安寺との地境まで移動し、幕末まで概ねこの地境が踏襲される。天和二年以降の富山藩邸内の建物配置を示す絵図は、安政五(1858)年シラベの絵図と、年代の記載されていない絵図の二枚が残されている（富山県立図書館蔵）。

（原 祐一）

III. 調査の結果

調査の結果、縄文時代・古墳時代・江戸時代の遺構・遺物を検出した。看宿地点、MRⅠ地点では三枚の生活面を確認している（第1～3遺構面）。看宿Ⅱ地点では四枚の生活面を確認した

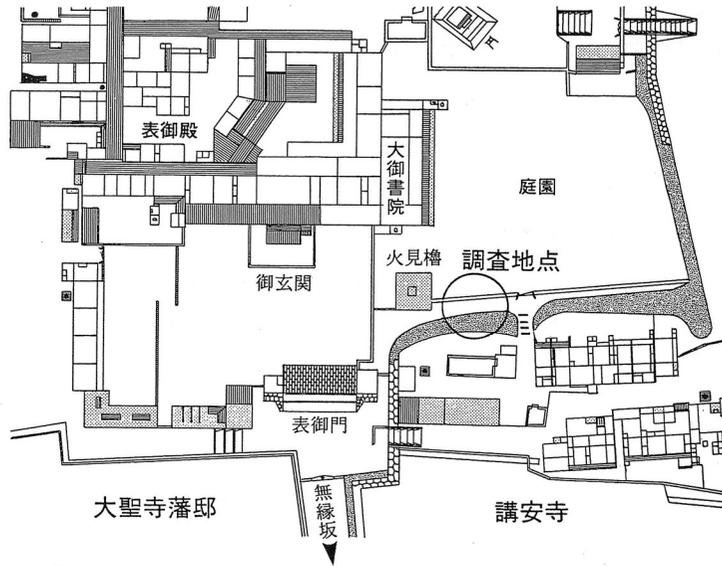


図16 調査地点推定位置 (富山藩上屋敷絵図より作成)



図17 明治19年のキャンパスと天和三年以降の富山藩邸の範囲 (点線)

（A～D面）。

D面（図18）

看宿地点，MRI地点の第3遺構面に該当する生活面である。江戸時代初期に緩斜面を平坦に削平し遺構を構築している。遺構確認面はローム層である。縄文時代の住居跡1基，古墳時代の住居跡6基，江戸時代の溝状遺構，池状遺構，植栽痕を検出している。江戸時代の遺構の遺構軸はN-14°-Eを示す。 (原 祐一)

溝状遺構（PL.9下）

SD03は調査区中央の北側部分において，ローム面で検出された遺構である。東西3.3m，南北9.0m以上，深さ2.12m以上の南北方向にのびる大溝である。北側は調査区域外までのびることが確認されているが（ただし本調査地点の北側にあたる看宿舎地点やゴミ置き場地点ではこの溝に相当するような大溝は検出されておらず，本調査地点北側からどの方向へのびるのかは明らかではない。），南側は近・現代の攪乱で破壊されており全く不明である。

断面はVの字に近い形態を呈する。ただし，掘方は左右対称ではなく，しかも西側壁面の凹凸がやや顕著である。覆土の観察から人為的に埋まったものであることが確認されたが，最下層には水成層があり，埋没する以前の一時期には水が溜まっていたこともあるようである。出土遺物には，かわらけや青花皿の破片などが少量出土した。

SD03の富山藩邸内での性格については，溝を挟んで遺構の様相が異なる事や，その規模などから藩邸内の地割りに関係する溝であった可能性がある。 (大成 可乃)

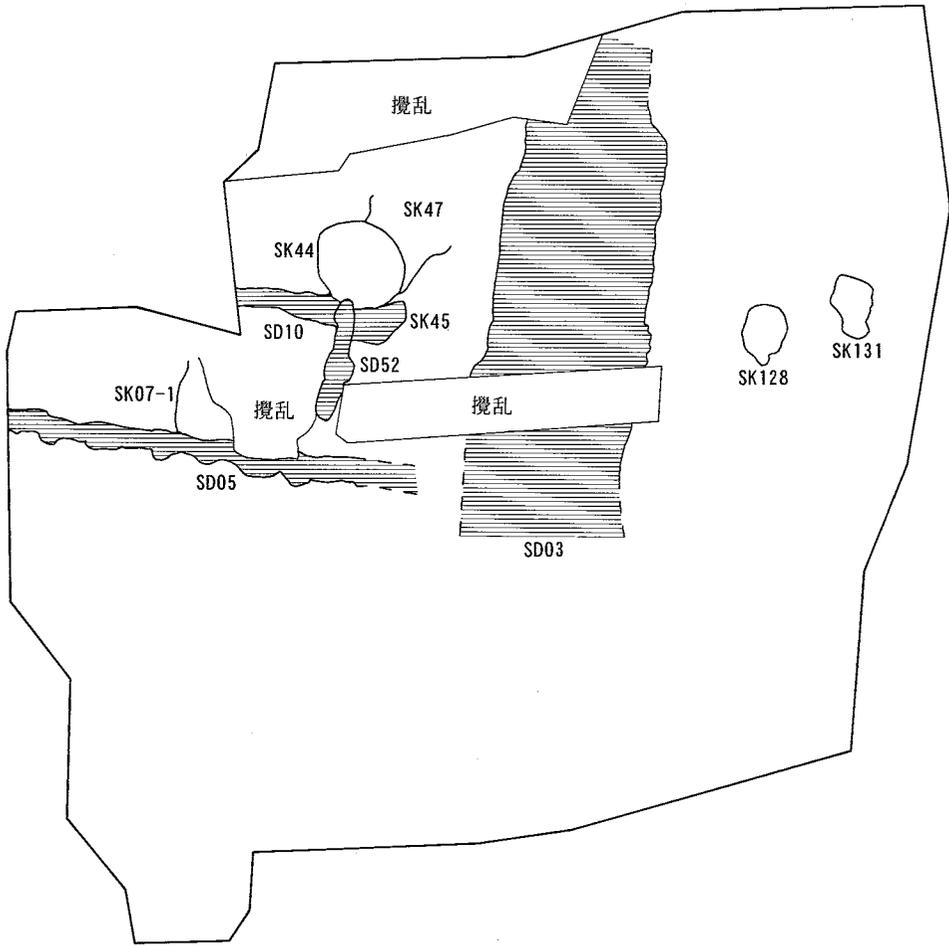
C面（図19）

D面に盛土を行い整地し生活面としている。池状遺構，地下室，土坑等を検出している。遺構軸はD面同様の遺構軸を示す。

池状遺構（PL.10上）

SX15は調査区北東隅において，表土掘削直後に検出された遺構である。近・現代の攪乱により北側の一辺と遺構上面が削閉されていた。掘方は東西3.73m，南北3.24m以上，深さ0.55m以上，平面はやや東西に長い方形，断面は浅鉢状を呈する。掘方の内側に粘土と漆喰を貼り付け，更にもその上に握り拳大の石を敷く特殊な構造をとる遺構であることが確認された。粘土の内側では東西3.13m，南北3.03m以上，深さ0.42mの規模を呈する。出土遺物は主として漆喰より上層の覆土中から出土したが，かわらけや初期伊万里などの細片が少量認められたのみである。

SX15は構造上「池」のような性格の遺構であるとの推測もできるが，覆土の観察から，それを裏付けるような明瞭な水成層は認められなかった。またこの遺構の周囲に水を引き込むための

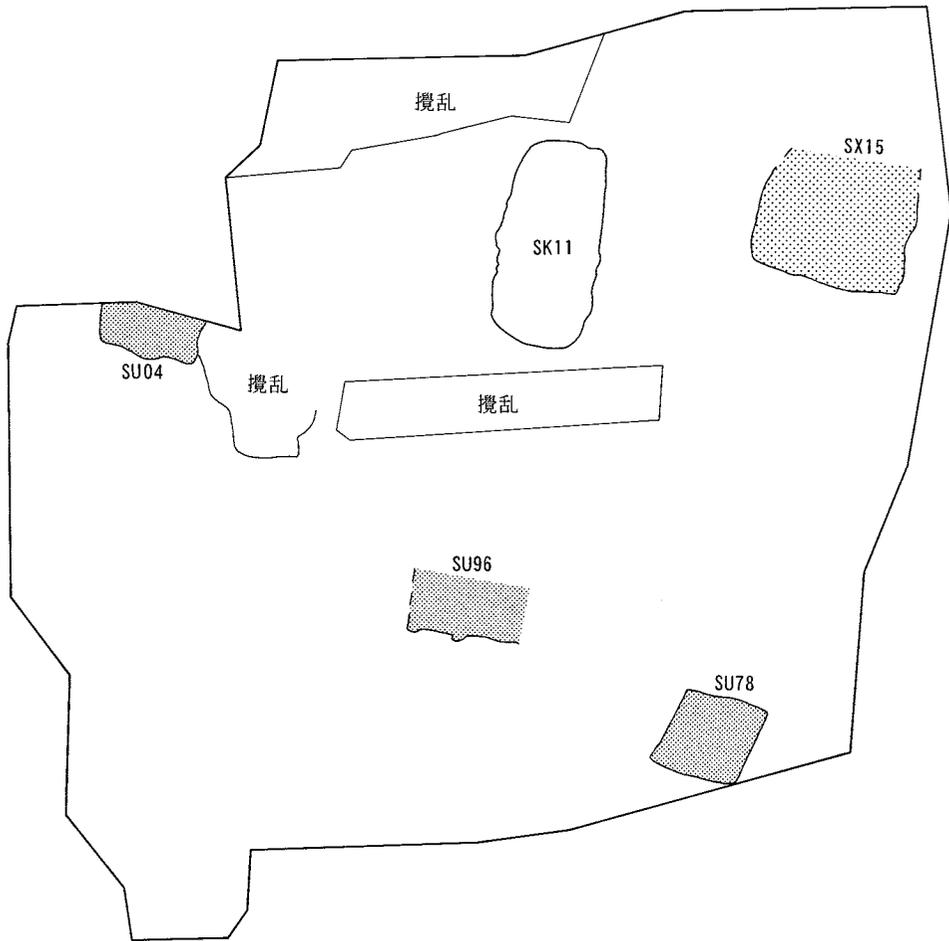


凡例

- | | | | | | |
|---|------|---|------|--|-------|
|  | 溝状遺構 |  | 地下室 |  | 土坑その他 |
|  | 井戸 |  | 池状遺構 | | |



図18 D面



凡例

- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-------|
|  | 溝状遺構 |  | 地下室 |  | 土坑その他 |
|  | 井戸 |  | 池状遺構 | | |



図19 C面

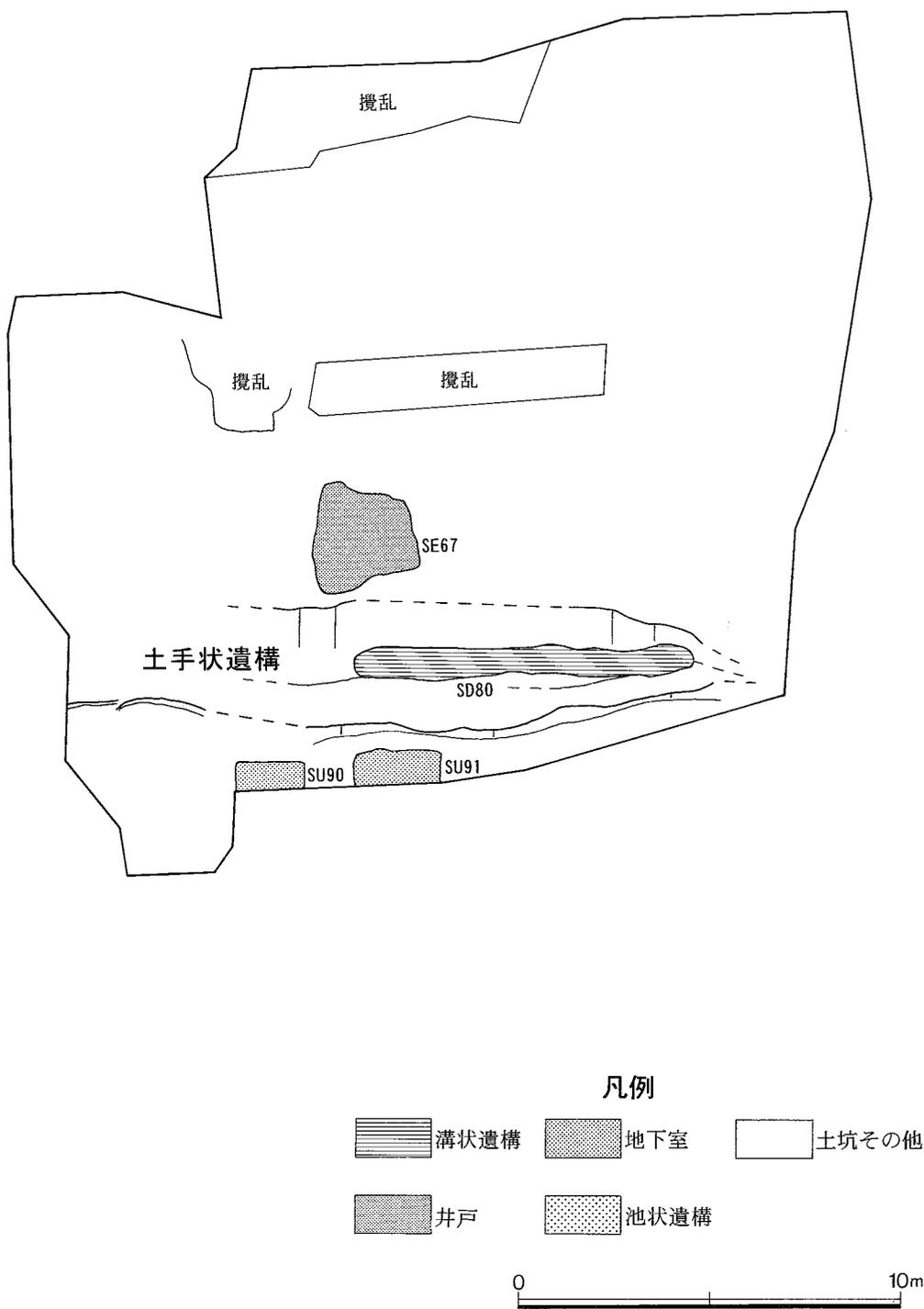
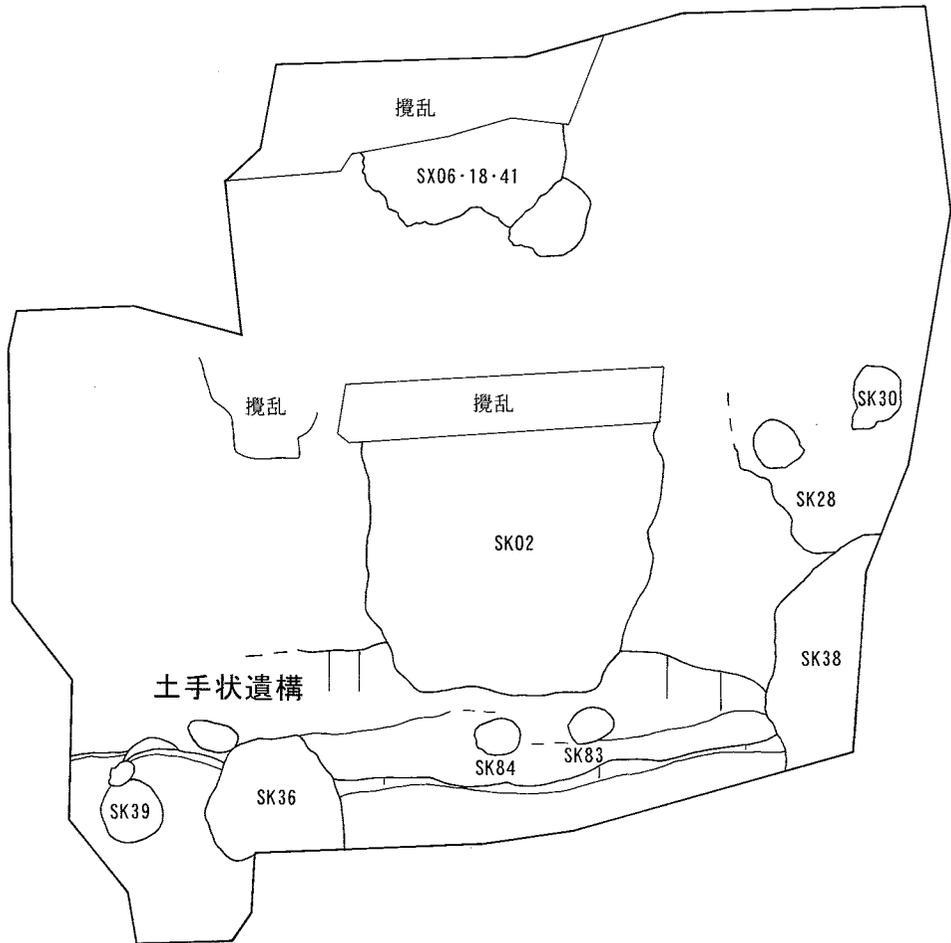


図20 B面



凡例

- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-------|
|  | 溝状遺構 |  | 地下室 |  | 土坑その他 |
|  | 井戸 |  | 池状遺構 | | |



図21 A面

施設になりえる遺構も検出されなかった。ただし、破壊されている北側部分にそのような施設があった可能性はある。(大成 可乃)

地下室

SU04, SU78, SU96は小型の地下室である。SU96は南側の側壁に柱の跡を確認した。

B面(図20)

B面は陶磁器類の製作年代から、17世紀後半代から18世紀代の生活面と考えられる。屋敷内の地境を示す遺構が明確な形で確認でき、遺構軸は看宿地点、病院地点、外来地点、病棟地点で指摘されているように真北に近い遺構軸に移行する。調査地点の南側が切り土され、土手状遺構が構築される(PL.10下)。土手状遺構を境にした北側と南側の比高差は約2mで、傾斜角度は約30°を測る。これまでの調査成果、現在の地形を参考に調査地点を富山藩邸の絵図に重ねると、調査地点は表御殿の庭園(御殿空間)と、畳方細工所、御服御土蔵といった役所の建物のある区域(詰人空間)の境に位置する(絵図の分析は東京大学史料編纂所 宮崎勝美氏に御指導頂いた)。境には濃緑色で着色された帯が描かれており、この帯が土手状遺構に該当すると考えられる。絵図に見られる土手の広がり、調査地点の東側に見られる人為的に造成された崖状の地形を見ると、この造成は大規模な造成であったことが想像できる。

土手状遺構の北側の庭園部分では井戸SE67を検出している。SE67は方形の掘り込みの中に円形の井戸側がある。土手には溝状遺構SD80が構築される。土手の南側には小型の地下室SU90, SU91が東西に並ぶ。絵図との対比から、地下室は役所の建物の北奥、建物の無い部分に構築されている。

A面(図21)

看宿地点、MR I地点の第1遺構面に該当する生活面である。土手の南側では全面に堆積する約5cmの焼土層を確認している。土手の北側の庭園部分では、井戸、植栽痕、ごみ穴を検出している。SK02は幕末以降構築された遺構で、東西約7m、南北約6m、深さ約4mを測る。土手の南側では植栽痕、土坑を検出している。

IV. 成果と課題

今回の調査では、17世紀代の加賀藩邸と17世紀後半代以降の富山藩邸の遺構を検出し、17世紀後半代～18世紀代に造成された富山藩邸内の地境を確認した。調査区南で行われた切り土の時期は明確でないが、このときの造成は大規模造成であったと推定している。加賀藩邸、富山藩邸、大聖寺藩邸の大規模な屋敷割りの改変が天和三年以降に行われており、病院地点、外来地点等では屋敷割りの改変に伴う盛土、切り土等の大規模造成を確認している。調査地点で行われた造成

については他の地点の状況，旧地形，現地形等を再検討する必要があると考えている。

富山藩邸の絵図は詳細に描かれた二枚が残されている。看宿地点でも絵図に重なる遺構を検出しており，遺構の検討を行った上で絵図の検討を行いたい。（原 祐一）

参考文献

東京大学遺跡調査室1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点—医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点—』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3

藤本 強1990『埋もれた江戸 東大の地下の大名屋敷』平凡社

東京大学埋蔵文化財調査室1996『東京大学構内遺跡調査研究年報』 1

7 東京大学本郷構内（文京区湯島4丁目～弥生2丁目地先間）配水管布設替 工事に伴う遺跡立会調査

I. はじめに

東京都水道局では、東京大学本郷構内に布設している配水管（龍岡門－附属病院前－都バスロータリー－弥生門）が老朽化したため、その布設替工事を計画した（図22の太線部分）。ところがこの地域は江戸時代の加賀藩江戸屋敷であり、近年の構内の発掘調査によって、その遺構が良好な状態で残っていることが確認されており、また陶磁器をはじめ数多くの貴重な遺物が見つかっている。さらに、江戸時代の生活面の下層からは旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が発見される例が多い。

このため、東京都水道局では東京都教育委員会文化課と工事の方法などについて協議を行った。その結果、既存配水管の埋替えのため、工事で新たな地山掘削を行う部分が極めて少ないことが確認されたため、基本的には立会調査を行うことで合意した。

手順としては、旧上水管の埋設位置確認も兼ねて26か所で試掘のトレンチを掘って、遺構・遺物の確認を行い、新たに溜め桝を設置する部分1か所（No.4）については、発掘調査を行い、埋替えの本工事に際しては、試掘調査の結果を参考に適宜立会うこととした。

II. 立会調査

立会は、1988年5月12日から7月20日にかけて行った（図23～図28）。

当初予想されたとおりほとんどの地点が上水道の掘方と重複しており、旧上水管埋設の際の埋め砂が充填されていた（断面図の網かけ部分）。

No. 1～3 龍岡門のすぐ内側である。ほとんどすべてが旧水道管の埋め砂であった。

No. 4 新たに溜め桝を設置する場所であったため、発掘調査を行った。現地表下約1mで玉砂利を敷きつめた旧地表面を確認した。壁面の観察から、この砂利面をロームで埋めたあと、瓦溜などの廃棄穴を掘り、さらにその後新たな建物の基礎を造っていた（礎石建）。この砂利面の正確な年代は分からないものの、土の堆積の状態や、このトレンチで17世紀末～18世紀初頭の遺物が見つかっていることから（遺物の項参照）、幕末近くまで下がるものとは考えられないであろう。なおこの砂利面は、ローム層の上に約1.5mのロームを盛り土した上に造られていた。

No. 5・6 No. 4と同じくロームの盛り土が見られた。

No. 7～12 ほとんどが旧上水道の埋め土であったが、一部江戸時代の埋め土と思われる堆積も認められた。現地表から1～2m下で関東ロームが確認されている。

No. 13 何層にもわたる整地層が観察された。1層が30～40cmほどで、ロームを用いたものや、

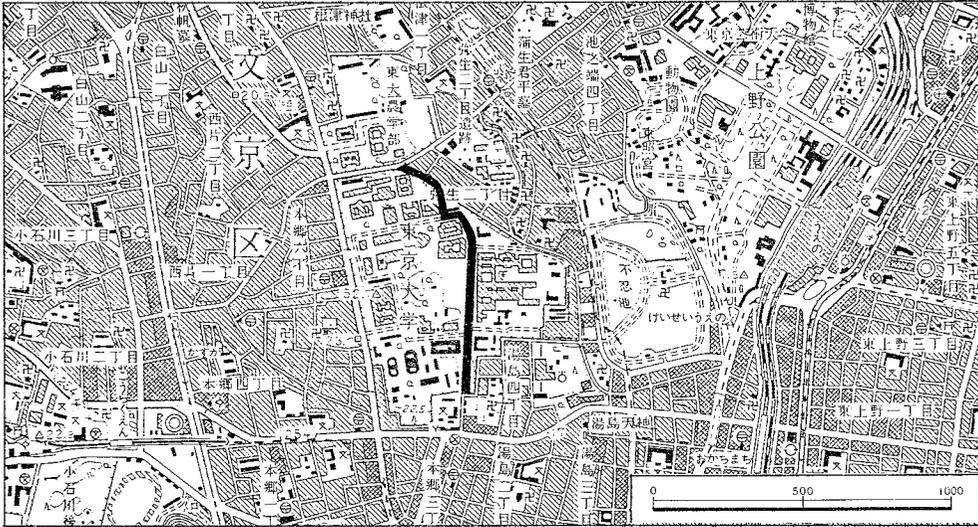


図22 試掘調査地位置図（太線部分）

若干の遺物や炭などを含むものなど5枚が観察されている。

No.14～18 ほとんどが旧上水管の埋め土で一部にロームや埋め土が認められた。なおNo.17トレンチでは、褐色土層の壁面から熱を受けた磁器類が見つかった（遺物の項参照）。

No.19 ほとんどが旧水道管の埋め土であったが、トレンチの北西隅に空洞が現れた。土の崩落の危険があったため、詳細な調査は不可能であったが、箱尺などを挿入して空洞の深さ、奥行きを調査したところ、この穴の奥行き（東西長）は2 m弱、幅（南北長）は1 m強であることを確認した。深さは現地表から約4 mで底と思われる固い面を確認している。穴の形は正確には分からないが、箱尺による手探りの観察によれば、長方形の平面形であろうと推定された。江戸時代の地下室であろうことは推察できたが、天井の位置や入口は確認できなかった。

No.20～22 すべてが旧上水の埋め砂であった。

No.23・24 表土下2 m弱で旧表土を確認した。

No.25・26 No.22～26は弥生門を出た公道上に位置するが、このうち25・26は埋設管の数が極めて多く掘削が不可能であった。

今回の立会調査は、もともと旧上水道管の布設替え工事に伴うもので、当初から大きな成果は期待できないものであった。しかし、No.4とその周辺で玉砂利を敷きつめた生活面（道路？）を確認した。更にそれを埋め立てて生活面をかさあげし、ごみ溜めとして利用したあと、ここに建物を建てていることがわかった。

理学部1号館前のNo.19では江戸時代の地下室と推定される穴を見つけている。弥生門外の公道では埋設管が多く、十分な観察ができなかったが、江戸時代に谷筋に当たっていたものと考えられ、旧地表が良く残っている状態が認められた。（寺島 孝一）

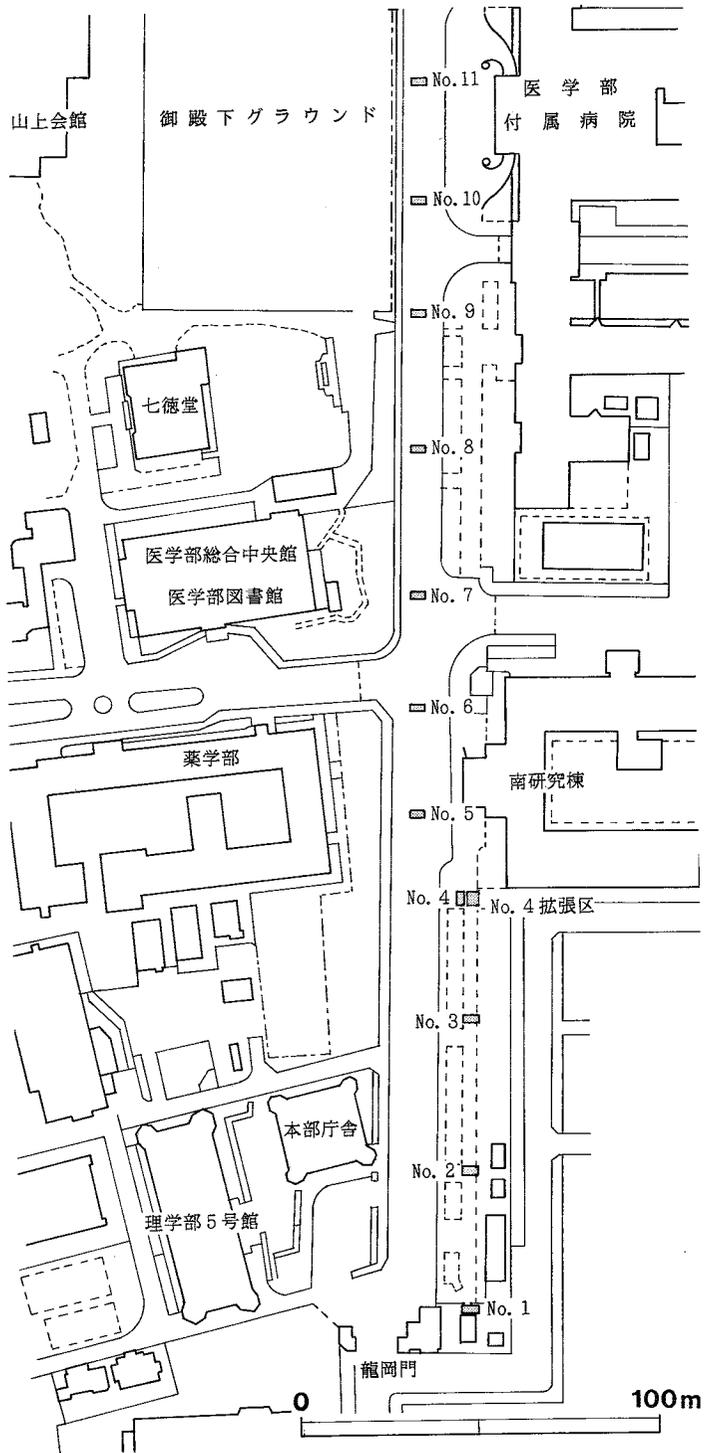


図23 試掘トレンチ位置図(1)

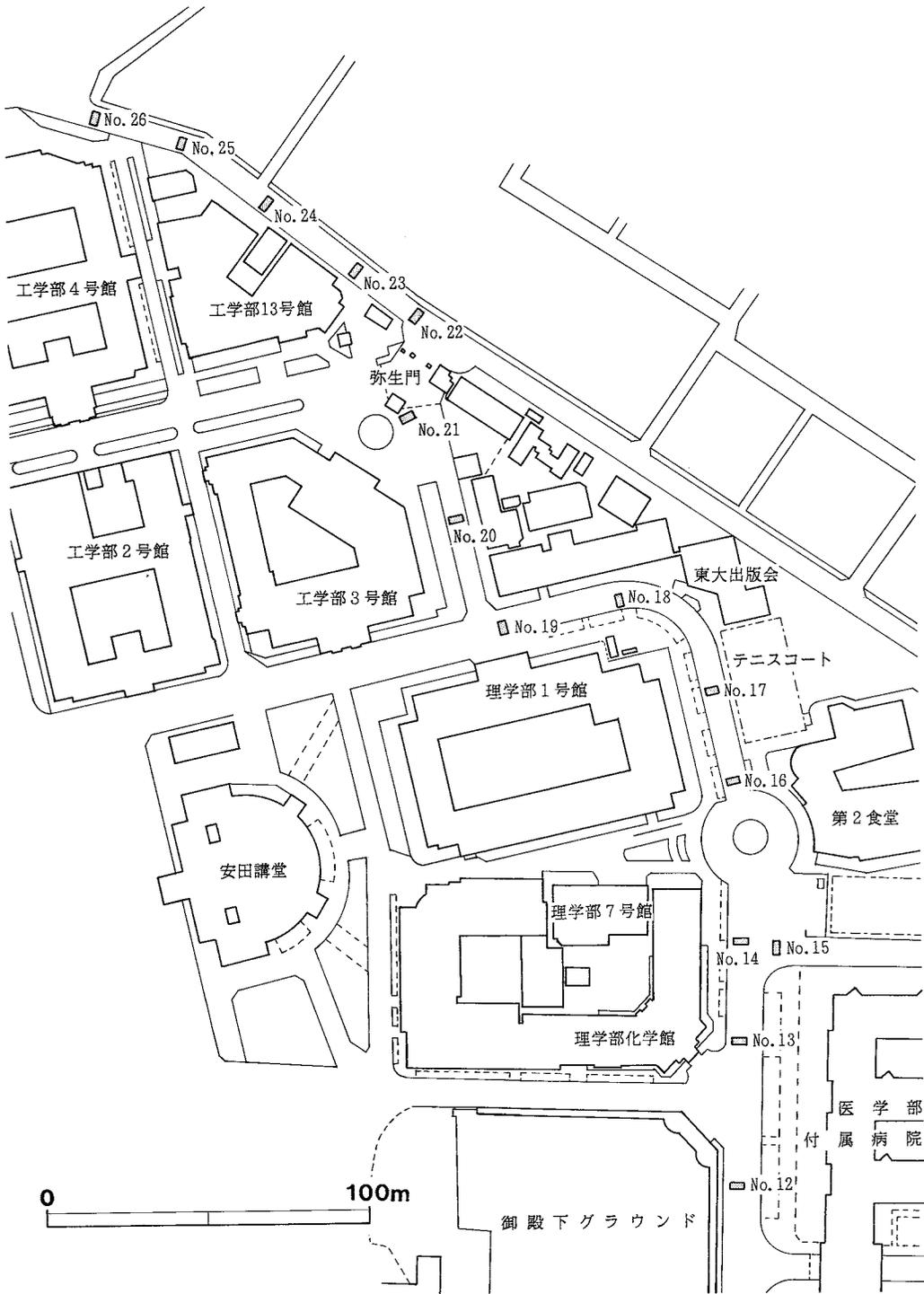


図24 試掘トレンチ位置図（2）

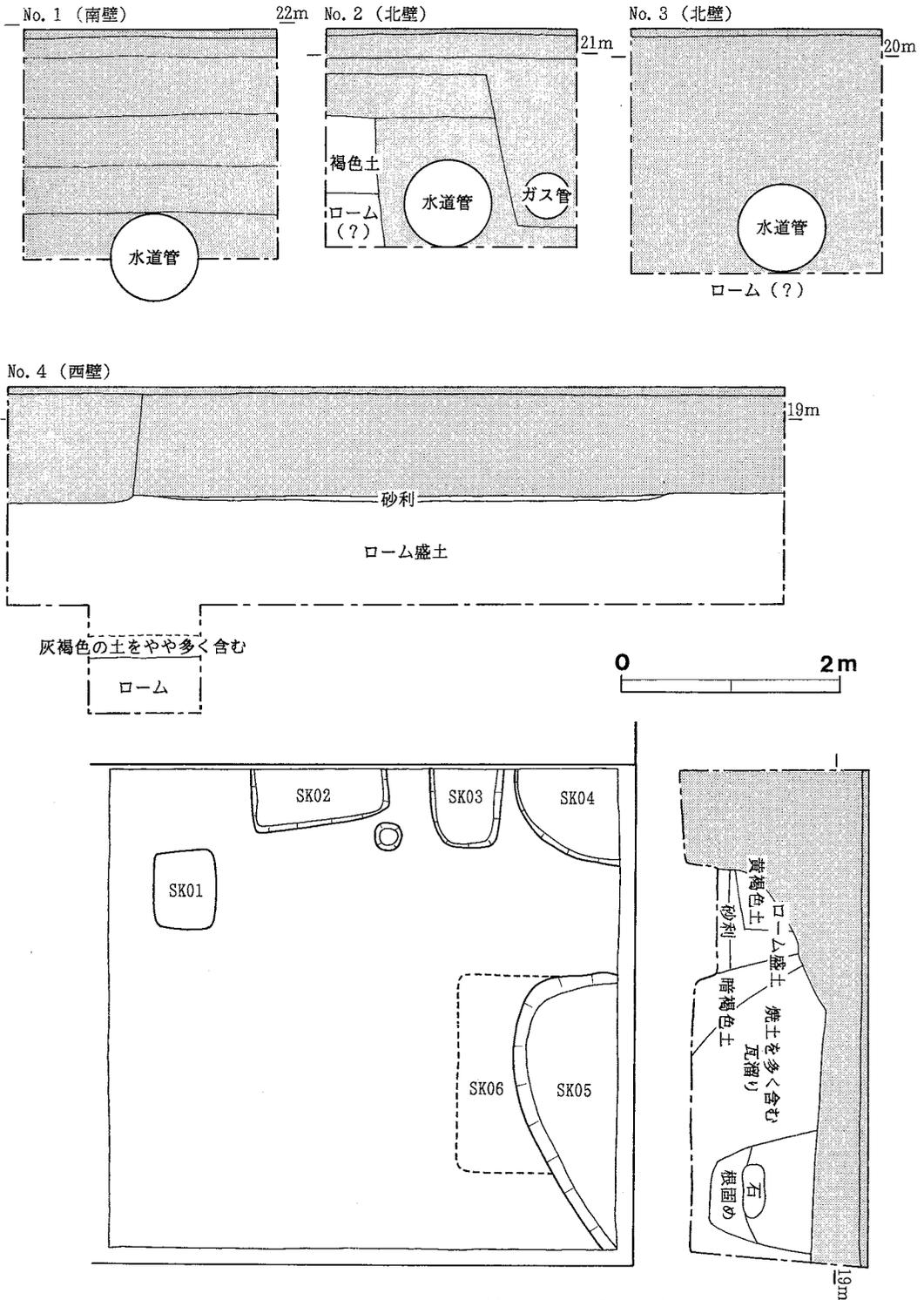


図25 No.1~No.4トレンチ断面図および平面図

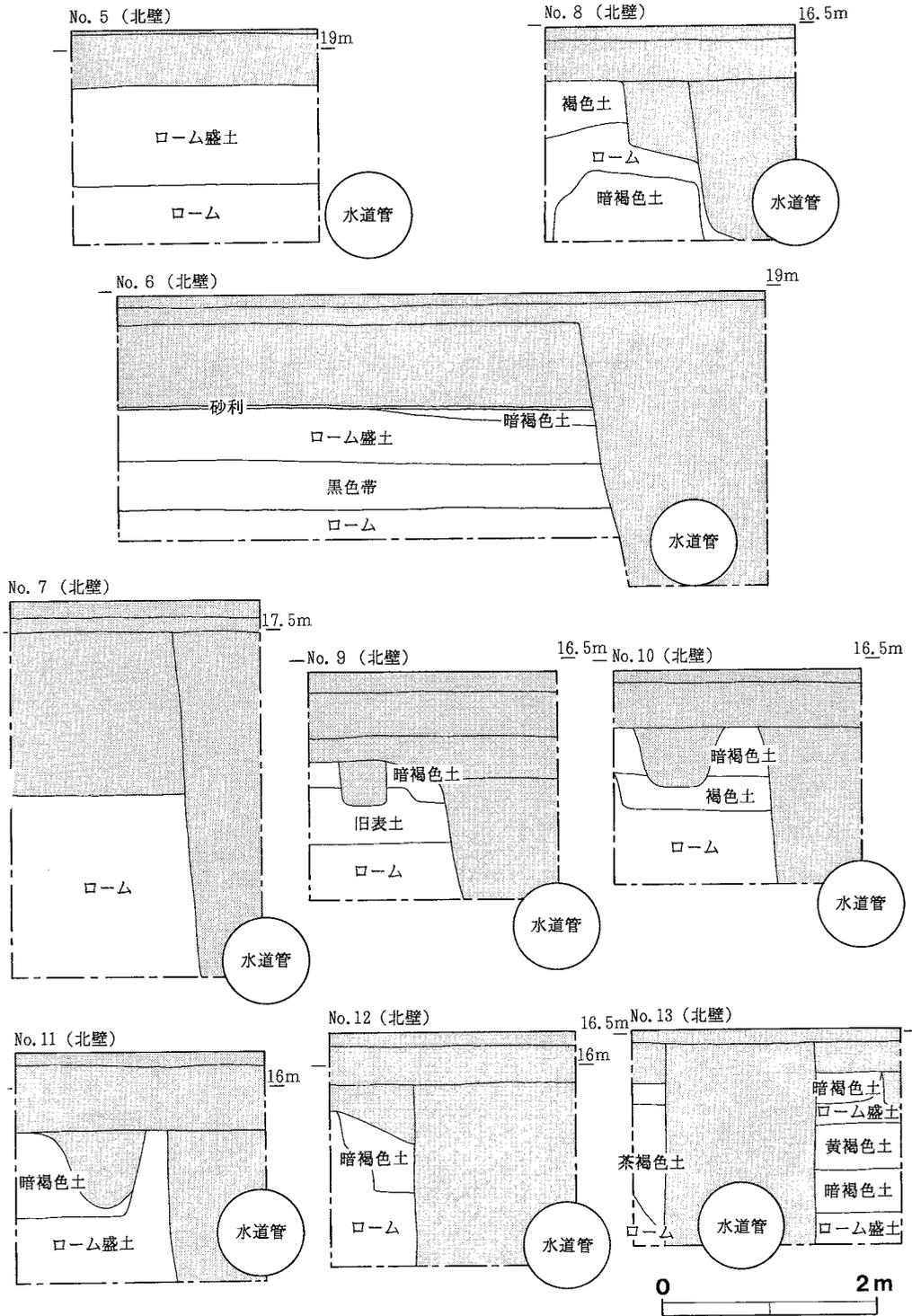


図26 No.5～No.13トレンチ断面図

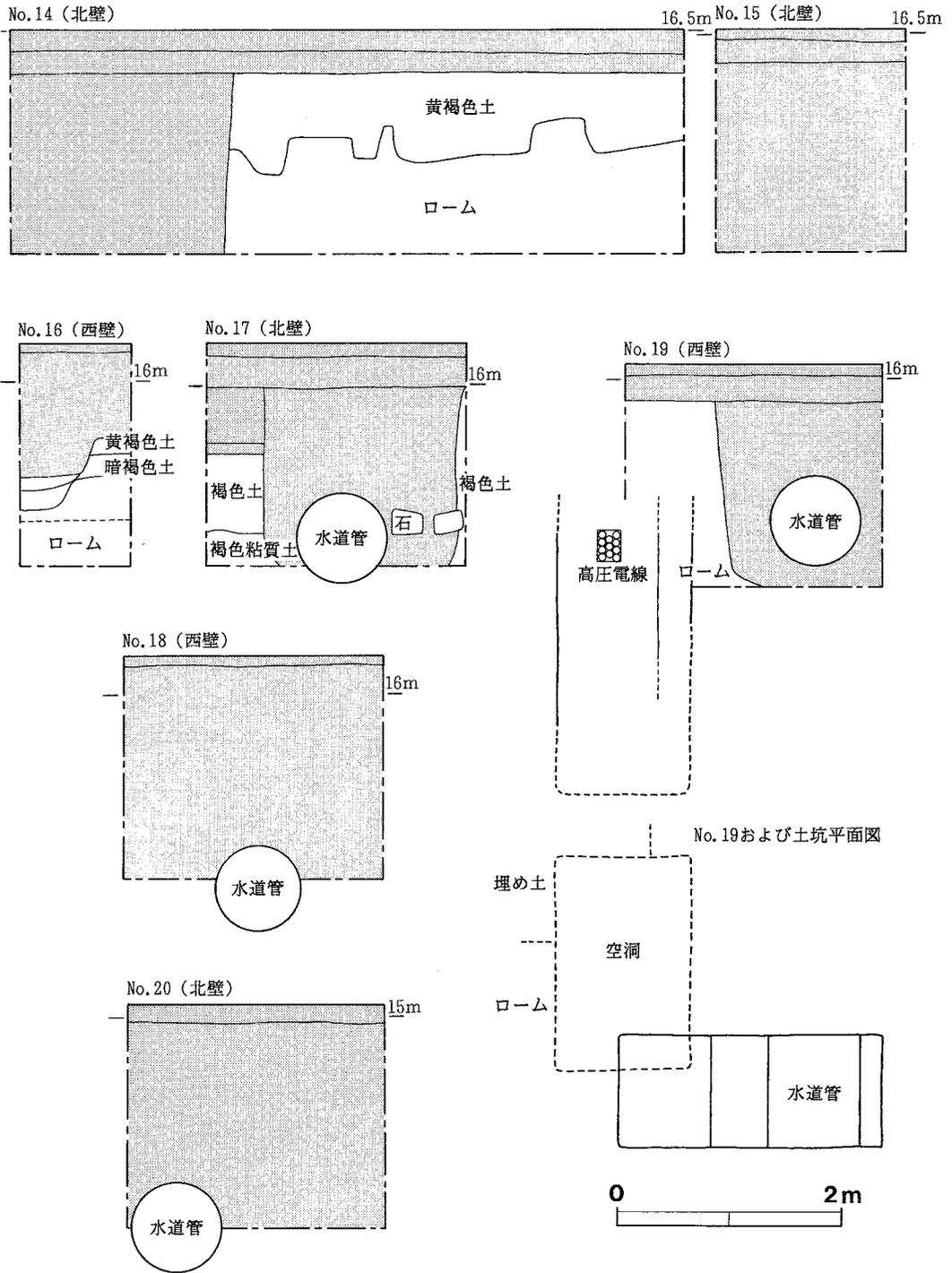


図27 No.14~No.20トレンチ断面図および平面図

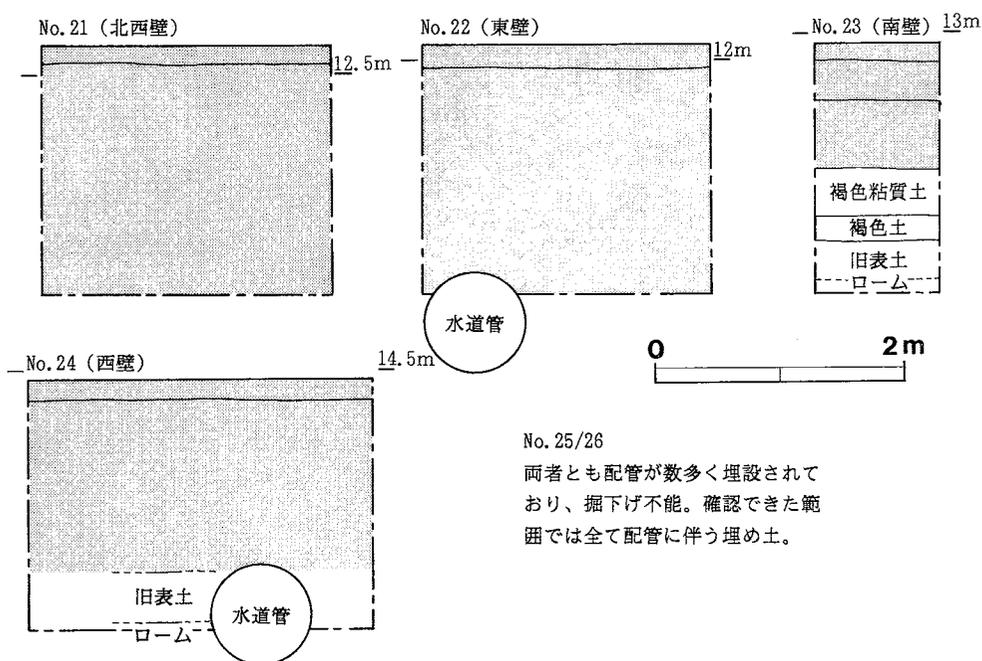


図28 No.21～No.24トレンチ断面図

遺物

本立会調査では遺物収納箱で4箱の遺物が出土した。このうちのほとんどが近世・近代の陶磁器である。この他には数点の瓦・金属製品と歯ブラシがある。また旧表土中からは、縄文時代後期の土器片（第29図-1）が1点検出されている。

陶磁器類が最も多く認められたのはNo.4トレンチで遺物収納箱3箱、No.17トレンチが半箱、他に少量の遺物がNo.6・11・13・19・23・24トレンチから出土している。これらを種別ごとに見ると、磁器が7割、陶器が2割（この中では貧乏徳利の量が目立つ）、土器が1割（透明釉を施した土師質土器も含む）である。

このなかでNo.4・17トレンチでは17世紀末～18世紀初頭の被熱した同器形・同文様の製品が数個体分出土しており、火災の一括廃棄資料と思われる。本報告ではこの遺物を中心に実測図を作成した（図29）。これより新しい年代の遺物は写真のみを掲載した（PL.11～15）。

まず一括資料をトレンチごとにふれてゆく。

No.4トレンチ一括資料 図29-3は猪口である。染付で体部外面に唐草文を描く。唐草文の脇は白ヌキのスペースがある。これを1単位として、数単位で一周していたのであろう。高台内には1重圏線内に「大明成化年製」銘がある。

図29-2（PL.11-3）は染付の小鉢である。体部を欠損するが、見込みには2重圏線内に手

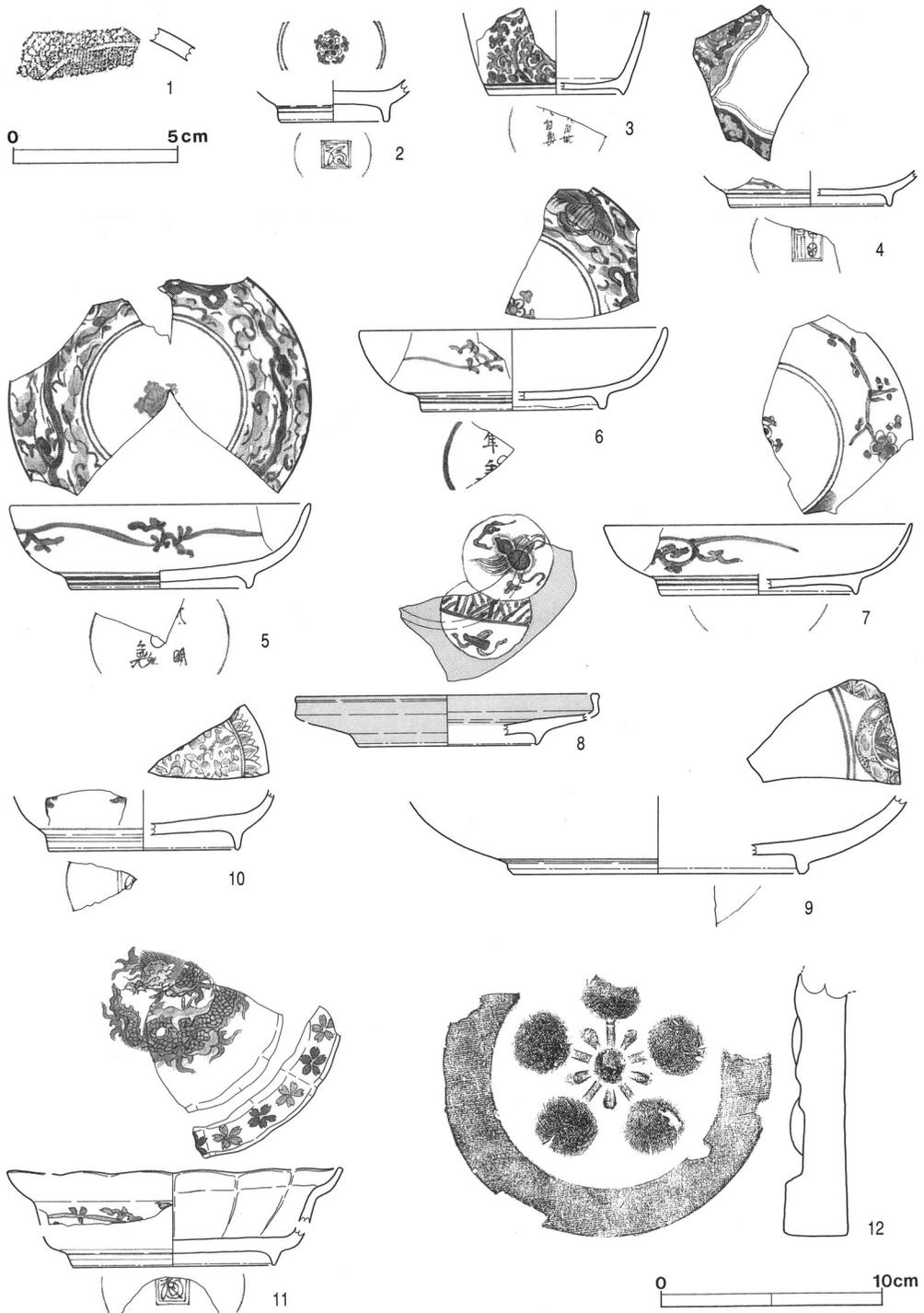


図29 上水道試掘調査地出土遺物実測図

描きの五弁花，高台内は1重圏線内に渦福銘。胎土は純白で緻密な，上手の製品である。

図29-10（PL.11-6）も染付の小鉢である。図29-2より大ぶりのものである。見込みは2重圏線の内側に細かい唐草文（細線で輪郭を描いた中をダミで埋める）を施す。体部外面のごく一部に残る文様は全周を数単位で巡る唐草文と考えられる。高台内は1重圏線内に渦福銘か？。

PL.12-8は染付の小鉢で体部を輪花状に型打ちするもの。口鏝で口縁部内面に蝶を描き，体部外面にも文様を施す。

PL.12-5は染付の碗。内面は七宝繫ぎと唐草文の組み合わせ，体部外面は紅葉文である。器形的には碗であるが，内面に文様があるところをみると，鉢であろうか。

PL.12-11は染付の型打ちの深皿である。体部は中位で外側へ緩やかに外反し，口縁部が直立する。体部内面は木の葉文，体部外面は唐草文。

PL.12-14も染付の型打ち深皿になると思われるもの。体部内面には桜花文，体部外面には唐草文が描かれる。高台内には1重圏線内に「大明」銘がある。

図29-5（PL.11-4）は染付小皿である。口鏝で見込みにはコンニャク判で五弁花，体部内面には2単位の花弁文，体部外面には唐草文（2単位）を施す。高台内には1重圏線内に「太明年製」銘があり，またハリ支え痕が中央部に1箇所残る。

図29-6（PL.11-7）は図29-5と見込みのコンニャク判の五弁花が少し相違するだけで，同一文様・同一器形である。この図29-5・6は他に同一の器形・文様のものが15個体以上出土している。

図29-7（PL.11-5）も染付小皿である。見込みには手描きで五弁花，体部内面には梅枝文，体部外面の文様は唐草文である。高台内には1重圏線が巡る。

図29-4（PL.11-9）は見込みに空白部を設け，体部内面に岩の上に乗った獅子文（残存部では脚と岩の部分のみ）と唐草文を細密に描く染付小鉢。体部外面も唐草文であろう。高台内には2重圏線内に角福銘がある。またハリ支え痕が1箇所残る。全体に薄手の作りである。

PL.12-1・2は同一文様・器形と思われる染付小皿である。梅枝折文を体部内面に，数単位の唐草文をその外面に施す。内面の呉須はにじんでいる。

PL.12-3も染付の小皿で，体部内面に木の葉文を描いている。

PL.12-4も同様に染付の小皿であるが，体部は花卉状の型打ち成形である。口鏝で，体部内面には細線で輪郭書きされた流水に桜花文が描かれる。体部外面は唐草文で，高台の内側には1重の圏線を施す。

PL.12-6も型打ち成形で，口鏝の染付小皿である。体部内面は雪輪文で，体部外面は花唐草文と思われる。高台内は1重圏線内に2重杵の銘が入る。

PL.12-7は内面に草文を施す染付小皿である。体部外面の文様は数単位で一周する図29-5のような唐草文であろう。

PL.12-9は口唇部を輪花状に型打ちする小皿で，口鏝である。PL.12-11と同様に体部上位か

ら口唇部にかけて屈曲する。体部内面上半には細線で輪郭を描き、ダミでその中を埋める花唐草文を施す。体部外面は3, 4単位で一周する唐草文。

PL.12-10は染付小皿で、体部内面は密の唐草文であるが、見込みにも文様が描かれる。高台内には1重の圏線が巡る。

PL.12-12は口鏤を施す染付小皿である。型打ちで体部は波状を呈する。体部内面は雪輪文の中に秋草を描き、体部外面は唐草文を施している。高台内には1重圏線が巡る。

PL.12-15は染付小皿で、内面にクモの巣文、体部外面にも文様がある。高台内には1重圏線を施し、中央部の2重角枠に銘が書かれているものである。

No.17トレンチ一括資料 図29-8 (PL.11-1) は色絵瑠璃釉の型打ち小皿である。見込みには小さい段が巡り、体部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は玉縁になる。瑠璃釉は内面と体部外面のみに施される。高台内には瑠璃釉は施されない。見込みには白抜きした円の中に赤・その他の色（被熱変色していて何色か不明）で宝尽くしが描かれる。これは同一文様・器形のものが3個体以上出土している。他にも同一器形で、口唇部に呉須を塗り、内面と体部外面に上絵付のあるものが1個体以上存在している。

図29-11 (PL.11-2) は染付の型打ちの深皿である。PL.12-9・11と同じように体部が屈曲するものである。体部は輪花状に型打ちされる。見込みは細密な竜文、口縁部内面には桜花文が描かれる。体部外面には3, 4単位で一周する唐草文を施す。高台内には1重圏線が巡り、その中心の2重角枠内に渦福銘、またハリ支え痕が1箇所残っている。他にも同一器形・文様のものが数個体以上確認されている。これは類品が南川原窯ノ辻窯にあるものである。

PL.12-16は見込みに細密な獅子文を描く染付小皿である。高台内の1重圏線内に角枠の銘が入る。

PL.12-13は体部を輪花状に型打ちした小皿である。体部内面は薄瑠璃釉をかけ、体部外面にはツル草文を施すもの。

なお、今までにあげた製品はすべて肥前産のものである。

以上のNo.4・17トレンチの一括資料は、ほとんどの個体が被熱しており、同一文様・器形のものが複数個体出土している。またその生産年代をみると、すべて17世紀末から18世紀初頭におさまる。たとえば図29-9, PL.12-9・10の細い輪郭線の中をダミで埋める花唐草文、図29-3の唐草文の脇に空白域を設ける文様構成、同様に図29-4の体部内面に文様を施し、見込みに空白部分をつくる構成、さらにPL.12-9・11, 図29-11の屈曲する体部の深皿もこの時期に特徴的にみられるものである。図29-5・6に施されるコンニャク判は1690年前後に肥前で使われ出したとされる。これらのことからNo.4・17の一括資料は1690年前後から18世紀初頭までにおさまる火災の廃棄資料と考えてよいであろう。『加賀藩史料』によれば、1703(元禄16)年に「類焼」の記録があるので、この火災の可能性が最も高い¹¹⁾。またこの火災時の廃棄と考えられる一括資

料は、東京大学構内の御殿下記念館地点²⁾や理学部7号館地点³⁾でも確認されている。これらの一括資料の他に、No.19トレンチより「古九谷」の色絵皿が出土している（図29-9, PL.11-8）。体部内面の見込み際には呉須で2重圏線が入り、体部内面には連続する丸文が描かれる。丸文は外周には赤色と緑色で幾何学文が巡らされ、その中には草花文（赤と緑色）を施す。外面の高台際には呉須で2重圏線、高台内には1重圏線が巡る。釉は生がけで、畳付は釉際に削りが入る⁴⁾。一方、一括資料以外の出土遺物については以下のようなものである。

No.4トレンチ PL.12-17（推定口径13.4cm, 推定底径3.4cm, 器高4.2cm）は、人工呉須を使用した染付碗である。口唇部を呉須で青く塗り、型紙摺で内面に菊花と毘沙門亀甲文・鹿の子文、体部外面は草花を施す丸文、その地文には鹿の子・四方禪文を描くもの。

PL.12-18（推定口径11cm, 底径2.6cm, 器高4.2cm）も、人工呉須染付の碗である。型紙摺で口縁部内面に瓔珞文、体部外面には青海波文の地文に窓絵が入るが、この窓絵には「日清」⁵⁾とあり、弁髪⁶⁾の満州人の持っている旗を軍人（日本人）が奪い取ろうとしている絵が描かれている。日清戦争（1894～1895年）に関連すると考えられよう。

PL.12-17・18は共に肥前産の磁器で、その年代は1880年代以降とされるものであるが、PL.12-18はその絵柄からさらに時期を限定できるもの（19世紀末）である。

PL.12-19～21, 13-1は瀬戸・美濃産の人工呉須染付の磁器碗である。

PL.12-20, 13-1は端反り形である。PL.12-20（推定口径11.4cm, 底径2.8cm, 器高5.6cm）と、同じく21（推定口径10cm, 底径3cm, 器高3.8cm）は型紙摺で文様を施す。前者は見込みに松竹梅繋ぎ文、口縁部内面に瓔珞文、体部外面には列点文の地文に窓絵花卉文・松文が描かれる。また後者は内面に花唐草文、口縁部外面に唐草文、体部下半には花卉文を施す。両者とも1880年代以降に生産されたもの。PL.13-1（推定口径12.8cm, 推定底径4.1cm, 器高5.6cm）は、手描きで見込みに「寿」の文字、口縁部内面に斜格子文、体部外面に花卉文が絵付けされる。見込みの厚さはぶ厚く、高台内はかなりの上げ底になっている。これも生産年代は1880年代以降である。

PL.12-19（推定口径10.8cm, 底径3.6cm, 器高4.3cm）は、銅版摺で体部外面に花卉文と唐子文を施し、その後文様内をタミで埋める。高台内には「陶々園製」の銘がある。1900年代以降にその生産年代が当てられる。

PL.13-2・3, 14-15・16は肥前産の筆書きの染付碗である。PL.13-2（推定口径9.6cm, 底径3.6cm, 器高5cm）は、くらわんか手のもので胎土は灰白色、見込みの厚さがぶ厚い。体部外面には梅花文、高台内には不明銘が書かれる。18世紀後半～19世紀前半のもの。PL.13-3（底径2.2cm）は、腰が張り、高台径の小さい碗である。見込みには五弁花が、体部外面には格子の地文に菊花文が描かれる。18世紀後半。PL.14-15（推定口径11cm, 推定底径4.6cm, 器高6cm）は、端反り形のものである。見込みに文様があり、体部外面には草花文が巡らされる。PL.14-

16（底径4.5cm）は、見込み1重圏線内に松竹梅繋ぎ文、体部外面には縦線主体の文様が描かれる。どちらも19世紀後葉のものである。

PL.13-4（推定口径10cm，底径6cm，器高6.5cm）は高台が高く，体部が直線的に開く広東碗である。染付で，見込みに帆かけ舟様の文様を描き，口縁部内面に2重圏線を施す。体部外面は山水文である。瀬戸・美濃産で19世紀前葉～中葉のもの。

PL.13-6（推定口径6.8cm，底径3.6cm，器高4.8cm）は，染付の湯のみである。口縁部内面に2重圏線，体部外面にコウモリ文を施すもの。19世紀第2四半期のもの。

PL.13-7（推定口径5cm，推定底径3.2cm，器高5.7cm）も，染付の湯のみ。呉須は人工呉須で，口唇部を青く塗り，体部外面にはよろけ縞文を描く。19世紀後葉のもの。

PL.13-8（推定口径8.2cm，底径3cm，器高4.2cm）は青磁染付の小坏。外面は青磁釉で，見込みは型打ちの波涛文（陰刻）の上をダミで埋める。高台は蛇ノ目高台である。19世紀後半。

このPL.13-6～8，14-14は瀬戸・美濃産である。

PL.13-9～11も同じく瀬戸・美濃産の皿である。9（推定口径14cm，底径7.2cm，器高2.6cm）は，内面は釉下彩で草花文を描き（人工呉須・緑色・褐色），体部外面は人工呉須で花唐草文を施す。高台内は角福銘。1890～1900年代。10（口径20cm，底径8.8cm，器高3.7cm）は，人工呉須染付の蛇ノ目凹形高台のもの。型紙摺で，見込みは松竹梅繋ぎ文，内面花卉文，体部外面は花唐草文（3単位）を施している。9と同時期の製品。11（推定口径21.6cm，推定底径13.4cm，器高2.6cm）は，人工呉須の染付の洋皿。銅版摺で内面には花唐草文が施される。1900～1910年代のもの。

PL.13-12（推定口径13cm，推定底径6.8cm，器高3.9cm）は，肥前産の18世紀後半の染付深皿である。体部内面には草花文，体部外面には唐草文が描かれている。高台内は1重圏線が巡る。

PL.13-13（口径8cm，底径3.8cm，器高1.7cm）は，瀬戸・美濃産の白磁の皿。内面には大黒天が型打ちされる（陽刻）。口唇部は波状になっている。19世紀後半のもの。

PL.13-14（推定口径9.2cm，底径5cm，器高2.3cm）も同産地製の白磁皿である。体部は菊花状に型打ちされ，内面には鶴亀文が陽刻で型打ちされている。釉は全面白濁している。これも19世紀後半以降のもの。

PL.13-15（推定口径20.4cm，推定底径13cm，器高2.8cm）は染付皿である。口鏤で，見込みに五弁花，内面は区画割花卉文，体部外面には唐草文を巡らす。高台内の1重圏線内に「大明成□年製」銘を施す。焼き継ぎ補修痕のある18世紀の肥前産製品。

PL.14-2（推定口径9.6cm，推定高台径3.6cm，器高2.5cm）は，染付の飯碗の蓋である。見込みには2重圏線内に五弁花を，口縁部内面に四方禪文，体部外面には草花文を描いている。肥前産の18世紀後葉のものである。

PL.14-6（口径9cm，高台径3.8cm，器高2.9cm）も同産地の飯碗の蓋である。青磁染付で，外面は青磁釉，見込みにコンニャク判の五弁花，口縁部には四方禪文を配している。年代的には

PL.14-2と同じであるが、こちらのほうが作りがぼつてりしている（釉は生がけのくらわんか手）。

PL.14-3（推定口径2.5cm，推定底径2.6cm，器高2.5cm）は，肥前産の染付の蓋物（碗形）である。口縁部内面は無釉で，体部外面の上半部のみにダミを施す。18世紀のものか。

PL.14-7（口径4.5cm，高台径3.2cm，器高2.2cm）は，青磁染付の飯碗の蓋。口鏝で，外面の高台内以外はクローム青磁釉を施す。内面は人工呉須で草文と漢詩が描かれている。高台内には崩れた角福銘が書かれる。19世紀後葉の瀬戸・美濃産である。

PL.14-4（底径2cm）は，色絵の小坏である。見込みは赤・青・金色で文様が描かれている。高台内には中位に段があり，裾部に広がっている。PL.14-5（推定口径5.6cm，推定底径3.8cm，器高2.6cm）も，色絵の小坏である。見込みに金色と青色（着色した白玉⁵⁾）で文様を施す（草文?）。金色の上絵付部分は「追分」と読める。どちらも瀬戸・美濃産の磁器で，19世紀第2四半期に多く見られる。

PL.14-8（推定口径11.6cm，底径10.6cm，器高4cm）は，染付の蓋物。口唇部と外面の底部際は無釉になっている。体部外面には，清朝磁器の影響の花卉文と蝙蝠文が交互に配される。肥前産の19世紀前葉～中葉の製品。

PL.14-10（推定受部径6.4cm，推定底径7.2cm，器高2.8cm）は，白磁の蓋物である。「蓋物」というより，断面が半球状を呈する内面から見るとクリームを入れた容器といった方がより近い。口縁部と畳付は無釉。19世紀後葉以降の瀬戸・美濃の製品。

PL.14-11（底径3cm）は，肥前産と思われる白磁の製品。上部を欠損しているが，内面も施釉しており，広口の壺のようなものと推定される。近代に入ってからのものである。

PL.14-12（口径2cm，推定底径7.6cm，器高25.7cm）は，染付の瓶である。胴部には松と梅が描かれる。肥前産の18世紀後半のものである。

PL.14-13（推定口径14.8cm，底径7cm，器高6.3cm）は，青磁の鉢である。体部を葉に見立てて型打ち（内面には葉脈陽刻），青磁釉は全面にかけられている。19世紀の肥前のものである。

PL.14-14（底径5.2cm）は，陶器の灰落としてである。体部外面には鉄で麦穂が描かれる。体部外面には灰釉（透明）がかけられる。京焼系の生産地か。18世紀後半～19世紀のもの。口唇部は敲打痕により摩滅している。

PL.14-18（口径5cm，底径7.2cm，器高11.3cm）は，瀬戸・美濃産の陶器の油差しである。高台部周囲を除く外面が鉛釉がけのもの。18世紀後半。

PL.15-1～3（1の法量は底径7cm，残存高15.9cm，2は口径3cm，底径8cm，器高21.3cm，3は底径8cm，残存高19.7cm）は，瀬戸・美濃産の貧乏徳利である。いずれも外面に灰釉をかけているが，1は底部は無釉，2・3は釉拭き取りである。3個体とも点刻釘書⁶⁾が胴部に施される。1は「久〇」，2は「Λ西」，3は「久上」と「太」である。生産年代は18世紀後葉～19世紀中葉。

PL.15-5（推定口径7.7cm）は陶器の蓋であるが、何の蓋かは不明。受けの部分が異常に長い。上面には鉄釉系の釉がかけられるが、胎土中の鉄分が吹き出して凹凸している。内面は灰釉（透明）である。生産地・年代共に不明。

PL.15-4・6は陶器の土瓶である。どちらも人工具須で絵付される。4は胴部外面白化粧がけの上に型紙摺で窓絵人物文・七宝繫ぎ文を描く。その上から内外面とも灰釉（透明）を施す。生産地不明。6（口径10.2cm，推定底径9cm，器高12.5cm）は益子産のもの。底部以外の外面を白化粧がけした後に、よろけ縞文を施す。内面は灰釉（透明）がけ。底部は半球形の上げ底になっており、底部の外面は煤けている。どちらも年代は19世紀後葉と考えられる。

PL.15-7（推定口径14.8cm，底径11cm，器高11.1cm）は、瀬戸・美濃産の半胴甕。内面と体部外面には鉄釉がかけられる。口唇部と高台内に3箇所目痕が残る。底部は焼成後に穿孔され、植木鉢に転用される。体部の高さが低くなっている19世紀のもの。

PL.15-8・11は、透明釉を施した土器灯火具である。8・11は灯明受皿で、11（口径8.8cm，受部径6cm，底径8cm，器高7.6cm）は台付のもの。8（口径8.4cm，受部径5.6cm，底径4cm，器高2.2cm）は、底部に左回転糸切り痕が残っている。10（口径2.8cm，底径7.2cm，器高13.2cm）は仏花器であろうか。底部には左回転糸切り痕。いずれも18世紀後葉～19世紀のもの。

PL.15-16（推定口径20cm）は、瀬戸・美濃産の染付の植木鉢である。人工具須で口縁部内面には雷文を、体部外面には七宝文・松竹梅文を描いている。焼き継ぎの痕がある。19世紀後葉の製品。

PL.15-15（長15cm，幅1cm，厚5mm）は、骨製の歯ブラシである。毛はすべて抜け落ちている。柄の部分には「子 三號形」と陰刻がある。19世紀後葉～20世紀にかけてのものであろう。

このように見てくるとNo.4トレンチは、18世紀後葉以降から明治時代のものほとんどを占めている。器種は飲食器を中心とする日常雑器が大部分である。

No.13トレンチ 目ぼしい遺物はPL.15-12の丹波産の摺鉢のみである。条線の単位は6本で、雑に施されている。口縁部は外方に縁帯を作り出すタイプで、縁帯の中央には横位の太い沈線が巡る。内面・口縁部外面には鉄泥漿がかけられているが、これも雑で濃淡がある。生産年代は18世紀以降と思われる。

No.17 トレンチ PL.13-5（口径7cm，底径2.6cm，器高3.4cm）は、肥前産の染付の小坏である。体部外面に「福」と「寿」の字を散らしている。18世紀。

PL.14-1（推定口径14cm，推定底径6.8cm，器高3cm）は、染付の皿である。見込みはコンニャク判の五弁花，体部内面には草花文を施している。釉は生がけで，見込みは蛇ノ目釉ハギ，この部分にはチャツの痕が残っている。18世紀の肥前製品。

PL.14-9（口径1.8cm，底径3.4cm，器高9.7cm）は染付の仏花器である。外面には蛸唐草文を描いている。19世紀の肥前のもの。

PL.15-9は土師質の土器の火消壺である。円錐台状の足が1個残っている。底部外面はちぢれ目で、体部内面は煤けている。

PL.15-13（推定底径16cm，器高9.8cm）は、瓦質の土器火鉢である。体部外面は縦位の短沈線文（回転押印文）の後，横位の雑なミガキ。底部外面は未調整である。口唇部の内側は敲打痕が顕著。18世紀後半～19世紀前半の製品である。

PL.15-14（口径6.8cm，底径4.8cm，器高11cm）は焼塩壺である。手づくね成形のもので，体部外面には2重枠内に「天下一堺みなと藤左衛門」の刻印がある。この刻印のものは文献上からは1659年から1679年までとされる。（鈴木 裕子）

註

- 1) 現在の文京区の小石川の後楽園が出火元とされる。いわゆる「水戸様火事」。
- 2) 東京大学埋蔵文化財調査室1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 3) 東京大学遺跡調査室1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 4) 同じ丸文の「古丸谷」は，理学部7号館地点でも出土例がある。
- 5) 焼き継ぎ時の材料，鉛ガラスが原料である。光沢がなく，その部分が盛り上がっているのが特徴である。

PL.14-4の色絵の青色もこれの可能性もある。

- 6) 長佐古真也 他1988「近世〈徳利〉の諸様相」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会第1回大会発表要旨

8 東京大学農学部（21世紀館）木質ホール建設予定地点試掘調査概要

所在地 東京都文京区弥生町1-1-1

調査期間 平成9年7月14日～18日

調査面積 約50㎡

調査担当 大成可乃 寺島孝一

I. 調査にいたる経過

東京大学農学部では農学部正門南側の雑木林の中に木質ホール建設を予定している。該所は江戸時代17世紀後半までは町屋であり、それ以降は岩槻街道と中山道の分岐点である本郷追分に面した加賀藩前田家の追分御門や、それに通じる道路であった。また、本郷キャンパス全体は「周知の遺跡」となっており、遺構・遺物の存在が予想されるところであった。しかし、土層の堆積状況や厚さ、生活面の数などを確認する必要があるがあった。そこで、農学部より確認調査を依頼された東京大学埋蔵文化財調査室はこれを受けて上記の日程で確認調査を実施した。

II. 調査の経過と概要

調査は雑木林の中に10カ所の試掘坑を設定し（図30）、9カ所を重機と人力で、1カ所を人力で掘削した。本来ならば全ての試掘坑について関東ローム層（以下、ローム層）まで掘り下げ、遺構・遺物の確認を行うべきところであるが、試掘坑1・3・5・6・7については地面より1.3～1.5mほど掘削したところで良好な硬化面が確認されたため、ローム層まで掘削せず、その硬化面までの土層観察や平面の記録写真を撮るにとどめた。

基本層序は、すべての試掘坑において表土下1.2～1.5mまでは煉瓦片を含む近・現代の盛土が堆積し、ローム層までは地表面からおよそ3m前後ある。また調査区南側を除いて表土下1.3m前後で江戸時代の生活面（硬化面）が確認でき、場所によってはその硬化面の上面に焼土が認められるところもある。なおその硬化面から下層は調査区の北・中央・南側で大きく異なる。

以下、個々の試掘坑の様相について述べる（図31）。北側試掘坑1・2では、表土下1m前後のところでも硬化面を確認した。この面が江戸時代の生活面か否かは、遺物を検出することができなかったため断言することはできない。しかし、土層観察からは硬化面中やその面から切り込む遺構の中に煉瓦等が含まれていないことから、近・現代の生活面とは考えにくい。またこの硬化面を切る煉瓦を含む遺構も確認された。したがって江戸時代の生活面と考えてよいものと思われる。中央試掘坑3・5・6では先述した表土下1.3m前後で確認された硬化面上に丸石が検出されたが、如何なる建物に伴う礎石かは未確認である。6ではローム層を確認することができた。その

ローム層を切り込んでいる遺構も検出されたが、その坑底はローム層からさらに1 m以上下である。南側試掘坑7・8・9・10では、8・9を除くと先述したような明瞭な江戸時代の生活面を確認できない。しかし、10では表土下1.3m前後で厚さ約10cmの江戸時代の遺物を含む焼土層を確認した。ただし焼土層が確認できたのはこの試掘坑のみであり、焼土が平面的にどの程度の範囲に広がるかは未確認である。なおこの焼土の下から切り込んでいる遺構が確認されている。8では表土下1.3m前後の面から江戸時代の遺物を含む遺構が切り込んでいる。よってその面を生活面として認識したが、その面はあまり硬化していない。7では表土下1.3m前後で長辺1 m弱の礎石状の石が確認されたため、試掘を断念した。9では南側の他の試掘坑とは地層の堆積状況が大きく異なり、図示したように硬化面が地表面からローム層までの間に4面確認された。この4つの硬化面は、出土する遺物の間に明瞭な時期差があることから、ある生活面を作るための版築ではなく時期を異にして使用された生活面であったと考えられる。

Ⅲ. まとめ

以上のような土層観察の結果、調査区内においては近・現代の攪乱や、樹木の根による攪乱がさほど多くなく、北側では江戸時代の生活面が少なくとも2面以上、中央で1面以上、南側では10に限ってではあるが4つの良好な生活面の存在が確認された。

なお、農学部正門を挟んで本調査区のすぐ北側のあたりを、東京都が平成元年12月から平成3年6月まで発掘調査を行っており、そこでも多くの遺構・遺物が検出され成果が発表されている¹⁾。

また、今回の出土遺物の中や、先述した東京都の調査においても縄文土器片が検出されていることから、江戸時代以前の遺構、遺物の存在も予想される。(大成 可乃)

註

1) 東京大学構内雨水調整池遺跡調査会1994『本郷追分』(本文・遺物編)

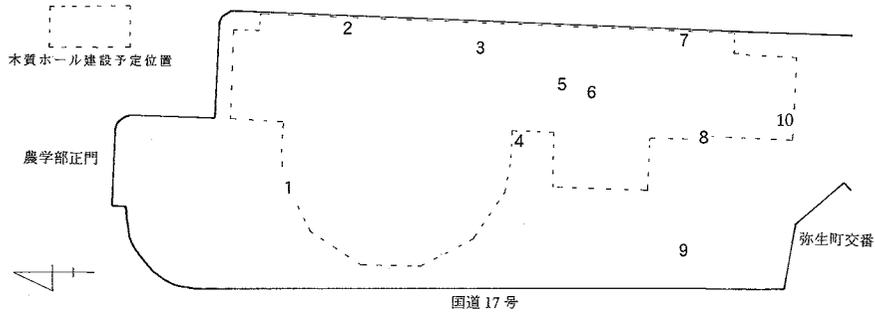


図30 木質ホール建設予定地点全体図 (S = 1/800)

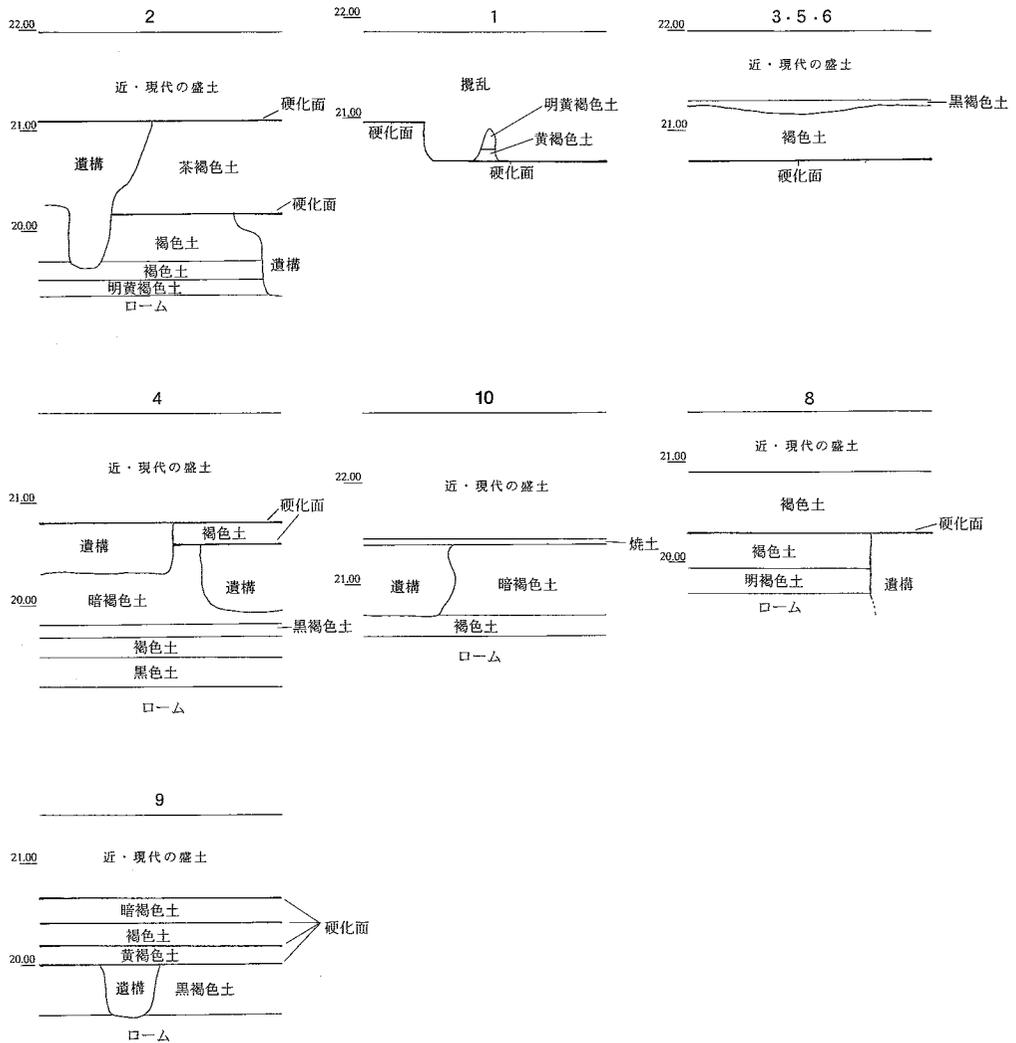
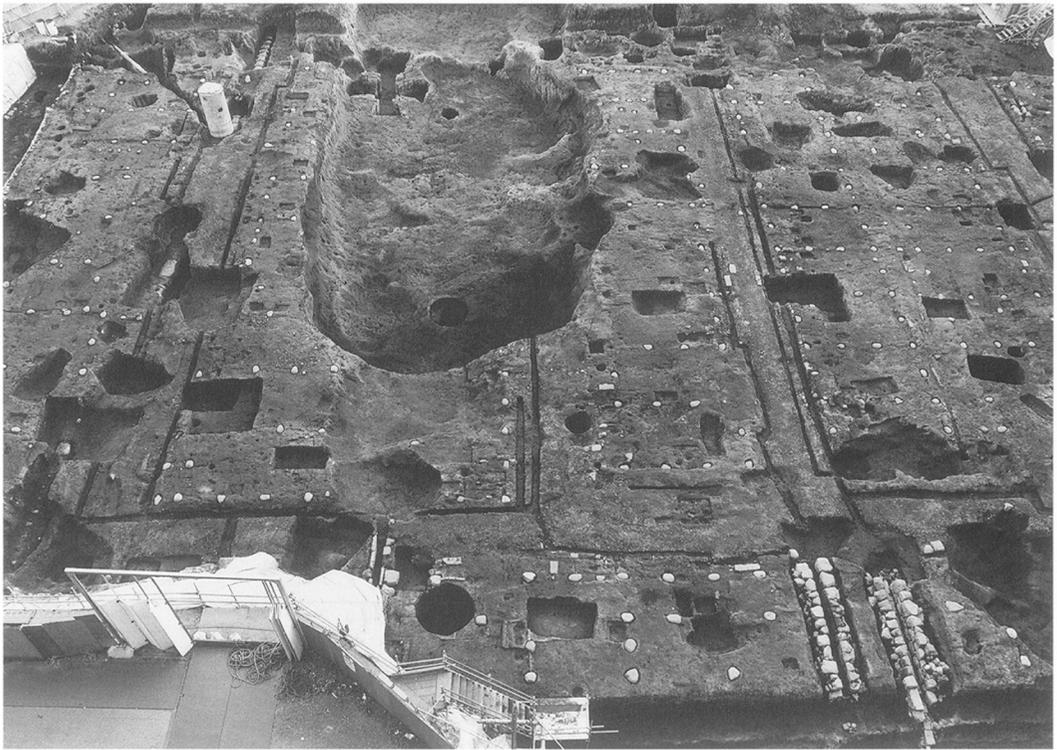
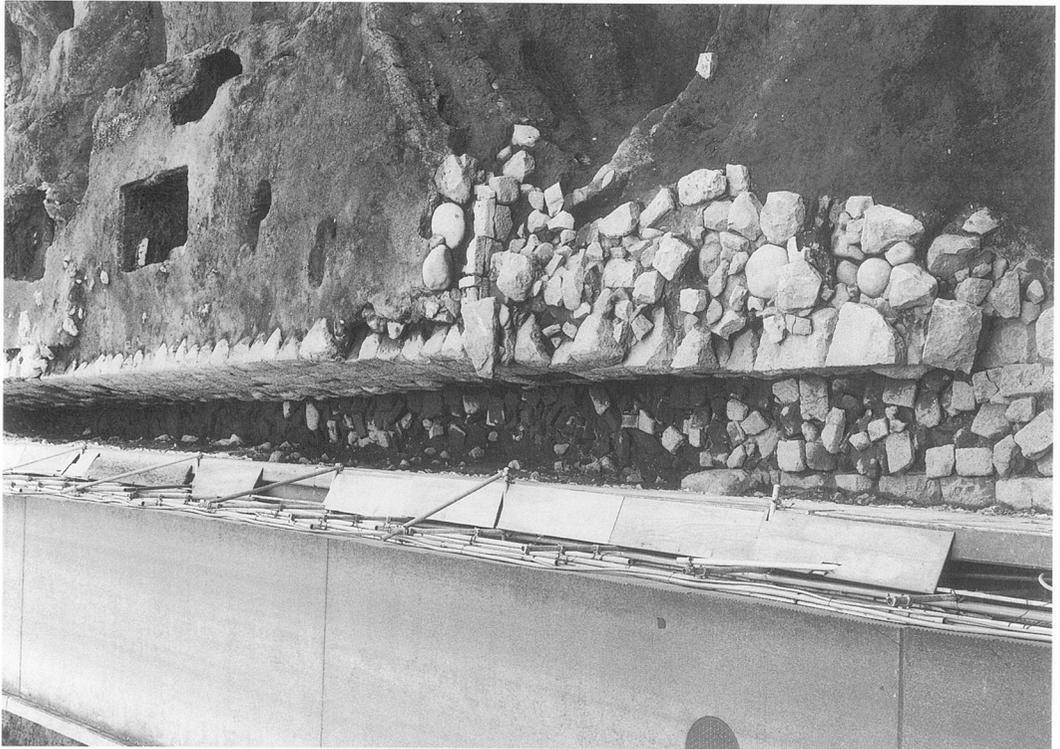


図31 試掘坑土層断面略図

写真図版



上：I期調査区全景，下：D1面長屋群全景



SD1103 (10号組石)



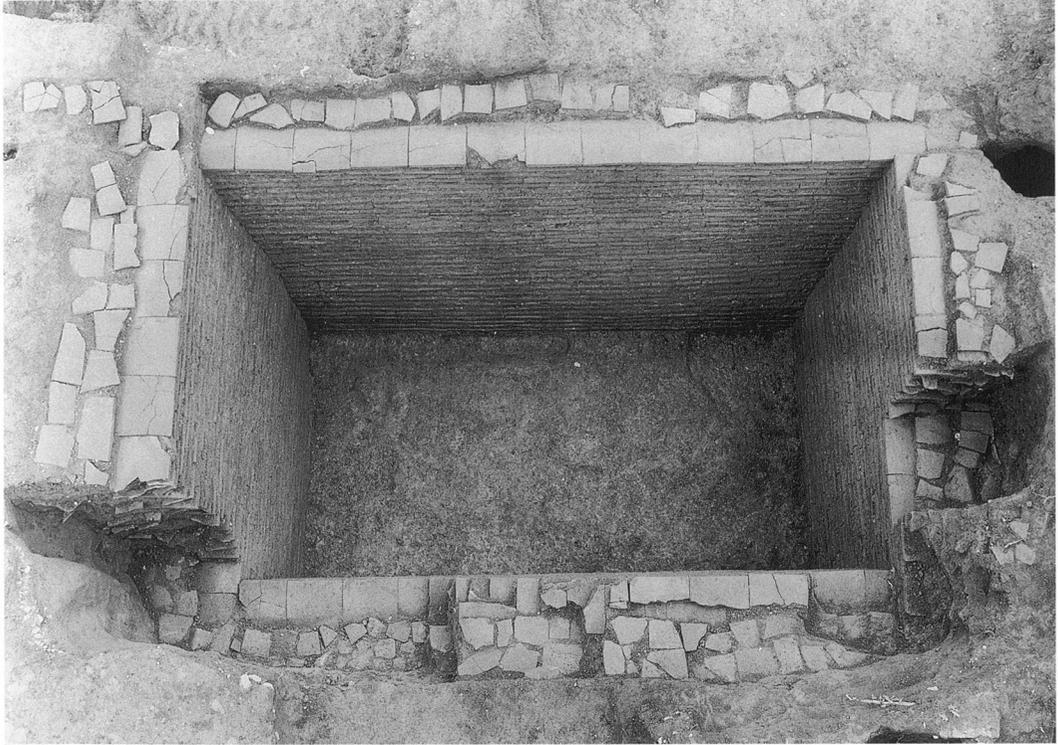
上：C面庭園全景，下：SK03



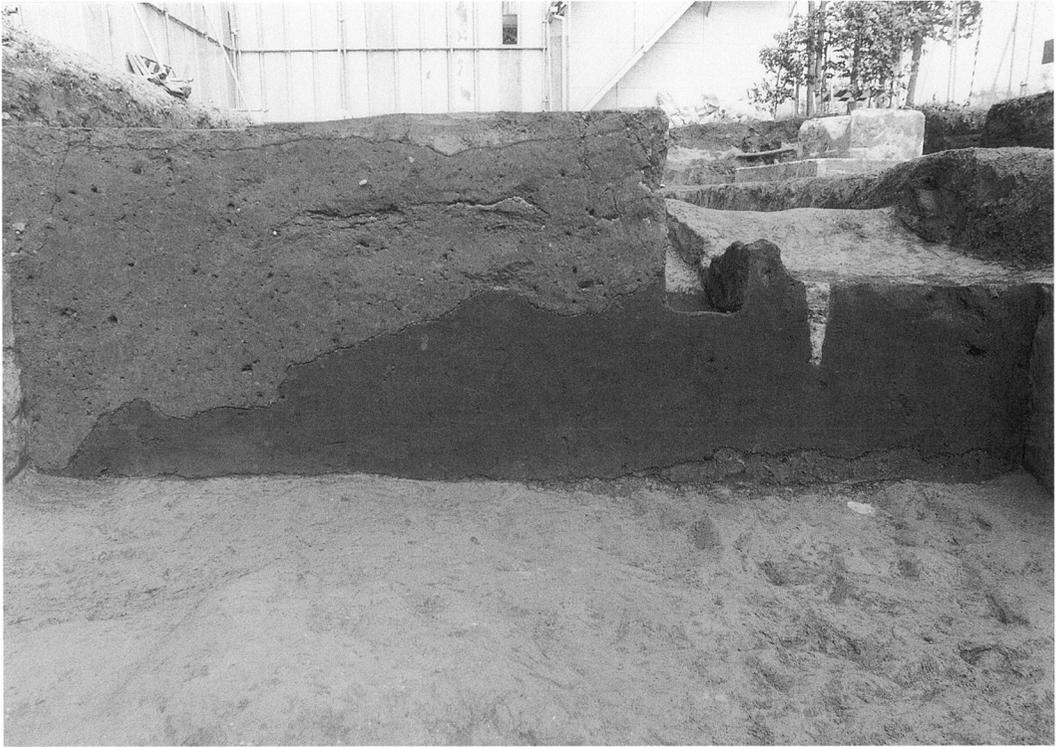
上：講安寺区域墓域全景，下：SG1586, SR1826, SD01



上：門跡，下：能舞台



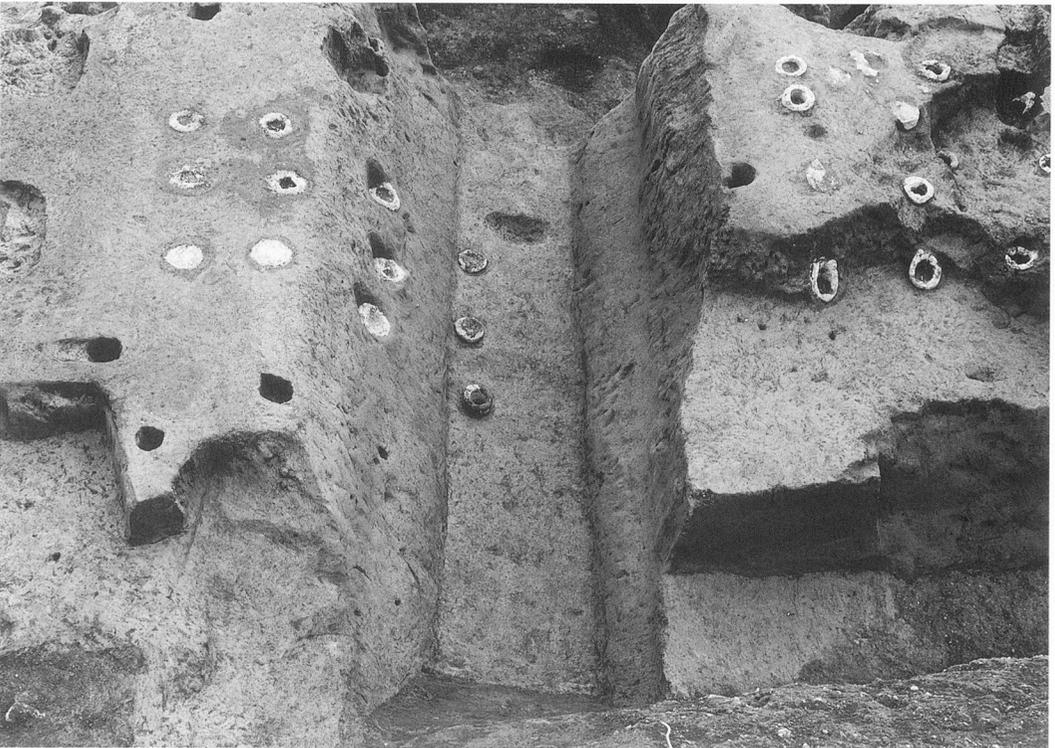
上：瓦積みの地下室 (SU210)，下：井戸跡



上：地下室 (SU03) 土層断面 (西から), 下：調査区全景 (北から)



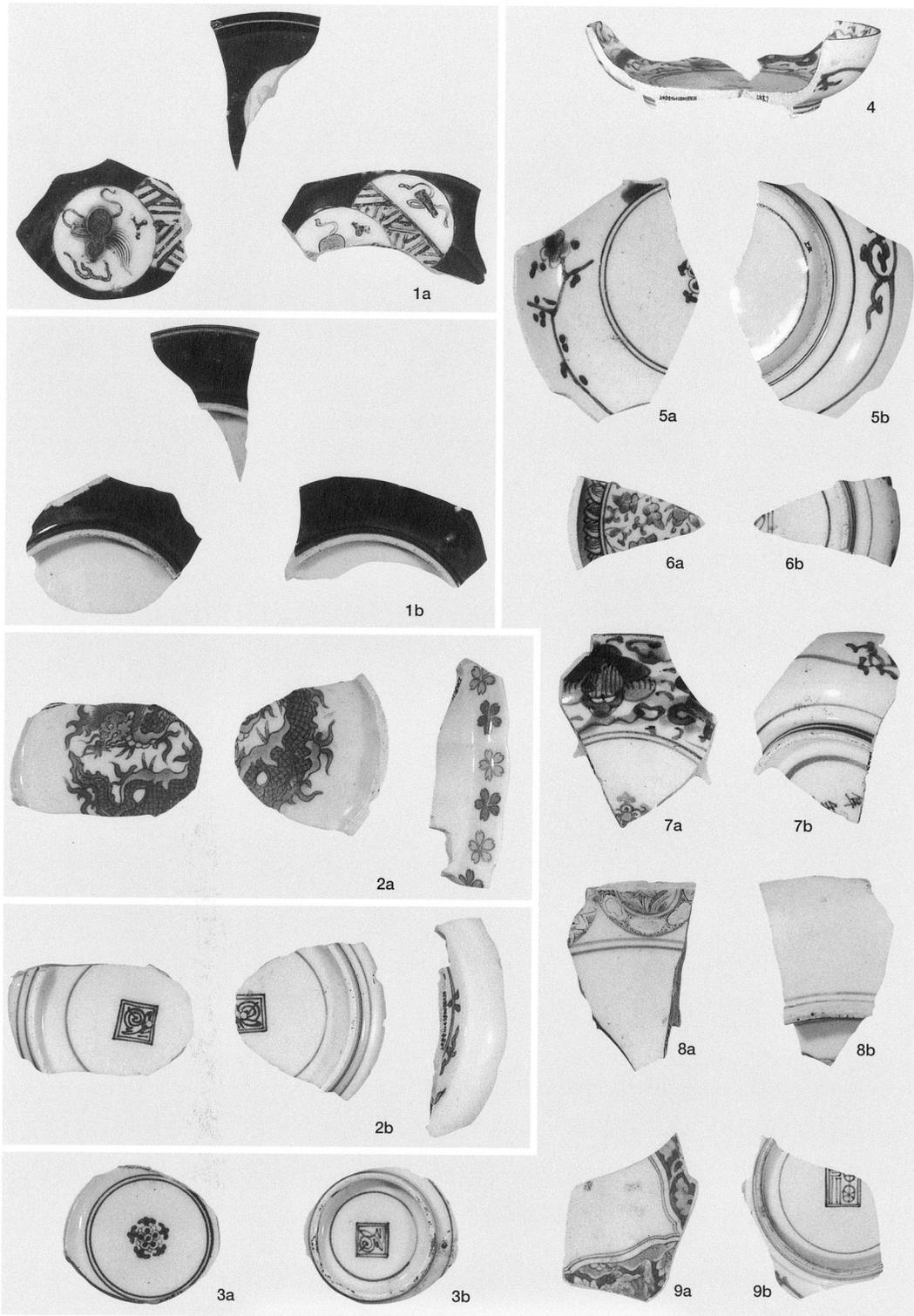
上：SU14，下：礫群出土状況



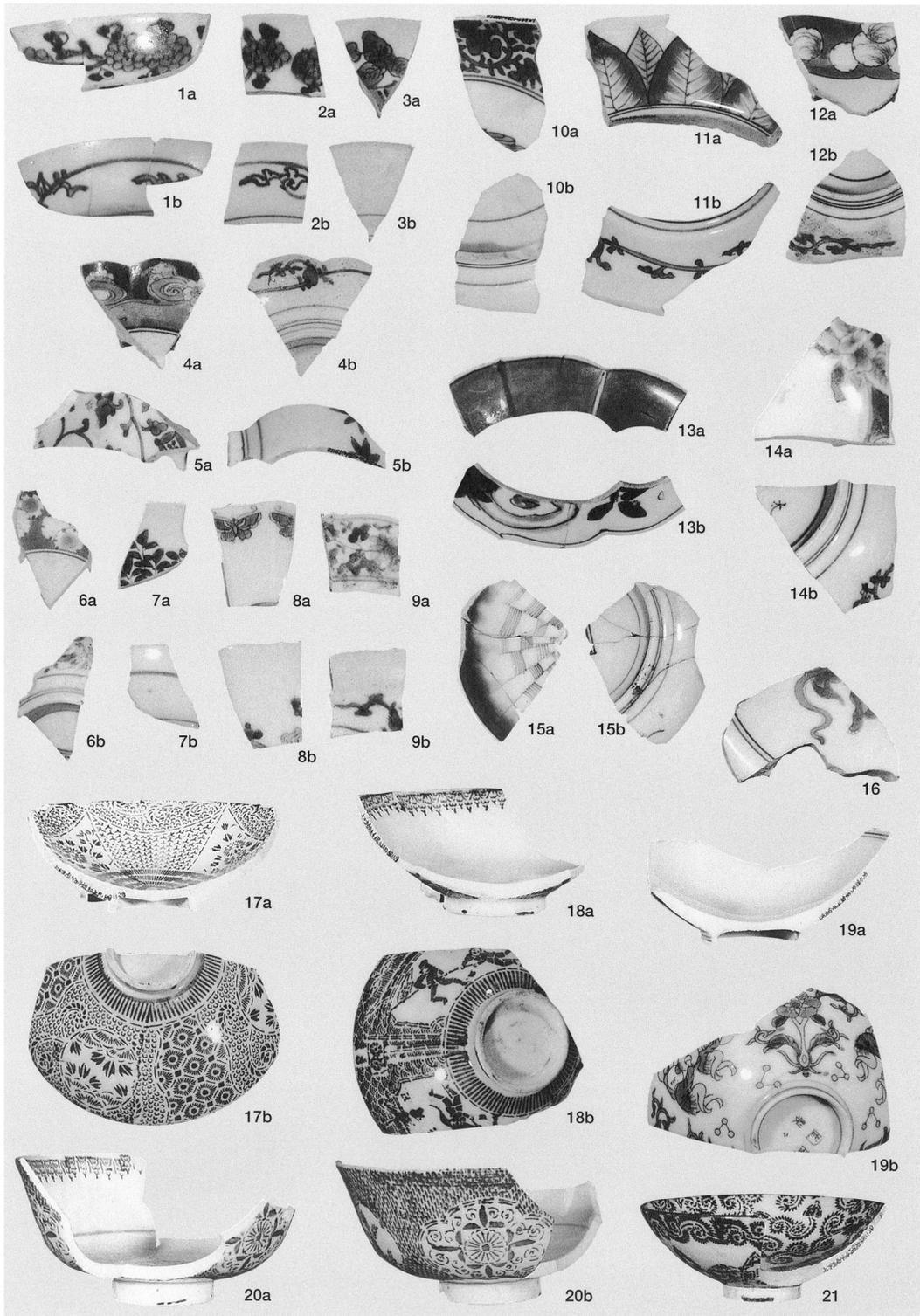
上：調査地点全景，下：SD03



上：池状遺構（SX15），下：土手状遺構



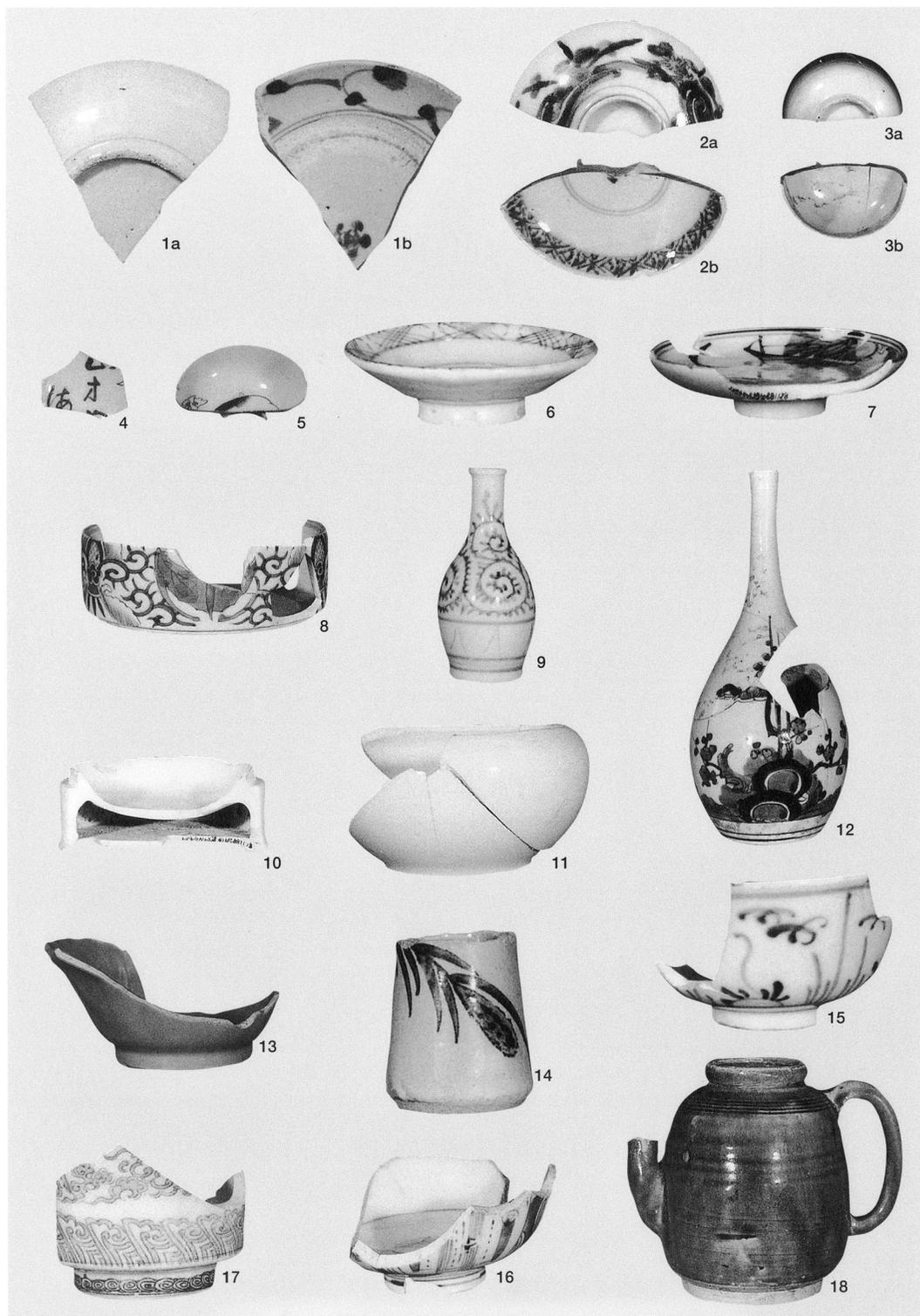
上水道試掘調査 出土遺物 (1)



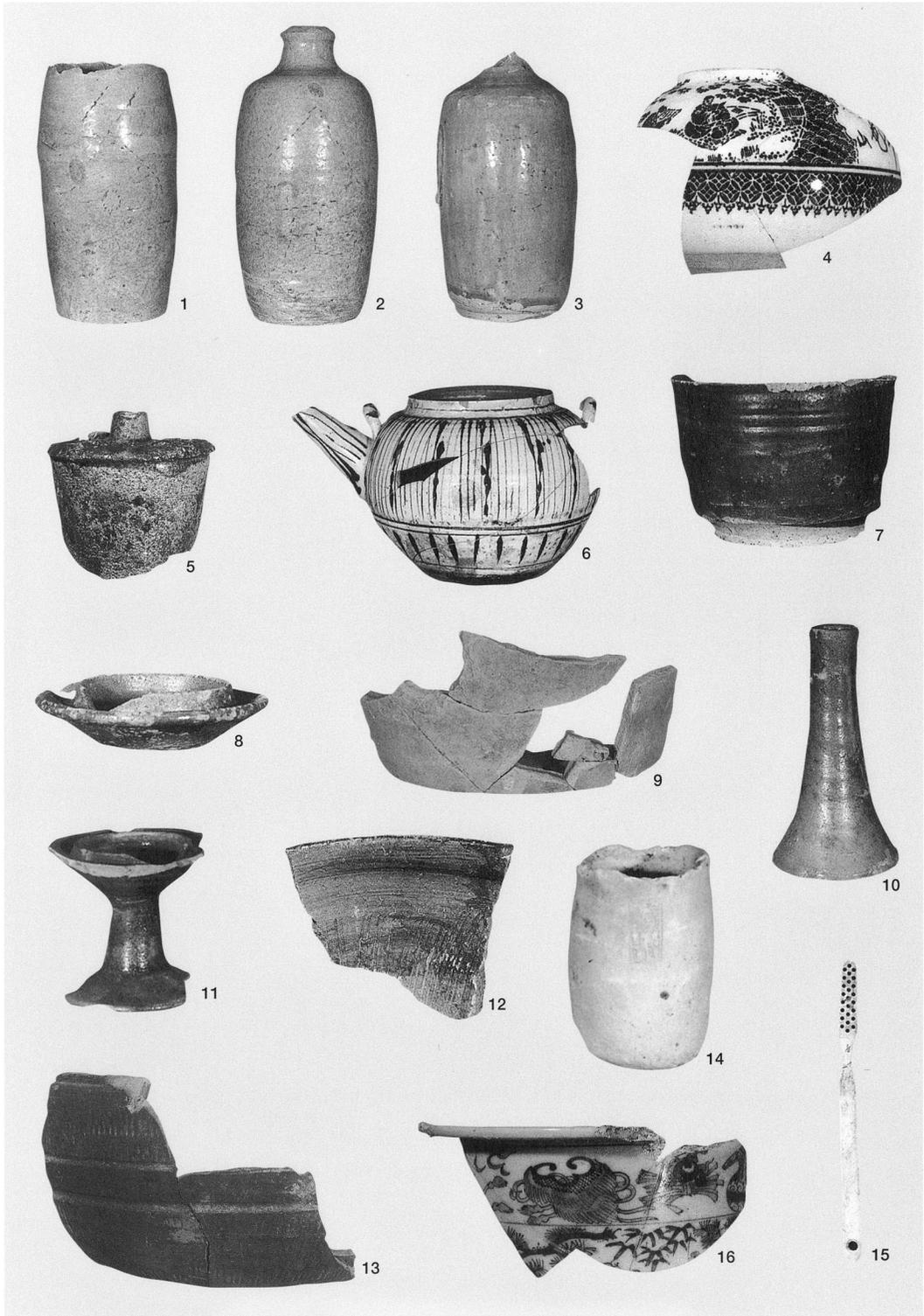
上水道試掘調査 出土遺物(2)



上水道試掘調査 出土遺物(3)



上水道試掘調査 出土遺物(4)



上水道試掘調査 出土遺物(5)

補足：東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点（中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点）遺構出土陶磁器組成表の掲載にあたって

ここに掲載する陶磁器組成表は、東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点（以下、病院地点と略す）の調査によって得られた遺構一括資料である。報告書は1990年に刊行されているが（東京大学遺跡調査室1990）、時間、紙面の制約などの諸条件から、定量分析を試みた資料のうち、帰属する時期区分の様相を最も表出している資料のみを掲載した。本来ならば、早々に資料の提示を行う義務が、調査担当者として課せられているのにも関わらず、約10年の年月が経過し、その間に東大編年及び分類に関する基準の変更、細分が試まれており（堀内1992, 1996, 1997, 分類班1998）、本資料の提示は、器種、小分類の基準や、分類コードに関し、混乱を招く恐れを内包している。しかし、文化史、社会・経済史の復元、自立的編年の構築を指向する器種組成、産地組成などにおける重要性を考え、ここに提示する。

本資料は、以下の条件に基づくものとする。

- 分析資料の選択基準は、病院地点報告書の「底部片数100点という任意のボーダーラインを設け、それ以上出土した遺構に限り種々の分析の対象とし、本地点の相対年代を示した。それ以下の遺構については数量的に遺物群の組成、年代等の分析には不十分と考えこれを除外し」に、基づいている。また提示した数値は、遺構選択基準に用いた底部片数ではなく、推定個体数である。『東京大学構内遺跡調査研究年報』1（以下『年報』1と略す）所収の「東京大学本郷構内の遺跡 農学部家畜病院地点発掘調査報告」（以下『家畜病院報告書』と略す）での分析以降、遺構選択基準に関しても、推定個体数で行っている（東京大学埋蔵文化財調査室1997）。
- 分析は陶磁器を対象としているが、燵徳利を除く徳利、灯火具は含まれていない。これらに関しては、病院地点報告書に独立した分類・分析による論考が掲載されているのでそれを参照されたい（松下1990、佐々木1990）。
- 分類コードは、病院地点の細目をそのまま提示している。その後、本書別冊を含め2回の改訂が行われている。変更点に関しては、本書掲載の対応表と、『家畜病院報告書』所収の「Ⅶ発掘調査の成果 2 陶磁器・土器（2）陶磁器・土器の分類」（堀内1997）で提示した、病院地点との変更点を参照されたい。
- 時期区分は、病院地点の区分を用いており、現在の東大編年とは相違点を有する。それに関しては、『年報』1所収の「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」（堀内1997）表1を参照されたい。（成瀬 晃司）

時期	胎土・産地 器種 小分類	JA											合計	JB																									
		1	2	5	6	13	14	15	26	27	36	合計		1											2														
												a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	他	小計	a	b	c	d	e	g	h	i	
II	F27-1					1			1			2			2	8	1	1											15	27	2		26		17				
	G32-1											0			2	2													4	8			11		5				
	H29-1											0			2														7	9			3						
	H32-5	2	3									5	2		9	3								1				30	45	7		39					1		
	K23-1		6									6			1		2			1								4	8			1		5	1	1			
	L32-1	45	20	9	2				1	1	1	79			6														4	6	20		337						
	AE36-8				1							1		2		7				1								12	22	1		9		3					
	W46-1											0			1	3												8	12	3		15	10	2	1				
小計	47	29	9	3	1	0	1	1	1	1	93	2	2	23	23	3	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	80	137	33	0	441	10	32	2	2	0	
III	C28-1		2								2				2	1	1	2										4	11	2		9	2	10	3				
	F34-11		4		2						6	6	1	11	194		1	1										8	222	2		15	15	17					
	G30-2										0				8			2										20	30			6	1	9	3				
	3号組石										0			2	5													13	20	1		4	2	4	1				
	6号組石		4	1							5		1	3	2	11			8									29	54	5		8	3	10	1				
	小計	0	10	1	2	0	0	0	0	0	0	13	6	2	16	211	12	2	13	0	0	0	0	1	0	0	0	0	74	337	10	0	42	23	50	8	0	0	
IV	K30-1	3									3				34	1		2									19	58	1				8						
V	D32-1										0				2	3	5	3										4	17			1	1	6	1				
	D33-1		1								1				4		2	1						1				5	13				1	2				1	
	E24-1			1							1			1	2		1	7										5	16			1		3	16				
	E28-1		3								3			1	4	6	4											17	32					8	4				
	E31-1		1								1				2	2	2	2										4	10					7	8				
	E34-1		1								1			2	4	3	2	1						1				4	17						1				
	E34-2				1						1			1		4	5						1	1				1	13	1		2							
	E35-4										0	1		4	4	1	2											16	28			1	2	2	2				
	F33-3										0	1		8	21	42	37											79	188			1	1	24	1				
	G20-2										0			3	14	14	12							1				23	67	1			1	12	6				
	G22-1										0				3	6	1											3	13					5	2				
	G22-3										0				2	1									2	1			5	11	1			1	2	2			
	G26-1										0				1	3	5	1	1									5	16			2	1	8	1				
	I20-3				1						1		1		4	2	1	12										14	34	1		2		8					
	K34-1	1	1								2				1	6	4											8	19	1		5	1	11	8			1	
	L34-1	1	1								2			1	3	29	6							2	1			4	46			3		14	6				
	L34-2				1						1			2	2	8	6											2	20			2		1	10				
	1号組石	1	3	1	1						6			1	2	7	8							1	1		2	4	26	1				2	6				
	Z35-5				1						1				11	9												2	22			1	2	5	4				
	AD34-2										0			1	1		4	4										3	13				1	1	2				
AD35-2		1								1			1		2	3	1						1				8	16			1		1	2					
AE36-4	1									1				1	3	16											2	25	1		6		2	2					
小計	4	12	2	5	0	0	0	0	0	0	23	2	1	3	38	64	165	147	4	2	1	6	7	1	2	0	1	0	218	662	7	0	28	12	124	85	0	2	
VI	E22-1			1				1			2	1			5	14	3	7	3					12				19	64	2		1	1	2	6				
	Y34-4										0				3	7		4	2	3								17	40	1				3	2				
	小計	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	1	0	0	8	21	3	11	5	3	0	16	0	0	0	0	0	36	104	3	0	1	1	5	8	0	0		
VII	AE34-3										0						1	3										7	12					1	1				
	AE35-3										0					2	1	4										8	21						2				
	AE39-1				1						1				4	1	2	2										15	37	1				1	2				
	小計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	3	4	9	0	0	6	14	0	0	0	0	30	70	1	0	0	0	2	5	0	0		
VIII	C26-1	1									1				1	3	1											7	15			1		5	5				
	F23-2										0				2	4	2	1					1						5	18				1	1				
	H21-1				1			1			2				3	4	2	1	1										3	31					3				
	H21-2										0				3	25	3	1	1										20	67					4	3			22
	H21-3										0				2	3		1											1	1	4	1	1	1	4				
	H21-8		5								5																		4	7	2								
	I20-1		2								2			2		2													7	1	1		11	25	5		3	2	2
	7号組石										0				2	1	2												10	19	1		1		2				3
	Z37-1										0				6	2	2												11	27					1	2			
	AJ33-1	2	1								3	1			3	10	9	3	6	4									10	25	4		1	1	16	93			
	AJ34-1		1								1				7	2	1	2	4										7	14	9		1	1	11	58		1	2
	AJ34-2				1						1				1	7	2	14	1	6	2								9	21	11			1	10	9			
	AJ35-1				3						3			1	1	1	6	18		4	8								13	71	10		6	1	28	11			
AJ37-2	3									3				2	6	5	3	4	2																				

時期	胎土・産地 器種 小分類	JB																																														
		2							3							4							5 6							7							8 9 10							11				
		j	k	l	m	n	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	d	e	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	他	小計							
II	F27-1		2				38	85						0	3				3	6	6	11			1	5	23			1		1	3	5			2	2	2									
	G32-1						1	17						0					0	13		9			1	10					0	4	5	1		10	11	2										
	H29-1		1				8	12						0	4				4	2	2	4		1		7					0	6	6			9	9	2										
	H32-5		5				21	73						0	1				1	28	14	22				39					0	10	12	2		7	9	13										
	K23-1						2	10	2		1		2	5					0	3	1	1				3			1		1		4		2	1	7											
	L32-1							357						0	41				41	47		110		20	35	165					0		2	2		5	7	2										
	AE36-8						8	21	1					1	1				1	9	2	1				3					0	2	3			4	4											
	W46-1		2					8	41						0	1				1	11	1	2				3					0		1	4		4	8										
小計		0	10	0	0	0	86	616	3	0	1	0	2	6	51	0	0	0	51	119	26	160	0	21	36	10	253	0	2	0	2	2	25	34	13	0	2	0	42	57	21							
III	C28-1		2		1		13	42	4					4					0	16	3	3				6			2		2	1	2	2		1	3											
	F34-11		7				22	78	2		5			7	1				1	69	33	24		3		9	69	1	5		6	10	2	1			5	6	1									
	G30-2						31	50						0	4				4	15	3	8				2	13		1		1	5	5	1			11	12	5									
	3号組石	1					8	21			1			1	2				2	12	8	1				1	10				0		2	1			1	2										
	6号組石	1		1	1		55	85	1					1	1				1	16	3	4				3	10		1		1	1		5			8	13										
小計		2	9	1	2	0	129	276	7	0	6	0	0	13	8	0	0	0	8	128	50	40	0	3	0	15	108	1	9	0	10	17	11	10	0	0	0	26	36	6								
IV	K30-1						4	13						0					0	18	12	5			1	18				0	1	2				1	1	2										
V	D32-1						4	13						0					0	7	17	2				19				0	1	4	2			6	8	3										
	D33-1	1	1	1	2		12	21	1					1					0	9	4	1				7				0	1	3				1	1	5										
	E24-1	1		1			4	26	1					0					0	2	3					3			2		2	1				1	1											
	E28-1		1				1	14	1					1	1				1	11	5	3			1	9			2		2		2			2	2	1										
	E31-1			2			8	25	1					1					0	5	3	1				4			1		1	1	1			1	1	1										
	E34-1		1	3	1		8	14						0					0	6	1	1				2			1		1	1	1			1	2	1										
	E34-2						6	10						0					0	4	1	1				1			1		1					2	2											
	E35-4		2				8	17						0	1				1	6	4	4				8				0		3				4	4	1										
	F33-3			3	3	1	23	57	8					8	2		1	3	3	30	28	10			1	15	54			7	1	8	4	2		5	3	8	4									
	G20-2		1	1	1		7	30	4					4	1				1	8	21	4	2	2		1	30		3		3	5		1			5	6	2									
	G22-1						9	16						0					0	17	9	1				10				0		4	3			6	9											
	G22-3						3	9	1	2			1	4					0	7		2			1	3			1		1		2			1	1	1										
	G26-1			1			4	17						0	1				1	6	8	1				9			1		1					1	1											
	I20-3		1				7	19	3					3					0	2	1	2				4			2		2			2	1		1	4	1									
	K34-1				1		4	32						0	1				1	9	4	2				8				0	6	6	7			5	12	8										
	L34-1	1		3			30	57	2				1	3					0	9	11	1				13			3		3	4	2			1	2	1										
	L34-2						3	16	1					1					0	6	1	1				2			1		1		7				0	2										
	1号組石			1			2	12						0	2				2	4	8	2				10			1		1	2	1			2	2	1										
	Z35-5		1			1	2	16	4					4					0	4	4	1				5			1		1	2					0											
	AD34-2	1					2	7						0					0	8	2	1				3			1		1	3		1		3	5	1										
AD35-2			2			7	13						0					0	4	5	1				6			1		1	1		2		2	4	1											
AE36-4		1		1		5	18	3					3	1				1	8	1					1			1		1	2	1		1	3		1	5										
小計		4	9	19	9	1	159	459	30	2	0	0	2	34	10	0	1	11	172	140	42	2	2	3	22	211	0	29	2	31	34	39	18	2	12	0	48	80	34									
VI	E22-1	4		7			14	37						0					0	14	13					13				0	2	1	2		2		1	5										
	Y34-4	3		3	1		13	26	1			1	2	4					0	9	3	3		1		7			2		2	1	4	2		3	5											
	小計	7	0	10	1	0	27	63	1	0	0	1	2	4	0	0	0	0	0	23	16	3	0	1	0	20	0	2	0	2	3	5	4	0	2	0	4	10	0									
VII	AE34-3		1					3	2					2					0	2	1					3				0		1				1		1										
	AE35-3							2						0					0	1	3					3			2		2		1			1		1										
	AE39-1	2	1				2	9		1				1					0	2	3	2				5			1		1	1	1			3		3										
小計	2	2	0	0	0	2	14	2	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	8	3	0	0	0	11	0	3	0	3	1	2	0	0	5	0	0	5	0										
VIII	C26-1						8	19					1	1				0	2	1			1	1	3				0		1				1	2	3											
	F23-2	1	2					5		2				2					0	6	3					4			1		1		1			3	3	1										
	H21-1	1		1	1		16	29	2	5				7					0	10	3	1	6			10			1		1	2		1	1	1	3	1										
	H21-2	1			1		23	54	2	10			1	13					0	12	3		5		1	9			1		1		1				0											
	H21-3			1	2			7						0					0	9	2		1			4				0	1		1		1	1	4											
	H21-8	1					2	7		2				2					0	2	1					1				0	1			1	2		3											
	I20-1	1		1			13	30						0			1		1	8	1	1				5				0		1	1	1		2	4											
	7号組石						7	14	1					1					0	4		1				2			3		3					4	4											
	Z37-1		1	1			6	13		1				1					0	4			2			3				0							0											
	AJ33-1	7		2			24	39	9				3	12					0	8	15	3	3	1		8	30			5		5	2		1													

時期	胎土・産地 器種 小分類	JC			JN				合計	磁器合計
		34	35	合計	2	4	5	合計		
II	F27-1			0	1			1	181	
	G32-1			2				0	95	
	H29-1		1	1				0	65	
	H32-5			0	1			1	265	
	K23-1			0				0	51	
	L32-1			0	7	4		11	721	
	AE36-8			0				0	71	
	W46-1			1				0	85	
小計	0	1	4	9	4	0	13	1534		
III	C28-1			5				0	106	
	F34-11			0				0	510	
	G30-2			0				0	162	
	3号組石			0				0	91	
	6号組石			0				0	200	
小計	0	0	5	0	0	0	0	1069		
IV	K30-1			0				0	127	
V	D32-1			0				0	96	
	D33-1			0				0	72	
	E24-1			0				0	56	
	E28-1			0				0	96	
	E31-1			0				0	63	
	E34-1			0				0	52	
	E34-2			0				0	34	
	E35-4			0				0	80	
	F33-3			0	1			1	411	
	G20-2			0				0	165	
	G22-1			0				0	84	
	G22-3			0				0	47	
	G26-1			0				0	58	
	I20-3			0				0	80	
	K34-1			0				0	121	
	L34-1			0				0	153	
	L34-2			0				0	75	
	1号組石			0				0	83	
Z35-5			0				0	62		
AD34-2			0				0	45		
AD35-2			0				0	53		
AE36-4			0				0	74		
小計	0	0	0	1	0	0	1	2060		
VI	E22-1			0				0	154	
	Y34-4			0				0	110	
	小計	0	0	0	0	0	0	0	264	
VII	AE34-3			0				0	24	
	AE35-3			0				0	36	
	AE39-1			0				0	69	
	小計	0	0	0	0	0	0	0	129	
VIII	C26-1			37				0	85	
	F23-2			12				0	59	
	H21-1	1		38				0	154	
	H21-2			55				0	225	
	H21-3			30				0	92	
	H21-8	1		46				0	80	
	I20-1			14				0	94	
	7号組石			14	1			1	64	
	Z37-1			31				0	82	
	AJ33-1			55				0	284	
	AJ34-1			73				0	250	
	AJ34-2			60				0	304	
	AJ35-1			148				0	491	
	AJ37-2			56				0	214	
小計	2	0	669	1	0	0	1	2478		
IX	AL37-1		1	156	1			1	309	
合計	2	2	834	12	4	0	16	7970		

病院地点出土陶磁器組成表 (5)

時期	胎土・産地 器種 小分類	TA						TB																																	
		1	2	5	6	他	合計	1										2 (皿)					5					9 (香炉)				10	13	14	15	23	26	29			
								a	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	他	小計											
II	F27-1						0	1			1				1		3				1			1	4	2			6			1	1			0			1	1	
	G32-1						0	2	2								4	2						2	3	1			4			1	1			0					
	H29-1						0	1									1							0		1			1							0				1	
	H32-5						0	11	12	3	4			3	33	4								4	8	7	2	4	21			5	1			6			1	1	
	K23-1						0								0				1					1	2	1		1	4							0					
	L32-1						0	4	2						6	1								1	3	4	1	1	12							0		3	5	1	
	AE36-8						0	1	6		1			1	9	1								1	3	2		1	6			3				3				1	
	W46-1						0	6	3				2	11	3									3	1	1		2			1				1						
小計		0	0	0	0	0	0	26	25	4	5	0	3	4	67	11	0	2	0	13	23	19	4	6	4	56	0	11	1	12	0	0	0	0	3	6	4	2	0		
III	C28-1						0				1	1		3	5								0	4	1		1	6			1				1				1		
	F34-11						0	52	39			11		7	3	112	16						16	2	17	6	1	4	30							0	1			3	1
	G30-2						0	3	5	2					10	1							1	3	2			5			1				1						
	3号組石						0	3	3						6	3							3		1			1							0				1		
	6号組石						0	5	7				1		13	5			1				6	3			1	4			1				1				1		
	小計		0	0	0	0	0	0	63	54	3	12	0	11	3	146	25	0	1	0	26	12	21	6	3	4	46	0	3	0	3	1	0	0	0	0	5	2	0	0	
IV	K30-1						0	5	5	2	11		9	32	1							1	1	4		1	6							0							
V	D32-1						0								0								0	1			2	3							0				1		
	D33-1						0						2	1	3								0	2	2		1	5			1				1						
	E24-1						0	1		1					3	1							1	1	1			2							0						
	E28-1						0								0								0	1	1		1	4			1				1						
	E31-1						0		1	1			2		4	2							2	1	2			3							0						
	E34-1						0	1	3	2					6								0	1	1			2							0						
	E34-2						0	1	1	1	1				4								0					0			1				1						
	E35-4						0	3	1		6		1		11	4		1		5		4					4			1				1				1			
	F33-3						0	2	6	6	9		5		28	2				2	1	5	1	3		10			1				1			1	3				
	G20-2						0	1	1	4	3		1		10	2				2	5	3				8					1						1				
	G22-1						0						1		1								0				0							0							
	G22-3						0								0	1							1				0							0							
	G26-1						0								0								0	1	1		1	3							0				1		
	I20-3						0			1	2		1	2	6	1				1	1	3			1		5							0				2			
	K34-1						0	2		6	2				10	2				2	2	3	2	1	2	10							0		1		2		1		
	L34-1						0	1			1		1		3					0	2	3				5							0					1			
	L34-2						0	2							2	1			1				2	1			3							0				1			
	1号組石						0		2		4		1	1	8	1				1	4	2				6							0					1			
	Z35-5						0			3	3		2		8	2				2		1				1							0					1			
	AD34-2						0	3	1	1	1				6	1				1	1	1				2							0								
AD35-2						0							1	1	1				1	2	1				3							1	1								
AE36-4						0	3	1	1	2				7	1				1	3	2	1			6							0									
小計		0	0	0	0	0	0	20	17	27	34	0	18	5	121	22	0	0	2	24	29	36	5	9	6	85	0	5	0	5	0	1	1	2	2	6	9	0	2		
VI	E22-1						0		1	1				2					0	2	1			1	4							0				2					
	Y34-4						0				1				1	1				1					1							0					2				
	小計		0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	3	1	0	0	0	1	2	2	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0		
VII	AE34-3						0	1							1								0			0							0								
	AE35-3						0						1		1						1				1							0						1			
	AE39-1						0								0					1	2				3							0						1			
	小計		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	1	3	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1		
VIII	C26-1						0			1	1			2								0	2	2	1		5							0							
	F23-2						0								0										1		1							0							
	H21-1						0	1							1										1		1							0							
	H21-2						0						1		1												0							0							
	H21-3						0						1		1									1			1							0							
	H21-8						0	2							2												0							0							
	I20-1						0	5	5	2	1			13	1							1				1							0								
	7号組石						0	1							1											0							0					1			
	Z37-1						0								0	1							1	2			2							0							
	AJ33-1						0	1		1					2									2			2							0							
	AJ34-1						0	2		1	1			1	5	1					1	1	1			2			1				1								
	AJ34-2						0	1			4				5								1	1	2	2		4							0						
	AJ35-1						0	2	1		1		1		5	1					1	1	1			3							0								
AJ37-2						0			1					1											0							0									

時期	胎土・産地 器種 小分類	TB										35	合計	陶器合計	総計
		33		34					小計						
		小計	a	b	c	d	e	他	小計	小計					
II	F27-1	0										0	1	63	244
	G32-1	0										0	0	43	138
	H29-1	0										0	0	9	74
	H32-5	0										0	0	142	407
	K23-1	0										0	0	41	92
	L32-1	0										0	0	77	798
	AE36-8	0										0	0	67	138
	W46-1	0									1	1	3	47	132
小計	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4	489	2023		
III	C28-1	2							1		1	5	75	181	
	F34-11	0									0	0	301	811	
	G30-2	0									0	2	47	209	
	3号組石	0									0	0	35	126	
	6号組石	1								3	3	4	97	297	
	小計	3	0	0	0	0	1	3	4	0	11	555	1624		
IV	K30-1	0									0	0	102	229	
V	D32-1	1									0	1	37	133	
	D33-1	1	1								2	3	4	118	190
	E24-1	1										0	2	84	140
	E28-1	0									0	0	42	138	
	E31-1	0								1	1	1	52	115	
	E34-1	1							2	1	3	1	5	80	132
	E34-2	2								2	2	4	83	117	
	E35-4	0									0	0	49	129	
	F33-3	0									0	0	193	604	
	G20-2	1									0	1	97	262	
	G22-1	1								1	1	2	19	103	
	G22-3	2	3		1					3	7	10	37	84	
	G26-1	2									0	3	56	114	
	I20-3	0									0	0	59	139	
	K34-1	2									0	2	103	224	
	L34-1	0									0	0	145	298	
	L34-2	0							1	1	2	2	60	135	
	1号組石	1								1	1	2	60	143	
	Z35-5	0									0	0	83	145	
	AD34-2	0									0	0	45	90	
AD35-2	1								1	1	2	3	97	150	
AE36-4	5		1			1				1	3	8	115	189	
小計	21	4	1	1	1	4	14	25	1	50	1714	3774			
VI	E22-1	3							7	1	8	1	13	178	332
	Y34-4	1					1	2	1	4	5	134	244		
	小計	4	0	0	0	1	9	2	12	1	18	312	576		
VII	AE34-3	3							2	3	5	9	48	72	
	AE35-3	2						1	1	2	4	32	68		
	AE39-1	0							7	7	9	81	150		
	小計	5	0	0	0	1	2	11	14	0	22	161	290		
VIII	C26-1	8	2			1	3	5	11	20	76	161			
	F23-2	1	2	1	1			5	9	11	35	94			
	H21-1	13	6	2				1	10	19	34	117	271		
	H21-2	15	5		2			4	7	18	34	103	328		
	H21-3	14	5	1	2			2	11	21	35	86	178		
	H21-8	7	1		3	1			4	9	22	69	149		
	I20-1	9	1		1				5	7	16	111	205		
	7号組石	3	2		3			1	9	15	18	53	117		
	Z37-1	7	5	2				2	10	19	26	73	155		
	AJ33-1	10	6			1	10	7	24	36	200	484			
	AJ34-1	7	7		1	3	5	18	34	41	182	432			
	AJ34-2	17	2		2	5	4	8	21	4	42	192	496		
	AJ35-1	15	5		1	2	13	12	33	6	55	240	731		
	AJ37-2	5	4			1	4	6	15	21	124	338			
小計	131	53	6	16	14	49	117	255	10	411	1661	4139			
IX	AL37-1	17	4	10	3	4	3	6	30	54	155	464			
合計	181	61	17	20	21	68	154	341	12	570	5149	13119			

病院地点出土陶磁器組成表 (12)

時期	器種 遺構名	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39																																						合計
II	F27-1	36	91	0	3	14	25	1	3	10	2	2	5	6	6	15	0	0	0	1	0	0	0	4	0	0	5	0	0	19	0	0	0	0	0	1	0	0	244	
	G32-1	16	20	0	0	19	12	0	4	7	11	2	4	11	9	9	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	7	1	0	11	0	0	0	0	0	0	0	1	0	138
	H29-1	10	13	0	4	3	7	0	6	6	9	2	2	2	2	6	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	74
	H32-5	87	99	0	1	57	39	0	10	30	9	14	2	7	18	32	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	15	0	0	0	0	0	0	0	1	0	407
	K23-1	16	27	5	0	12	3	1	0	0	7	0	0	5	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	92
	L32-1	64	389	0	45	69	167	0	0	3	7	3	1	0	22	11	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	21	2	0	12	0	0	0	0	0	1	2	0	798
	AE36-8	44	30	1	1	15	4	0	2	10	4	1	2	2	0	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	138
	W46-1	31	44	0	1	24	3	0	0	3	8	0	0	2	2	8	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	5	0	0	0	0	1	0	0	0	132	
小計	304	713	6	55	213	260	2	25	69	57	24	16	35	62	94	0	1	1	4	0	1	2	7	0	3	42	4	0	76	0	0	0	0	1	3	2	3	0	2023	
III	C28-1	37	46	4	1	26	8	2	1	5	5	1	1	6	8	13	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	3	1	0	14	0	0	0	2	1	1	0	0	181	
	F34-11	357	109	7	2	102	73	6	10	13	9	2	10	18	21	19	0	0	5	0	0	0	0	2	0	6	3	0	0	55	0	0	0	0	0	2	0	1	0	811
	G30-2	49	51	0	4	20	14	1	5	9	12	5	3	12	10	9	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	209
	3号組石	35	25	1	2	14	10	0	0	3	2	0	1	8	2	12	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	126
	6号組石	89	100	1	1	28	11	1	1	6	13	0	1	7	5	9	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	2	0	0	20	0	0	0	1	3	0	0	297
	小計	567	331	13	10	190	116	10	17	36	41	8	16	51	46	62	0	4	5	3	0	1	1	6	0	7	9	1	1	107	0	0	0	3	4	3	0	1	0	1624
IV	K30-1	123	14	0	0	26	18	0	1	5	1	2	3	3	3	6	0	0	1	2	0	0	0	0	0	2	1	1	0	18	0	0	0	0	0	2	0	0	0	229
V	D32-1	19	15	0	0	10	20	0	1	8	8	3	5	13	11	8	0	1	2	0	0	0	0	4	1	0	5	1	3	0	4	0	0	1	1	0	0	0	133	
	D33-1	61	22	1	0	26	8	0	2	12	3	6	2	4	4	8	0	1	3	0	0	1	3	3	0	2	2	0	1	13	1	0	0	1	3	1	0	0	190	
	E24-1	52	29	1	0	12	4	2	2	4	1	1	1	2	1	1	5	0	0	0	1	0	0	1	4	0	0	4	2	1	10	0	0	0	1	0	0	0	140	
	E28-1	42	17	1	1	21	9	2	0	7	2	1	5	11	9	7	0	0	1	0	0	0	1	2	0	3	2	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	138	
	E31-1	29	28	1	0	15	4	1	1	3	1	1	3	7	9	4	0	0	0	0	0	0	3	1	0	1	2	1	0	6	0	0	2	0	1	0	0	0	115	
	E34-1	52	15	0	0	15	2	1	1	5	2	1	3	2	12	7	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	6	0	0	11	0	0	1	1	3	1	0	0	132	
	E34-2	62	12	0	0	10	3	1	0	5	2	0	1	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	9	0	0	0	2	2	0	0	0	117	
	E35-4	47	23	0	2	16	8	0	0	5	4	1	2	6	0	4	0	0	0	1	0	0	3	2	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	129	
	F33-3	291	63	8	3	47	56	8	4	16	8	5	4	30	36	11	0	2	5	2	0	0	2	8	0	3	5	1	0	20	0	0	0	0	0	1	0	0	604	
	G20-2	103	39	4	1	24	30	3	5	7	6	2	0	7	12	2	0	1	1	0	0	1	0	2	1	0	2	1	0	18	0	0	1	1	0	0	0	0	262	
	G22-1	18	16	0	0	17	10	0	1	6	9	0	7	6	8	4	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	103	
	G22-3	20	11	4	0	12	3	1	0	4	1	1	4	3	6	1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	2	0	0	2	0	0	0	2	7	0	0	0	84	
	G26-1	45	17	0	1	12	10	1	0	2	1	0	1	3	4	4	5	0	0	0	0	0	0	2	2	0	1	1	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	114	
	I20-3	56	25	3	0	8	5	2	1	2	6	1	3	4	5	5	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	4	0	0	9	0	0	0	0	0	1	0	0	139	
	K34-1	59	37	0	2	29	9	0	7	12	13	8	6	6	7	12	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	3	1	0	14	0	0	0	2	0	0	0	0	224	
	L34-1	113	63	3	0	27	14	3	4	8	3	1	0	6	13	13	0	0	1	1	0	0	2	1	0	1	8	1	1	23	0	0	0	0	1	0	0	0	298	
	L34-2	42	20	1	0	13	3	1	0	11	0	2	3	16	12	3	0	1	1	0	0	1	3	2	1	0	3	0	0	5	0	0	0	1	2	0	0	0	135	
	1号組石	46	17	0	2	13	11	1	2	10	2	1	0	9	4	9	0	1	0	1	0	0	3	2	0	1	0	0	0	9	0	0	1	1	1	0	0	0	143	
	Z35-5	70	19	4	0	7	7	1	2	1	0	0	1	5	2	8	0	0	0	1	0	0	0	4	0	4	1	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	145	
	AD34-2	32	8	0	1	13	6	1	3	4	5	2	1	2	2	2	0	0	0	1	0	0	1	3	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90	
AD35-2	61	15	0	0	18	9	1	2	3	4	1	2	2	4	4	0	3	1	0	0	0	2	1	0	1	5	0	0	7	1	0	0	2	3	2	0	0	150		
AE36-4	73	20	3	1	20	3	1	3	5	5	2	2	4	8	3	0	1	1	1	0	0	4	3	1	1	5	1	1	13	1	0	1	7	3	0	0	0	189		
小計	1393	531	34	14	385	234	31	41	140	86	40	56	148	172	129	1	12	17	10	0	6	38	50	5	27	61	12	5	197	3	0	8	26	27	6	0	0	3774		
VI	E22-1	152	39	0	1	31	14	0	2	8	5	1	3	10	19	8	0	1	0	2	0	1	0	7	1	1	11	3	1	18	0	0	0	3	8	1	0	0	332	
	Y34-4	104	34	4	0	16	7	2	1	7	5	2	1	5	9	8	0	2	0	1	0	0	0	7	0	0	8	4	0	17	3	0	1	1	4	0	0	0	244	
	小計	256	73	4	1	47	21	2	3	15	10	3	4	15	28	16	0	3	0	3	0	1	0	14	1	1	19	7	1	35	3	0	1	4	12	1	0	0	576	
VII	AE34-3	33	6	2	0	4	3	0	0	1	1	0	1	2	3	1	0	2	1	0	0	3	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3	5	0	0	0	72	
	AE35-3	31	2	0	0	2	3	2	0	2	1	0	1	4	4	0	0	0	1	0	0	3	0	1	1	0	3	0	0	6	0	1	0	2	2	0	0	0	68	
	AE39-1	69	10	1	0	13	11	1	1	3	3	0	1	3	6	6	0	1	1	0	0	1	1	2	0	0	7	2	0	6	0	0	0	0	7	0	0	0	150	
小計	133	18	3	0	19	17	3	1	6	5	0	3	9	13	7	0	3	3	0	0	7	2	3	1	0	11	2	0	13	0	1	0	5	14	0	0	0	290		
VIII	C26-1	40	24	4	2	13	12	1	1	3	6	0	0	2	10	3	4	0	0	0	1	2	5	0	1	1	4	2	0	11	0	0	0	8	11	0	0	0	161	
	F23-2	26	9	2	0	13																																		

